

# 法華三部經のあらましと要点

## むりょうぎきょう 無量義經

《無量義經》の内容は、お釈迦さまが《妙法蓮華經》の内容をお説きになる直前に、おなじくマガダ国王舎城郊外の靈鷲山でお説きになったものです。そのあとで、ながい三昧にはいられ、その三昧を終えられてから、いよいよ《妙法蓮華經》を説きはじめられたのです。

そういうなりゆきから推しても、法華三部經の主軸である《妙法蓮華經》を学ぶまえに、まずこの《無量義經》を読むのが慎重な態度であることが考えられますが、じっさいに教義の内容にたちいってみても、《無量義經》からはいってこそ《妙法蓮華經》もほんとうによく理解できることを、しみじみ感じさせられます。

### むりょうぎ 無量義とは

このお經の題名の無量義とはどんな意味かといいますと、数がぎりない意味をもった教えと直訳できます。そして、この《無量義經》の中で、その数がぎりない意味をもった教えはただひとつの真理から出てくるのだということが説かれてあります。そのひとつの真理というのは無相ということですが、それについて詳しくはおっしゃっておられません。それで、どうもはっきり解らないのです。では、どこでそれが解決されるのか。もちろん、次に説かれる《妙法蓮華經》においてなのです。《妙法蓮華經》で、それをあますところなくお説きになれるわけです。そして、その数がぎりない教えは、せんじつめればこの《妙法蓮華經》に説く真理に帰するのだと、ご一代のご説法の中でも最も中心になる教えを、ここで明らかにしていってやるのです。

つまり、《無量義經》の中心である《説法品第二》は、釈尊が大莊嚴菩薩の質問に対してお答えになったものですから、よほど修行を積んだ菩薩たちでなければ、しんそこから理解できないものだったのです。さればこそ、釈尊のみ心の中には、つぎの説法の順序がちゃんと立てられてあったのです。すなわち、この《無量義經》を説かれてから、いよいよその教えの根本である無相すなわち実相ということについて、どんな人にも解るように、あらゆる角度からお説きになったのが《妙法蓮華經》にほかなりません。つまり、そこではじめて究極の真理を一般の人びとのために説き明かされたわけです。そういうわけで、《無量義經》は、それ以前の方便經からいよいよ眞実經の《妙法

蓮華經》を開き出すものであり、《妙法蓮華經》もこの《無量義經》からはいつてこそほんとうによく理解できるという関係から、《妙法蓮華經》の開經といわれているのです。

## 徳行品第一

この品は、大莊嚴菩薩というお方が、仏さまの完全円満な徳と、衆生済度の行を賛歎もうしあげる章です。

### 釈尊のお徳への賛歎

大莊嚴菩薩は、現身のお釈迦さまのお顔やおからだの、いわゆる仏の三十二相のりっぱさをほめたたえます。それはつまり、色身に表現されている完全な人格への賛歎にほかなりません。そして、それにつづいて、つぎのようにもうしあげています。

「仏さまはこのような妙相をそなえたお方ではありますが、じつは相にあらわれるとあらわれないとかということを超越した存在であられ、凡夫の眼では、どうていその本質を見ることはできないのです。

衆生の本質も、やはりそのとおりなのですが、相ある身としてのあらわれかたがよくありません。仏さまは無限の徳をそなえておいでになり、その徳をお相にあらわしてください。おおぜいの人々が歡喜して礼拝し、歸依し、尊敬し、心をこめてうやうやしく対したてまつるようになるのでございます。それというのも、仏さまがどんなに悟られても、これで十分だというお気持ちを起こさず、修行に修行を積まれたからでありまして、その結果、このような、えもいわれぬ美しいお相を成就されたものとぞんじます。このようにして、ほんとうは相のない身であられるのに、相ある身として出現されるところが、わたくしどもにとって、まことにありがたいこととございます」

ここに注目すべき点が二つあります。

第一は、衆生の相も、本質的にはやはりそのとおりであるということです。衆生も本質的には仏さまとおなじなのですが、修行が足らず、迷いに満ちているために、現実の身としてのあらわれは、仏さまとは比較にならぬ醜さであり、貧弱さです。本質的に仏さまとおなじならば、現象としてのあらわれも仏さまと同一になる可能性はあるわけですから、一面においては絶大な希望をもつことができ、一面においてはおおいに反省しなければならぬわけです。

法華三部經は、終始そういう思想につらぬかれています。ですから、まずこの本質の平等相と現象としての差別相ということをしつかり胸に刻んでおくことが、法華三部經を読むためにたいせつな準備となるのであります。

第二に、「(仏さまが)相ある身として出現されるところが、わたくしどもにとっては、まことにありがたいことです」ということです。

お釈迦さまがこの世にお出になり、修行に修行をかさねられた結果、あのような完成さ

れた人格の持ち主となられ、仏の境地にたっせられたという生きた実例があるのですから、われわれとしてはその真似をしてゆきさえすればよいのであって、釈迦さまがたいへんご苦労なさってたどられた道程よりはずっと容易に、仏への道をすすむことができるわけです。ここにお釈迦さまのご出世のありがたさがあるのです。

それゆえ、われわれは、心に大歡喜をいだいて、お釈迦さまのおすがたを礼拝し、その教えを受持することによって、法身であられる仏さまのなかへ溶け入っていくことができるわけです。すなわち、正しい本尊観が、この大莊嚴菩薩のことばに暗示されているわけでありませう。

## 説法品第二

そこで大莊嚴菩薩は、仏さまに「わたくしども菩薩が、まわり道をしないで、まっすぐに仏の境地へたつするためには、どんな修行をしたらよろしいのでしょうか」と質問します。それにたいして、つぎのようにお教えになるのです。

「無量義という法門こそ、みなさんを最高無上の悟りへみちびくものです。それはどんな法門かといいますが、まずつぎのことを見極めることからはじまります。

### 性・相・空・寂

すなわち、この世のあらゆるものごとのありようは一切が平等で、つねに大きな調和を保っているということです。われわれが肉眼で見る現象は、大きいとか小さいとか、生ずるとか滅するとか、止まっているとか動いているとか、さまざまな差別や変化があるように見えますが、その根本においては、ちょうど虚空というものがどこをとってもおなじであるように、ただ一つの真理（法）にもとづくものであることを見極めねばならないのです」

これがすべてのものごとは性相空寂であるという教えです。性とは、ものごとの性質をいい、相とは、その性質が表に現われた相をいいます。

空とは、すべてのものごとは縁起の法則によって存在しているのであって、あるものが絶対的存在であるとか、すべてのものごとの根源の存在である、というものは何もないということです。そのことから、すべてのものごとはその本質においては、平等であるという意味にもなります。寂とは、大調和した状態をいいます。すべてのものが生々発展しながらも大きく調和している、はつらつとした理想の状態のことです。

お釈迦さまは、なおおことばをつづけられ、

「ところが、おおくの人びとはこの真理を知らず、目の前にあらわれた現象だけを見て、これは得だ、これは損だなどと勝手な計算をして、不善の心を起こし、さまざまな悪い行為をし、そのためにさまざまな苦しみを受けるばかりで、いつまでたっても、その誤った境界から抜け出ることができないのです。

菩薩のみなさん。このことをはっきり見極めて、衆生にたいするあわれみの心を起こし、人びとを苦しみから完全に救いだしてあげようと決心しなさい。その目的を果たすために、またまた深く一切のものごとの実相を見極める修行をすることがたいせつです」

と、人生苦の根本原因を示され、人間の苦しみを救う菩薩としての根本的な心がまえをお教えられます。そして、こんどは、現象面における差別の相や、その移り変わる状態をもよく観察せよと教えられて、つぎのようにお説きになります。

「おおくの<sup>ひと</sup>人びとの<sup>きこん</sup>機根や、<sup>せいしつ</sup>性質や、<sup>よくぼう</sup>欲望の<sup>すがた</sup>相をしっかりと<sup>かんさつ</sup>観察しなければなりません。<sup>ひと</sup>人びとの<sup>きこん</sup>機根も、<sup>せいしつ</sup>性質も、<sup>よくぼう</sup>欲望も<sup>せん さばんべつ</sup>干差万別ですから、それぞれの<sup>ひと</sup>人に<sup>と</sup>説く<sup>おし</sup>教えも、<sup>とうぜんせん さばんべつ</sup>当然干差万別に<sup>べつ</sup>ならざるを<sup>え</sup>えません。

### 無量義は一法より生ず

ところが、その<sup>かず</sup>数が<sup>ぎり</sup>ぎりない、<sup>せん さばんべつ</sup>干差万別の<sup>おし</sup>教えも、もともとは一つの<sup>しんり</sup>真理(法)から<sup>しょう</sup>生ずるものでなければなりません。そのただ一つの<sup>しんり</sup>真理とは、すなわち<sup>むそう</sup>無相(特定の相のないもの)であり、そのような<sup>むそう</sup>無相は一切の<sup>いっさい</sup>差別がなく、<sup>さべつ</sup>差別をつくらないもの(不相)であり、<sup>いっさい</sup>一切の<sup>さべつ</sup>差別をつくらないから、<sup>いっさい</sup>一切が<sup>びやうどう</sup>平等であり、これを<sup>な</sup>名づけて<sup>じっそう</sup>実相というのです。

ここに、<sup>ぶつぼう</sup>仏法における<sup>じっそう</sup>実相 ということばの<sup>いみ</sup>意味が、ハッキリと<sup>しめ</sup>示されています。ふつう<sup>じっそう</sup>実相といえは、<sup>ほんとう</sup>ほんとうの<sup>すがた</sup>相 といふ<sup>いみ</sup>ぐらいの意味に<sup>かい</sup>解されていますが、<sup>しよ</sup>諸<sup>ぼうじっそう</sup>法実相などという<sup>ばあい</sup>場合の<sup>じっそう</sup>実相 というのは、このような<sup>しんえん</sup>深遠な<sup>いみ</sup>意味であることを<sup>きおく</sup>記憶しておかなければなりません。ですから、<sup>ほんぶ</sup>凡夫にとって<sup>じっそう</sup>実相 ということばを<sup>ほんとう</sup>ほんとうに<sup>りかい</sup>理解することは、ここでは<sup>まだ</sup>まだできないのです。

さらに<sup>だいしやうごん</sup>大莊嚴菩薩は次のように<sup>と</sup>問います。

「<sup>せそん</sup>世尊は、いまあらためて<sup>むりやうぎ</sup>無量義の<sup>おし</sup>教えをお<sup>と</sup>説き<sup>くだ</sup>さいました。(それは<sup>こんぽん</sup>根本において、いままでの<sup>おし</sup>教えと<sup>か</sup>変わりはないように<sup>ぞん</sup>ぞんじますが)いままでの<sup>おし</sup>教えの<sup>ないよう</sup>内容と<sup>どこ</sup>どこがちがうために、この<sup>むりやうぎ</sup>無量義の<sup>おし</sup>教えを<sup>おさ</sup>修め<sup>さ</sup>えすれば、<sup>むじやう</sup>まっすぐに<sup>さと</sup>無上の<sup>き</sup>悟りへ<sup>た</sup>たつことができるとおおせになるのでしょうか」

そこで<sup>しゃか</sup>釈迦さまは、<sup>たいい</sup>つぎのような<sup>こた</sup>大意のお<sup>こた</sup>答えを<sup>な</sup>なさいます。

「わたしが<sup>ぼだいじゆげ</sup>菩提樹下で<sup>ぼとけ</sup>仏の<sup>さと</sup>悟りを得て、<sup>え</sup>世の<sup>よ</sup>一切の<sup>いっさい</sup>ことが<sup>な</sup>ながめて<sup>み</sup>みますと、いまの<sup>だんかい</sup>段階の<sup>しゆじやう</sup>衆生に<sup>たい</sup>たいして、その<sup>さと</sup>悟りをその<sup>ま</sup>まま<sup>と</sup>説くのは<sup>かえ</sup>かえって<sup>よく</sup>よくないという<sup>けつろん</sup>結論に<sup>た</sup>たせざるを<sup>え</sup>えませんでした。それゆえ、<sup>しゆじやう</sup>衆生の<sup>きやうぐう</sup>境遇や、<sup>きこん</sup>機根や、<sup>せいしつ</sup>性質や、<sup>よくぼう</sup>欲望に<sup>お</sup>応じて、それに<sup>と</sup>ふさわしい<sup>と</sup>説き<sup>か</sup>たをし、それぞれに<sup>すく</sup>救い<sup>み</sup>みちびいてきたのです。

### 四十余年には未だ眞實を顕さず

そういう<sup>ふう</sup>ふうに、<sup>しゆじやう</sup>衆生の<sup>ていど</sup>程度に<sup>お</sup>応じた<sup>と</sup>説き<sup>か</sup>たをして<sup>い</sup>いますと、<sup>どう</sup>どうしても<sup>ほう</sup>法の<sup>しんじつ</sup>眞實の<sup>すべて</sup>すべてを<sup>あ</sup>うち<sup>き</sup>明ける<sup>かい</sup>機会<sup>は</sup>は<sup>な</sup>なかなか<sup>ない</sup>ないもので<sup>あ</sup>あって、<sup>つ</sup>ついにこの<sup>よねんかん</sup>四十余年間、<sup>きやうきよく</sup>究極の<sup>しん</sup>眞理を<sup>す</sup>すっかり<sup>と</sup>説き<sup>あ</sup>明かす<sup>こと</sup>なく<sup>あ</sup>過ぎ<sup>す</sup>した<sup>わけ</sup>わけです。

わたしが<sup>と</sup>いままで<sup>しんり</sup>説いてきた<sup>こと</sup>は、<sup>すべて</sup>すべて<sup>お</sup>おなじ<sup>しんり</sup>眞理にも<sup>と</sup>とづく<sup>もの</sup>ものです。しかし、たとえば、<sup>みず</sup>どこの<sup>みず</sup>水でも<sup>みず</sup>水である<sup>こと</sup>に<sup>か</sup>変わりは<sup>あ</sup>ありませんが、<sup>たにがわ</sup>谷川と、<sup>いけ</sup>みぞと、<sup>たい</sup>池と、<sup>かい</sup>大<sup>かい</sup>海とは<sup>お</sup>おのずから<sup>ちが</sup>ちがう<sup>よう</sup>ように、わたしの<sup>おし</sup>教えも、<sup>はじ</sup>初めの<sup>ころ</sup>ころの<sup>おし</sup>教えと、<sup>なか</sup>中<sup>ごろ</sup>ごろの<sup>おし</sup>教えと、

いま説く教えと、まったく同一だとはいえません。ことばのうえではおなじように見えても、内容の深さにおいてちがっているのです。

一切の諸仏の説く真理というものは、ただ一つしかありません。その一つの真理を、おおくの人びとが心に求めるものごとに応じて、さまざまな説きかたをするのです。また、仏の本体というのもただ一つなのです。その一つの身が無数の身に変わり、そのひとつひとつの身が、また無数のはたらきの変化を示します。これがすなわち、仏というものの不可思議な境地なのです。声聞や縁覚程度の悟りの人はもちろんのこと、ほとんど仏に近くなった菩薩ですら、その境地をほんとうに知ることはできません。仏になってはじめて究めつくされる境地であり、ただ仏だけがほんとうに知りうるものです。その仏の悟りを得るためには、どうしても、いま説いた無量義ということを深く深く観じ、身につけなければならないのです」

なるほどそのとおりです。すべてのものごとは性相空寂であり、一法より生じていると教えられてみると、頭のうえでは大体わかります。しかし、それはあくまでも大体であって、しんそこからハッキリわかったといいきる人はまずありますまい。そのことを明らかに見きわめるとなると、仏と同等の智慧をそなえなければできるところではありません。そうなったらすでに仏です。ですから仏さまは、《方便品第二》で唯仏と仏と乃し能く諸法の実相を究尽したまえりとおおせられたわけです。

だからといって、われわれは絶望してはなりません。お弟子のなかで智慧第一といわれた舍利弗でさえ、この《無量義經》のお説法では、まだ悟りをひらけなかったのです。それゆえお釈迦さまは、このあとで《妙法蓮華經》を根気よくお説きになって、一切衆生をその悟りへみちびいてくださるのです。ですから、この《無量義經》を読んで、すっかりわからなくても、かまいません。ここではすべてのものごとの実相ということについて、おぼろげながらも頭にえがくことができれば、それで十分としなければなりません。

## 十功德品第三

この品には、このお経に説かれた教えを理解し、実践すれば、どんな精神的な功德があるか、どんな善い行ないができるか、どんなに世のためひとのために役立つことができるかということが説かれてあります。

まず大莊嚴菩薩が、「この教えはどこから出て、どういう目的へむかってすすみ、どこに住みつくのをございましょうか」という質問をもうしあげたのにたいして、つぎのようにお答えになります。

「この教えの源<sup>みなもと</sup>といえば、ほかでもありません。諸仏の心の奥から溢<sup>あふ</sup>れ出たものです。なにを目的として説かれたのかといえば、それは一切の人びとに最高無上の悟り<sup>さと</sup>（仏の智慧）を求め<sup>もと</sup>る心<sup>こころ</sup>を起<sup>お</sup>こさせるためです。また、この教えはどこに住みつくのかといいますと、人びとが菩薩行を行なうその実践の中にこそ住するのであります」

### 諸仏の願い

諸仏の心の奥<sup>おく</sup>というのは、すべてのものの生命<sup>いのち</sup>を、そのほんらいのすがたのとおり、ほんらいの使命<sup>しめい</sup>のとおり<sup>い</sup>に生かしたいという願いです。これは諸仏がもっている根本<sup>こんぽん</sup>の願いであって、人間もその諸仏の願いに即して生きていけば悩みもわずらいもないはずなのに、わがままな我にとらわれ、その我執<sup>がしゅう</sup>にしたがって行動<sup>こうどう</sup>するために、みずから苦悩<sup>くろう</sup>を招<sup>まね</sup>いているわけです。

諸仏の悟りとは、この世の万物・万象<sup>ばんぶつ ばんしょう</sup>がほんらいの使命<sup>しめい</sup>のとおり<sup>い</sup>に存在<sup>そんざい</sup>し生きる道<sup>みち</sup>を、あらゆる場合<sup>ばあい</sup>に即して悟<sup>さと</sup>られたものである ということができるのです。

これを人間に即して、一言<sup>いちごん</sup>でいえば、あるがままに生きる というほんとうの生きかたを悟<sup>さと</sup>られたわけです。ところが、凡夫<sup>ぼんぶ</sup>にはどうすれば あるがままに生きる ことができるのか、よくわかりませんので、お釈迦さまは、それぞれの人の場合<sup>ばあい</sup>に応<sup>お</sup>じ、さまざまに説き<sup>と</sup>きわけて、それをお教え<sup>おし</sup>になりました。それを方便<sup>ほうべん</sup>の教え<sup>おし</sup> といいます。

方便<sup>ほうべん</sup>（ほうべん）の教え<sup>おし</sup> もひじょうに尊<sup>とうと</sup>い、ありがたいものでありますけれども、それだけでは、その人の環境<sup>かんきょう</sup>や立場<sup>たちば</sup>に変化<sup>へんか</sup>が生<sup>しょう</sup>ずれば、その場の事情<sup>じじょう</sup>にピタリと当てはまらないことが起<sup>お</sup>こり、当惑<sup>とうわく</sup>することもありえます。

### 菩提心を起こさせる

それゆえ、心ある人は当然<sup>とうぜん</sup>、いかなる人のいかなる場合<sup>ばあい</sup>にもあてはまる最高無上の真理<sup>さいこうむじょう しん</sup>を求め<sup>もと</sup>る心<sup>こころ</sup>を起<sup>お</sup>こすことになります。それを菩提心<sup>ぼだいしん</sup>を起<sup>お</sup>こす といいますが、この

無量義の教えは、その菩提心を起こすことを目的としているのだとおおせられているわけです。

実践してこそ真価を発揮する

つぎに、この教えはどこに住みつくのかというのは、つまり、この教えはどこに在るの  
がほんとうか、どこにおればもっとも真価を発揮するかということです。その住するところ  
は、書物のなかでもありません。頭脳のなかでもありません。実践のなかにこそあるの  
です。実践してこそ、この教えの生命は発現するというのです。

以上の三つのことは、たんに無量義の教えばかりでなく、あらゆる大乘の教えに共通  
の重大な要素ですから、ここでしっかり頭に入れておくことがかんじんです。

それから、お釈迦さまは、この教えのもつ十の功德をお説きになるわけですが、なかで  
もつぎの第一の功德がもっともたいせつです。

第一に、是の經は能く菩薩の未だ発心せざる者をして菩提心を発さしめ、慈仁なき者には  
慈心を起さしめ、殺戮を好む者には大悲の心を起さしめ、嫉妬を生ずる者には随喜の  
心を起さしめ、愛著ある者には能捨の心を起さしめ、諸の慳貪の者には布施の心を起  
さしめ、憍慢(きょうまん)多き者には持戒の心を起さしめ、瞋恚盛んなる者には忍辱の  
心を起さしめ、懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ、諸の散乱の者には禅定の  
心を起さしめ、愚癡多き者には智慧の心を起さしめ、未だ彼を度すること能わざる者  
には彼を度する心を起さしめ、十悪を行ずる者には十善の心を起さしめ、有為を樂う者  
には無為の心を志さしめ、退心ある者には不退の心を作さしめ、有漏を為す者には無漏  
の心を起さしめ、煩惱多き者には除滅の心を起さしむ。善男子、是れを是の經の第一の  
功德不思議の力と名く

意味はもうよくおわかりのこととおもいますが、なぜ《無量義經》の教えにそのよう  
な功德があるのかという理由を、よくわきまえておくことがたいせつだとおもいます。

# みょう ほう れん げ きょう 妙法蓮華經

## じょ ほん だい いち 序品第一

### じょ ほん い ぎ ない いう 序品の意義と内容

序品というのは、いとぐちの章という意味です。これからはじまる、ひじょうに長い説法のいとぐちになる部分です。だからといって、けっして内容が希薄なわけではありません。そこには、これから説かれるであろう大真理の暗示があります。伏線が秘められています。はじめて《妙法蓮華經》の説法を聞く人なら、その暗示や伏線を、わけがわからぬままに素直に受けとり、ただつよい印象を感じるだけでいいのですが、このお経をくりかえして学び、ひとにも伝えようとする人は、その暗示や伏線をハッキリとみとめ、それが意味するものをちゃんと知っておくことが必要です。ですから、いとぐちの章であるからといって、軽く考えてはならないのであります。

さて、《無量義經》の説法を終えられたお釈迦さまは、そのまま深い三昧におはいりになりました。菩薩たちをはじめ、出家・在家の修行者から、バラモンの神々・人間以外の鬼神までをふくむ会衆一同が、そのおすがたを合掌のうちに仰ぎ見えていますと、とつぜんお釈迦さまの眉間にある白毫相(白い渦毛)からパッと一條の光が放たれました。その光は、地球上のすみずみまではもちろんのこと、空のかなたにあるさまざまな世界から、地の底の無間地獄までをくまなく照らしました。

その不思議な出来事に、一同はただ驚嘆するばかりでしたが、弥勒菩薩だけは、いったいどういうわけなのだろうか と、しきりに小首をかしげました。どうしてもわからないので、大先輩であり、智慧のかたまりである文殊菩薩に質問してみたのです。

すると文殊菩薩は、はるかなむかしにおられた日月燈明仏という仏さまの話をはじめました。その仏さまのおときになった教えについても、説明してきかせました。しかも、おどろくべきことには、その仏さまがなくなると、また日月燈明仏という仏さまが出現され、つぎつぎに二万もの日月燈明仏が出られたというのです。

「その最後の日月燈明仏が、人びとのために無量義という教えをお説きになってから三昧におはいりになると、いまのお釈迦さまとおなじように、眉間の白毫相から大光明を放たれ、無数の世界がくまなく照らされた」と……と、文殊菩薩の話はつづきます。そして、「その三昧からたちあがられた日月燈明仏は、妙法蓮華というすばらしい教えをお説きになり、その夜半に入滅された」というのです。

「そういうむかしの例によって考えれば、お釈迦さまもこれからきっと、すべての人を救

い世の中をほんとうに正しく美しくする 妙法蓮華の教えをお説きになるにちがいない」と、文殊菩薩が結論づけて、この品は終わりとなるのです。

### 法華經の形式

このあらすじでもわかるように、《法華經》はひとつのドラマ(劇)のような形に構成されており、そのなかには、ふつうでは考えられないような不思議な出来事がつぎつぎに展開されてゆきます。それは、おそらく、お釈迦さまのお説きになった深遠な真理(妙法)をそのまま説明したのでは、当時の一般大衆はとうていついていけなかったために、象徴的な手法と、ドラマという親しみやすい形式をとって大衆の心を揺り動かす、しだいに妙法へ近づけてゆこうと、このお經の編集者が意図したのだろうと推測されます。まず、このことを理解しておくことがたいせつです。

## ほう べん ほん だい に 方便品第二

この品は、《如来寿量品第十六》とともに、むかしから《法華經》の大きな中心をなすものとされています。なぜ、そんなにたいせつなのでしょう。そのことに気を配りながら、まずこの品のあらましをたどってみることにしましょう。

ずっと三昧にはいっておられたお釈迦さまは、ようやくそれを終えられますと、だれの質問をも待たずに、説法をおはじめになりました。まずお釈迦さまは、仏の智慧というものはひじょうに奥深いものであって、この宇宙のギリギリの根本真理を悟ったものである、そして、その根本真理はあまりにも深遠でふつうの人には理解できないので、これまでは人びとの理解力にに応じてさまざまな教えに説き分けてきた。人びとはそれによっていちおうは救いにたっしたけれども、それらの教えの奥にある真意はだれも知らなかったということ力を説かれます。

### じゅうによぜ いちねんさんぜん 十 如是と一念三千

ここまでお説きになりますと、急に黙りこんでしまわれました。ややあって、ふたたびお口をひらかれ、つぎのようにおおせだされたのです。

「やめよう。舍利弗。これを説明してみても、わかるはずがないとおもいます。なぜならば、わたしが究めた真理というものは、仏と仏とのあいだでしか理解することのできないものであるからです。それは、この世のすべての現象（諸法）には、もちまへの相（すがた形）があり、もちまへの性（性質）があり、もちまへの体（現象のうえでの主体）があり、もちまへの力（潜在能力）があり、その潜在能力がはたらきだしているいろいろな作（作用）をするときは、その因（原因）・縁（条件）によって千差万別の果（結果）・報（あとに残す影響）をつくりだすものであるが、それらの変化はただひとつの真理にもとづくものであり、現象のうえでは千差万別に見えるけれども、その相から報まではつねに等しい（本末究竟等）のである……ということです」

これが、略法華ともいわれる十如是の教えです。諸法実相ということを実証的にいいあらわしたものです。この教えからわれわれの人生を考えてみると、次のように解説することができます。

まず第一に、われわれ人間にはそれぞれ個性というものがあります。すなわち、もちまへの相・性・体をもっているわけです。そして、その相・性・体にふさわしい能力と作用があります。それが力・作です。しかし、これらは、けっして固定的で不変のものではないのです。どうにでも流動・変化させうるものなのです。

われわれは、ともすれば自分の個性は「どうにもならぬものだ」と思いこみがちですが、

「そうではない。原因(因)に条件(縁)をあたえさえすれば、それにふさわしい結果(果)や影響(報)があらわれてくるものであり、個性というものも変えられるようにできているのだ」ということが、この十如是によって教えられているのです。

したがって、人間の心のなかには仏の境地へ上がれる可能性も内在しており、逆に、地獄へ落ちる可能性も内在していることとなります。このことを天台大師は拡大解釈して、一念三千という教えとして説かれています。人間の心のもちかたひとつで、三千の世界(ありとあらゆる世界)が変わるといふのです。ですから、この十如是の教え、一念三千の教えを理解できれば、「この自分はどうにも変えようがない」と思っていたのに、「いや、どうにでも変えることができるのだ。仏にさえなりうるのだ」とわかります。こんなにありがたいことはありません。われわれの人生は一変して、輝かしい光明に満ちあふれたものとなり、「よし、やろう」という決意をもたざるをえなくなるのです。こうしたことから古来、この十如是の教えを略法華とよんで尊んでいるわけです。

しかし、この十如是が、いきなりお釈迦さまによって説かれたこの時点では、このように自分の人生にあてはめて考えるなどということはできようはずもありませんでした。ですから、その場にいた一同は、あまりのむずかしさに、ただポカンとしているばかりです。

さらにお釈迦さまは、これまでに説いてきた方便の教え(それぞれのひと場合と即した適切な教え)も、つまりはそのような仏の智慧から出たものにほかならないのだと、こんどは方便というものの尊さについてさかんに強調されるのです。

ますますわからなくなりました。一方では仏さまの悟られた最高至上の真理についてお説きになるかとおもえば、一方ではグッと身近な方便の教えを賛嘆される……そこにどんなつながりがあるのか、頭がこんがらがってしまいそうな気持です。

### 三止三請

たまりかねた舍利弗が、そのことについておたずねしますと、お釈迦さまは、「それを説明すれば、かえっておおくの人が疑惑におちいるだろうから、やめておいたほうがよからう」とおっしゃって、お答えになりません。熱心な舍利弗は、三度もことわられたのに、あくまでもすがりつくようにしてお願いしたのです。

お釈迦さまも、もともとの法を説いてあげなければ……というお気持があられたからこそ、だれの質問をも待たずに説法をおはじめになったのですから、こうしてためらいをお見せになったのは、じつは人びとにしっかりと聞こうという気がまえをつくらせるお心づかいにほかならなかったのです。そこで、舍利弗の熱心な願いによって、一同の心にも覺悟ができたところになると、いよいよご説法をはじめようとされました。

五千起去

すると、どうしたことでしょう。お釈迦さまがお口をひらかれたとたんに、一座にいた五千人の人たちがにわかに立ちあがって、退場してしまっただけです。お釈迦さまは、じつとそれをごらんになったまま、止めようともされませんでした。そして、それらの人びとがすっかり退場してしまうのを見とどけられてから、ふたたび説法をはじめられたのです。

一大事の因縁 開・示・悟・入

そのいちばんかんじんなところを抜粋しますと、

「仏というものは、ただひとつのたいじな目的のために、この世に出現するのです。それはなにかといえ、万物万象の実相をみとおしている仏の智慧に、すべての人の目をひらかせ、清らかな心を得させようという願いのためです。開。また、そういう仏の智慧の広大無辺さを、すべての人に示そうという願いのためです。示。また、そういう仏の智慧をすべての人に、自らの体験によって身にしみて悟らせようという願いのためです。悟。また、そういう仏の智慧を成就する道へ、すべての人を導き入れようという願いのためです。入。このことを、もろもろの仏はただ一つの大事な目的をもって、この世に出現されるというのです」

このように、お釈迦さまはここではじめて、諸仏出世の一大事の因縁を明らかにされたわけです。

開三顯一の宣言

つづいてお釈迦さまは、開三顯一（声聞乗・縁覚乗・菩薩乗の三乗を開いて、一仏乗を顯わす）の宣言をなされます。

「結論をいみましょう。もろもろの仏は、ただひたすら菩薩を教化されるのです。さまざまの方法をもって説かれるのも、ただ諸法実相を悟る仏の智慧を、衆生に悟らせるためなのです。ただこの一事のためにほかならないのです。如来はすべての人を平等に仏の境地へ導くというただ一つの目的のために、衆生に対して教を説かれるのです。眞実ほかにありません。二つの教えとか、三つの教えとか、そういう区別は本来ないのです」

「わたしは、いまだかつて、『あなたがたは、かならず仏になることができるのだ』と説いたことはありませんでした。それは、まだ説くべき時期ではなかったからで、今こそまさにその時です。決心して最高の教えである大乘を説くのです」

「わたしが説いてきたさまざまな方便の教え（九部の教え）は、人びとの機根に合わせて説いてきたものです。それらは、大乘の教えに入る手がかりとしての教えだったのです。

こころ きよ 柔輒(にゆうなん)で、しんり たい 真理に対して すなお 素直であり、ほとけ と 仏の説かれる おし 教えをただ ぎょう 正しく行  
じているひと 人がおおぜいできた いま 今、そのひと 人たちのためにわたしは、だいじょう おし と 大乘の教えを説くのです」

「たとえば、あるひと 人がぶつとう おが 仏塔を拜んでひと ひとこと『南無仏』と唱えたとしても、あるいは子ども き えだ じ 木の枝でほとけ え 仏の絵をいたずら が 書きしたとしても、それがほとけ えん となる縁になるものであって、そのような いっけん 一見つまらぬようなことでも、やはり さいこうしんじつ みち 最高真理の道すなわち ほとけ 仏となる道 につながっているのです。ですから、けっして ほうべん 方便というものを かる 軽んじてはなりません。 ほうべん しんじつ 方便すなわち 眞実 ということ を わす 忘れてはならないのです」

「いわんや、いままでわたしが むじょう しんり 無上の真理にもとづいて とい 説いてきた くぶ おし しょうじょう 九部の教え(小乗の教え)を、すなお き 素直に聞いて、きよ かな 清らかな こころ 心 になっている みなさん は、あきらかに ほとけ 仏となる道 道を 歩んでいるのです。みんな ぼさつ 菩薩 なのです。この しんじつ さと 眞実を 悟り、それに おお 大なる よろこ 喜びを おぼえるならば、みんなは しょうらい 将来 かならず ほとけ 仏 になる ことができます」

こうお説き とい になって、この ほん せっぽう お 品の説法は 終わり となります。

## ひ ゆ ほん だい さん 譬諭品第三

《法華經》も、この品からたいへんやさしくなります。お釈迦さまがこれまでの理論的な、哲学的な説きかたをここで一変され、譬えなどをさかんにもちいられて、一般大衆にもわかりやすい説法へと転換されるからです。

### 授記

さて、《方便品第二》のご説法をうかがった舍利弗は、喜びを満面にあらわしながら、立ち上がり、「仏さま、よくわかりました。ありがとうございます。こんなにうれしいことはございません」とお礼をもうしあげました。

なぜ舍利弗がそのように感激したかといえますと、いうまでもなく、自分も仏になれることがハッキリわかったからです。いままでは、自分はどこまでいっても声聞だとおもいこんでいました。菩薩より一段劣った修行者だと、両者のあいだにハッキリ一線を引いていました。ましてや仏さまとなると、もはや自分とはまったくかけはなれた存在のようにおもいこみ、仏になろうなどということは、大それたことだとして、考えたことさえなかったのです。

ところが、《方便品》のご説法で、余剰あることなく唯一仏乗のみなり（仏道に二つも三つもあるものではない。ただひとつ、仏になる道だけである）とお説きになり、諸の菩薩を教化して声聞の弟子なし（わたしの弟子はすべて菩薩であって、声聞の弟子というものはなし）とおおせられ、最後に心に大歡喜を生じて自ら當に作仏すべしと知れとお結びになりました。それをうかがって、自分はいわば声聞という高校生だとおもっていたのが、その学校は菩薩大学の予科だったことがわかったのです。つまり、まだ高校生だとばかりおもいこんでいたのに、じつは大学生だったことがわかったのです。しかも、菩薩大学は仏になる大学だから、そこで修行を積みさえすればかならず仏になれることが心の底にハッキリとつかめたのです。ですから大歡喜せざるをえないのです。

そこで舍利弗は、仏さまにお礼をもうしあげるとともに、いままでの自分のいたらなさを、率直に懺悔しました。すると仏さまは、舍利弗の悟りが眞実であることをおみとめになって、「そなたはかならず仏の境地にたつることができる」という記莖（きべつ）をあたえられます。これが、いわゆる声聞の弟子の最初の授記です。このあとで、高弟たちがつぎつぎに授記され、ついにはすべての弟子が授記されます。ですから、法華經は授記經であるという見かたをすることができるのです。すなわち、すべての人間は仏になることができるという保証をあたえられるお経だというわけです。これが法華經の一大特色なのであります。

さて、お礼と懺悔をもうしあげた舍利弗が、「わたくしはかならず仏の悟りを成就し、無上の教えを説いて、おおくの人びとを教化いたしましょう」とお誓いし、「こうしてわたくしは目をひらくことができましたが、ほかのおおくの人たちは、あまりにも仏さまの教えが深遠なために、当惑をおぼえております。どうぞ、その人たちにもこの境地をわからせてあげてくださいませ」とお願いいたします。

すると世尊は、つぎのような譬え話を語りはじめられるのです。いわゆる三車火宅の譬えです。

### 三車火宅の譬え

「ある国のある町に、大きな長者がありました。その家やしきは広大なものでしたけれども、門はごく狭いのがひとつしかありませんでした。しかも、家はたいへん荒れはてていました。

その家がつぜん火事になりました。火はみるみる燃えひろがりました。家のなかには長者の子どもたちがおおぜいいるのです。外にいた長者がおどろいてひきかえしてきてみると、子どもたちは夢中で遊びたわむれているではありませんか。

火に焼かれそうになっているのに、いっこうに気づかず、したがって、逃げだそうという気も起こさない様子なのです。長者はそれを見て、一瞬考えました。自分には大りきがあるから、なにか箱のようなものにみんなを乗せて、一気に外へ押し出して救おうか。しかし、すぐ考えなおしました。待てよ、それでは、こぼれ落ちたものは焼け死んでしまう。やはり、火のおそろしいことを知らせて、自分から外へ出るようにしむけるのが第一だ。

そこで長者は、大声で『このままでは焼け死んでしまうぞ。早く外へ出なさい』と教えてあげましたが、子どもたちは長者の顔をチラリチラリと見るだけで、問題にしません。そのとき長者は、ふと、子どもたちがいつも車を欲しがっていたのを思い出しましたので、『おまえたちの好きな、羊のひく車や、鹿のひく車や、牛のひく車が門の外にあるぞ。欲しいのをあげるから、早くいってとりなさい』と叫びました。

子どもたちは、そのことばを聞くと正気にかえって、それいけとばかり、われ先に走りだし、燃えさかる家から出ることができました。父の長者は、みんなが怪我なく脱出したのを見て、やっと安心しました。子どもたちは父のすがたを見ると、口々に約束の車をせがみます。すると父の長者は、子どもたちが欲しがっていた車ではなく、大きな白牛の引く、しかもおおくの宝ものに飾られたすばらしい車を、みんなにひとしくあたえたのでありました。

この譬え話にこめられた意味は、すでにおわかりのこととおもいますが、念のためかん

たんに説明すれば、父の長者はいうまでもなく 仏さまです。子どもたちはわれわれ凡夫、荒れはた家というのは現実の人間社会、火事はわれわれの煩惱をさしています。人生苦は煩惱が原因です。物質・肉体などにすっかりとらわれて、精神の自由自在を失っているから苦しいのです。しかも、おろかな衆生は、自分の精神に自由自在さがないことにさえ気がつきません。そのため、煩惱の火に焼かれようとしていることがわからず、ただ日々の生活に心をうばわれているのです。

そうした人間の不幸を救うために、お釈迦さまはいろいろな教えをお説きになりました。人間にはいろいろな型があって、救いの道をたどるにも、いい教えを一心に聞いて迷いを去ろうとつとめる声聞型の人もあり、自分ひとりで瞑想・思索して道をきりひらこうとする縁覚型の人もあり、また、至上の悟りを求めると同時に大衆の救済運動に挺身しようとする菩薩型の人もあります。人びとは、お釈迦さまの教えのなかに自分の傾向にピッタリしたものがあれば、しらすしらすのうちにその教えにひきこまれてゆきます。それぞれ子どもが、欲しい車をもらおうとして、ひとりでに門の外へ走り出たというのは、こういう意味です。

### 仏の教えはただ一つ

ですから、仏さまの教えは最終的にはただひとつ 仏になる道 しかないのですけれども、その予備段階として、さまざまな 方便の教え をお説きになるわけです。人びとは、それぞれの教えにしたがってけんめいに人格向上の努力をするのですが、その修行がだんだん高まってきますと、それぞれの道がずっとむこうではひとつになっているのを発見するのです。それがすなわち 仏になる道 にほかなりません。そこで、いままで自分の歩んできた道は二流三流の道だとばかりおもいこんでいたのが、じつはすべて最高真実の道にそのままつづいていることがわかり、大きな安心と、希望と、歓喜をおぼえるのです。羊車・鹿車・牛車をもらえるとばかりおもっていた子どもたちが、大白牛車という最高の車（仏になる道）を、みんなひとしくあたえられて驚喜したというのは、このことをいってあるわけです。

この譬え話を、いわゆる眼光紙背に徹するような読みかたをしていくと、以上にのべた主旨のほかにも、いろいろたいせつな教えが暗示されていることがわかります。

### 他力と自力

まず、長者がいったんは「大力をもってみんなを箱のようなものに乗せて外へ押しだして救おうか」とおもったのに、考えなおして、子どもたちが自分から外へ出るようにしむけた……ということなのです。

これは 他力の救い と 自力の救い とどうちがうかを暗示してあるのです。なんにもいわず、衆生を苦界の外へ押しだしてあげるのは、他力の救いです。しかし、衆生は目前の楽しみや喜びにうつつをぬかしているのですから、その救いの箱からこぼれ落ちることもおこります。窮屈な箱などに乗っているよりは、荒れてはいてもひろびろとした家の中で遊ぶほうがおもしろいからです。本人が悟らなければ、そうなりやすいのです。また、いったんは火の家から出されても、なかのおもしろさにひかされて、またもどって行くこともおおいにありえます。

そこで、なんとかして自分の力で救われるように、仏さまはみちびかれるのです。どんな段階の救いを求めて走り出るのでいいし、羊車を願ってもいいし、鹿車を求めてもいいし、牛車を欲しがってもいい、とにかく自分の意志で門の外へ出ることにねうちがあるのです。自分の意志で出たのなら、よほどのことがなければあともどりはしません。信仰は、そうでなければならぬのです。ただ神や仏に「救ってください」と頼むばかりで、自分の心を善くしようと、自分の行ないを正そうとしないならば、ほんとうの救いにたっするはずはないのです。自分の意志で、自分の修行によって自己の人格を完成してこそ、ほんとうの救いが実現するのです。

しかし、そういった修行が最終的にゆきつくところはどこかといいますと、小さな我を捨てて天地の真理に随順し、仏の大慈悲心のなかへ溶け入る境地にほかなりません。ですから、この自力というものは、けっして「おれが、おれが」というような我の力ではないのだということを知らなければならぬのです。

つまり、自力信仰とは、自分の意志と努力によって仏に帰依して行くことをいうのです。自力即他力であり、他力即自力であります。そして、それでなければ真の救いにはたっすることはできないのです。そのことが、ここに暗示されているわけです。

### 我を捨てる

つぎに、ごく狭い門がひとつしかない……ということ。そのただひとつの門というのは我を捨てるという心の一大転回にほかなりません。凡夫にとって、これはたいへんむずかしいことですから、狭い門だといってあるのです。

この我を捨てることには、いくつもの段階があります。第一の段階は、おおかたの人生苦は、我のかたまりであるもろもろの貪欲から作りだされるのだという原理を悟ることです。それを悟っただけでも、ずいぶん和我からはなれることができます。しかし、それではまだ我というものの生ずる原理まではわかっていませんから、十分ではないのです。

そこで第二の段階として、縁起の法則によって、われわれがけんめいに欲しがったり

執着したりするものごとは、すべて因と縁とによってできた仮りのあらわれだということ  
を悟らなければなりません。また、十二因縁の法則によって、そういう貪欲のおお  
もとなるのは無明（無智）だということを知らなければなりません。

それらの法則を悟れば、いままでにぎりしめていた我というものが、じつは実体のない  
ものだということがわかります。したがって、自己中心の考えかたからひとりではな  
れていくことができるのです。

ところが、もっと修行がすすむと、この宇宙のすべての存在はもともと平等であり、  
大調和しているのだという眞実を悟ることができます。みんな平等に仏性をもってお  
り、仏の子である仲間だ、きょうだいなのだという一体感を、しみじみ味わうことがで  
きます。そこまでくると、もう我などというものはすっぱりと抜けてしまって、影も形もな  
くなるのです。

### 主・師・親の三徳

この品のなかに、仏教の全經典のなかでもすぐれて尊いものといわれている、有名な  
偈があります。

今此の三界は、皆是れ我が有なり 其の中の衆生は 悉く是れ吾が子なり 而も今  
此の処は 諸の患難多し 唯我一人のみ 能く救護を為す

この宇宙は全部わたしのものだ。万物・万人はすべてわたしの子だ。その子どもたちが  
苦しみ悩んでいるのを救うことのできるのは、わたしひとりしかないのだ という意味  
です。

これは、なにもお釈迦さまが「宇宙は自分のものだ」と所有権を主張しておられるの  
でもなければ、「自分ひとりしか救えないのだ」といばっておられるのでもありません。「ど  
のような人でもみな仏性をもっているのだ。だから、わたしはすべての人にそのことをわ  
からせ、一人もあまさずに、わたしとおなじ仏の悟りを得させてあげたいのだ」とおおせ  
られているのです。

日蓮聖人はこの一偈から 主・師・親の三徳 ということを導きだして、お釈迦さま  
のお徳を賛嘆しておられます。主の徳とは一切の衆生を守護してくださること。師の徳と  
は一切の衆生を教え導いてくださること。親の徳とは、一切の衆生を慈愛してくださる  
ことをいいます。

そして、日蓮聖人は深い思索とさまざまな宗教的体験から、法華經を真に実践する  
ものにも、このような三徳が備わるものであることを、ご自身の自覚として説かれました。

また、この一偈は次のように、より積極的に受け取ることもできます。

われわれが、ほんとうに我を捨てることができれば、かならず、すべてのものに生かさ

れている自分を発見することができます。そして、すべてのものすなわち、宇宙全体に生かされている自分をしみじみ見つめることができれば、自分がみるみる宇宙全体にひろがっていくのです。

そうすると、心はまことに自由自在です。なにものにもとらわれず、おもうようにふるまっても、それがすべて真理（妙法）にかない、自分をもすべての人をも生かす行為になってしまうのです。

また、宇宙がわがものであれば、したがって、その中に住む衆生はすべてわが子であり、きょうだいであり、仲間です。だから、それらのために親身になってつくさずにはいられないのです。これがほんとうの大慈悲であり、仏の境地にほかなりません。

このことは、この品においてはただ暗示だけにとどめられています。なぜかといえば、いきなりこのことをズバリと説いても、なかなか悟りにくいことだからです。それで、これからも根気よく長い説法をおつづけになるわけですが、暗示によってある印象をあたえておけば、いつかはそれが芽をふくことがあるわけで、お釈迦さまはそれをお見とおしになって、このあとでもこのような暗示をつぎつぎとあたえられるのです。

## 信解品第四

### 信と解

この品の表題である信解の、解というのは理解ということで、りくつから推し  
ていって「なるほどそうだ」と頭のなかで割りきることをいい、信というのはその理解  
がすっかり心に定着して「そのとおりだ」とすこしも疑わなくなった状態をいいます。

ふつう学問とか、技術とか、その他実生活上のさまざまな知識などは、まず理解し、  
それを正しく（理論に合ったように）実行していけばよいように考えられています。た  
だそれだけでは世のいとなみは円滑にいかないのもあって、どうしても信の要素がな  
くではなりません。

早い話が、われわれが日常使っている掛け算の九九にしても、たとえば、なぜ「八九、  
七十二」になるかなどと、いちいち考えて計算をするわけではありません。小学生のと  
き教えられて理解した九九の理にもとづき、それが真実だと信じこんでいますから、なん  
の疑いもなく「七九、六十三」「八九、七十二」などとことばで唱えて、スラスラと計算し  
ます。真理であり、真実であるかぎり、それでいいのです。いや、それだけでなくはなら  
ないのです。

ましてや、宗教の教えになりますと、この信ということが絶対の要素となっ  
てくるのです。仏教は、現代の科学とも一致する筋道の立った教えですから、まず理解する  
ことがたいせつですが、それだけでは不十分なのです。その理解が深まることによって、つ  
よい感激が生まれ、歡喜が湧き、心の底からその教えにすがりつくような気持ちになっ  
て、はじめて真実の救いを実現するのです。そういった心の状態を信心といい、信仰  
というのであって、仏教がいくら理性的な教えだからといっても、やはりそれを信仰し信  
心するところまでいかなければ、その真価は発揮されないのです。

さて、《譬諭品第三》の説法によって、舍利弗につづいて完全な信解にたったお弟子た  
ちができました。須菩提・摩訶迦旃延・摩訶迦葉・摩訶目犍連（まかもっけんれん）の四  
人です。なにを完全に信解したのかといえば、《方便品》で暗示的に説かれた、人間はひ  
としく仏性をそなえており、だれでも仏になれるのだということと、仏さまはさま  
ざまな方便をもちいて教えを説かれるけれども、つまるところはすべての人びとに自分自  
身の仏性を自覚させ、仏の境地を悟らせてくださるという一事に帰するのだ  
ということです。

四人は、ただ心のなかに悟ったばかりでなく、「このように悟りました」と、くわしく  
お釈迦さまのお前に表白するのです。これがたいせつなことであって、自分の信仰体験  
は、ひとにむかって発表することによってますます強固なものになり、完全なものにな

るものです。

この四人を代表し、摩訶迦葉がお釈迦さまにたいして行なった体験発表が、これまたたくみな譬諭によるものであり、長者窮子の譬え といつて《法華經》に一つの花を添えるものであります。それは、つぎのような話です。

### 長者窮子の譬え

「幼いときに父の家からさまよいいで、放浪の身となった男がりました。五十歳にもなるまで他国をさすらい、貧しい暮らしをつづけていましたが、しかし、老いの影がしのびよるにつれて、足は不思議にも父のいる場所へむかっていくのでした。

父のほうでは、ひとり子を失ってたいへんに悲しみ、方々探しあるきました。どうしてもみつきりません。しかたなく、ある町に住みついていました。かぞえきれないほどの財産をもち、りっぱな邸宅に住んでいました。

息子は、さすらいの果てに、たまたまその町へやってきて、父のやしきの前をとおりかかったのです。なにか仕事をさせてもらえないものかと、なかをうかがえば、国王かとも見えるりっぱなお方が、おおぜいの召使いにかけずかれています。あたりの様子もたいそうおごそかです。

その男は、なんとなくおそろしくなってきました。とても自分などがやとってもらえる家ではない。まごまごしていると、つかまえられて無理やりはたらかされかねない、やはり自分にはここは向いていない そう考えて、急ぎ足に立ち去ろうとしました。

一方、父の長者としては、かたときも忘れたことのないおもかげです。門前にたたずむみすばらしい男がまさしく自分の子であることが、ひと目でわかりました。さっそく召使いに命じて、つれてこさせようとしてしました。ところが、親の心を知ろうはずもない窮子は、殺されるのではないかという恐怖感から、召使いの手をふりきろうともがいたあげく、氣を失ってしまいました。

そのありさまを見ていた父は、むりにつれてくるのをやめさせました。そして、しばらく日がたってから、窮子のところへ、みすばらしいなりをしたふたりの召使いをやり、『汚いものを掃除する仕事だが、賃金はふつうの倍もらえる口があるが、どうだ』と誘いをかけさせ、やしきのなかへ引き入れることに成功しました。長者は、自分も汚い姿となって子の警戒心を解きながら、そばに近づき、やさしいことばや励ましのことばをかけてあげ、ついに仮りの子ということにしてしまいました。

窮子のほうは、その待遇をうれしくはおもうのですが、自分にはふさわしくないという氣持はいつまでもぬけません。父は、やがていろいろな仕事をさせるようにし、ついには全財産を管理する支配人にとりたてました。窮子は忠実にはたらき、りっぱにその役を果たす

のですが、それでもまだ自分はいやしい身の上だという意識は捨てきれなかったのです。

そうしているうちに、窮子の卑屈な心もしいだいにうすれてきました。そこで、自分の死期の近づいたのを知った父は、国王をはじめ町のおもだった人びとを集め、『この男こそわたしの実子です。わたしの全財産はこの子のものです』と発表しました。

窮子は、そのときはじめて、この大長者がほんとうの自分の父であったことを知り、父の無限の財産がそのまま自分のものであることがわかり、かぎりない喜びにひたるのであります。

いくら仏に背を向けても

いうまでもなく、この大長者は仏さまであり、放浪の息子は衆生のすがたです。われわれはまちがいなく仏の子であるのに、そういう尊い自分であることを自覚しないために、みずから仏の道に背を向け、苦の世界へさまよい出てしまうのです。しかし、親子のきずなは強いもので、自分が仏の子である（仏性をもっている）ことは知らずに世間をさすらいあるいても、いつしか仏さまのおられるほうへ近づいていくのです。人間の本質（仏性）のしからしめるところといわなければなりません。そこが、いうにいわれぬありがたいところです。

衆生は仏さまの門の前に立っても、仏さまが自分の父であるとは知らないのですが、仏さまのほうでは、あれはわが子だとちゃんと知っておられます。これもたいへん意味の深いことです。つまり、宇宙の大生命ともいうべき久遠の本仏は、いつもわれわれの心やからだの内にも外にも満ち満ちておられるのに、われわれは気づかないのです。本仏のほうでは、われわれが気づくのを待っておられるのです。真理は、つねに知られることを待っているものです。

自分の仏性を知らぬ衆生

そのために、人間としての釈迦牟尼世尊がこの世に出られ、久遠の本仏と衆生は本来一体であるということを知らせようとしてくださるのですが、あまりにもその教えが深遠なので、衆生たちはとても自分のような凡夫の近寄れる境地ではないという卑屈な考えから、かえって恐れをいだいて、その教えの門前から逃げさって行くわけです。

そこで仏さまは、方便をつかって、衆生とおなじような姿はしているけれども、それよりすこしは機根の高いふたりの男、すなわち仏さまのおやしきの下働きでとにかく心の安定を得ているもの（声聞と縁覚の境地を得ている人）を使いだし、こんな人となら仲間になれそうだと、いう心を起こさせ、おやしきの下働きにされました。と

いうことは、つまり、<sup>ほとけ</sup>仏さまは<sup>しゅじょう</sup>けつして<sup>みす</sup>衆生を見捨てることをなさらず、なんとかして<sup>じ</sup>自分自身の<sup>ぶつしょう</sup>仏性にめざめさせようと、さまざまな<sup>だて</sup>だてをもちいられるということにほかなりません。

### 低い段階もたいせつ

そして、<sup>きたな</sup>汚いところを<sup>そうじ</sup>掃除する<sup>しごと</sup>仕事をさせました。というのは、<sup>こころ</sup>心の<sup>まよ</sup>迷いを<sup>のぞ</sup>とり<sup>しゅ</sup>除く<sup>しゅ</sup>修行をすすめられたということです。<sup>ほとけ</sup>仏さまは、<sup>しゅぎょう</sup>そういった修行によって、<sup>ほとけ</sup>しだいに<sup>ほとけ</sup>仏の<sup>おし</sup>教えに<sup>した</sup>親しませてから、「<sup>こ</sup>おまえをわたしの<sup>こ</sup>子にしよう」といって、<sup>ほとけ</sup>仏さまと<sup>さと</sup>おなじ<sup>さと</sup>悟りの<sup>きょうち</sup>境地へ<sup>ひ</sup>引き<sup>あ</sup>上げようとされるのですが、<sup>まだ</sup>まだ<sup>こ</sup>子どもの<sup>ほう</sup>ほうでは、<sup>ほとけ</sup>仏の<sup>さと</sup>悟りなどは<sup>じ</sup>自分とはまったく<sup>かんけい</sup>関係のない、<sup>だん</sup>段ちがいの<sup>きょうち</sup>境地だとおもいこみ、<sup>ひく</sup>低い<sup>きょうち</sup>境地に<sup>あま</sup>甘んじながら、<sup>なが</sup>長い<sup>あいだ</sup>あいだ<sup>しゅぎょう</sup>コツコツと修行をつづけたわけです。これも、<sup>けつして</sup>けつして<sup>み</sup>見のがしてはならぬ<sup>だ</sup>だいいじな<sup>こと</sup>ことで、<sup>ほとけ</sup>仏の<sup>きょうち</sup>境地を<sup>さと</sup>悟れるような<sup>きこん</sup>機根は、やはりそのような<sup>しゅぎょう</sup>修行の<sup>れんぞく</sup>連続によって<sup>こ</sup>こそ<sup>え</sup>得られるのだという<sup>おし</sup>教えなのです。

そうしているうちに、<sup>しゅじょう</sup>衆生も<sup>ほとけ</sup>仏の<sup>おし</sup>教えに<sup>ひろく</sup>ひろく<sup>つう</sup>通じるようになり、<sup>しだいに</sup>しだいに<sup>こころ</sup>心の<sup>じゆう</sup>自由自在を得るようになってきました。そこで、<sup>しはいひと</sup>支配人にとりたてて、<sup>おし</sup>教えの<sup>くら</sup>蔵の<sup>こと</sup>ことを<sup>まか</sup>すっかりお任せになるわけです。

しかし、<sup>しゅじょう</sup>衆生の<sup>ほう</sup>ほうでは、<sup>ほとけ</sup>仏さまの<sup>おし</sup>教えを<sup>ひと</sup>ひとに<sup>つた</sup>伝えるような<sup>しごと</sup>たいせつな仕事をしながらも、<sup>まだ</sup>まだ<sup>じぶん</sup>自分が<sup>ほとけ</sup>仏さまの<sup>じつし</sup>実子であるなどと<sup>ゆめ</sup>夢にもおもいません。すなわち、<sup>じぶん</sup>自分の<sup>ほんしつ</sup>本質は<sup>ほとけ</sup>仏さまと<sup>おなじ</sup>おなじだなどということは<sup>し</sup>すこしも<sup>し</sup>知らず、<sup>いわば</sup>いわば<sup>ほとけ</sup>仏さまは<sup>しゅじん</sup>主人、<sup>じぶん</sup>自分は<sup>しようにん</sup>使用人と、<sup>その</sup>その<sup>あいだ</sup>あいだに<sup>いっせん</sup>ハッキリ一線を<sup>ひ</sup>引いているのです。

### みずからの仏性にめざめる

ところが、<sup>ほとけ</sup>仏さまは、<sup>にゅうめつ</sup>ご入滅を<sup>まえ</sup>前にして<sup>ほけきょう</sup>法華経を<sup>と</sup>説かれ、「<sup>ほとけ</sup>仏と<sup>しゅじょう</sup>衆生とは<sup>たにん</sup>他人ではない。<sup>しはいしゃ</sup>支配者と<sup>ひ</sup>被<sup>しはいしゃ</sup>支配者の<sup>かんけい</sup>関係ではない。もともとは<sup>いったい</sup>一体の<sup>おやこ</sup>親子なのである。だから、<sup>だ</sup>だれでも<sup>ほとけ</sup>仏の<sup>ぜんざいさん</sup>全財産を<sup>そうぞく</sup>相続できる。すなわち、<sup>ひと</sup>すべての<sup>ほとけ</sup>人が<sup>ほとけ</sup>仏と<sup>おなじ</sup>おなじ<sup>きょうち</sup>境地になれるのだ」という<sup>だいせんげん</sup>大宣言をなさいました。

そこではじめて、<sup>しゅじょう</sup>衆生も<sup>ほとけ</sup>仏の<sup>おし</sup>教えの<sup>しんじつ</sup>真実を<sup>りかい</sup>理解することができ、<sup>おもい</sup>おもいがけない<sup>ざいほう</sup>財宝（<sup>ほとけ</sup>仏の<sup>さと</sup>悟り）が<sup>かくじつ</sup>確実に<sup>じぶん</sup>自分のものになるのだということがわかって、<sup>だいかんぎ</sup>大歡喜したわけです。

### 自己の本質の尊さを知れ

この<sup>たと</sup>譬え<sup>おし</sup>話に<sup>せいしん</sup>教えられた<sup>いちごん</sup>精神を一言にしていえば、「<sup>じぶん</sup>自分は<sup>まよ</sup>迷った<sup>にんげん</sup>人間だ、<sup>つみ</sup>罪の<sup>こ</sup>子だなどという<sup>ひくつ</sup>卑屈な<sup>かんが</sup>考えを<sup>す</sup>捨てて、<sup>ほとけ</sup>仏の<sup>こ</sup>子であるという<sup>しんじつ</sup>真実にめざめよ」ということです。すなわち、「<sup>じ</sup>自己の<sup>ほんしつ</sup>本質の<sup>そんげん</sup>尊厳さを<sup>はっけん</sup>発見せよ」ということです。

そういう自覚じかくができますと、あまりみっともないことはできなくなります。たとえ煩惱ぼんのうはもとのように起こおっても、それにふりまわされて失敗しっばいしたり、苦しくるんだりすることはなくなります。欲望よくぼうはまえと同様どうように起こおっても、自然じぜんとそれをいい方向ほうこうに向けて使むうようになります。それだけでも、たいへんすくな救いなのです。

## 薬草論品第五

《信解品第四》における摩訶迦葉の体験発表をお聞きになった釈尊は、「よろしい。迦葉よ。そなたはまことによく如来の眞実の功徳を説きました」とおほめになり、仏の教えとそれを受けとる衆生の関係について、三草二木の譬えをもって、さらにわかりやすくお説きになったのが、この品です。その説法を要約しますと、つぎのとおりです。

### 三草二木の譬え

「迦葉よ。まことにそなたのいうとおりです。仏の功徳は無限です。如来は、眞理を知りつくし、それを自由自在に説くことによって、ありとあらゆる人びとを平等に生かし、最終的には完全円満な仏の智慧にまでみちびくのです。たとえていえば、この地上にはいろいろなさまざまな草木が生いしげっています。その草木は、大きさにも大・中・小があり、性質も、すがた形も、千差万別です。しかし、すべての草木に共通していることは、ひたすら雨のうるおいを欲し求めていることです。

そこへ、空いっぱい大雲がひろがり、雨が降ってきました。雨は、地上にくまなく降りそそぎます。あらゆる草木を、平等に、そして豊かにうるおしてくれます。小さい草も、中くらいの草も、大きい草も、小さい木も、大きい木も、みんなそのうるおいを受けて生氣をとりもどし、いきいきと生長してゆきます。

こうして、おなじ雨が、一様にふりそそぐのですが、それでも草や木は、その種類によって生長の度合いがちがい、すがた形がちがい、咲く花がちがい、結ぶ実がちがいます。

迦葉よ。如来は、空全体をおおう大雲のようなものです。如来の説く教えは、地上にくまなく降りそそぐ雨のようなものです。一切衆生は、大・中・小さまざまな草木のようなものです。

如来の説く教えは、この宇宙の眞理です。眞理というものは、その根本においてはただ一つ、諸法実相ということしかありません。したがって、如来の説く教えも、降りそそぐ雨とおなじく、ただ一相一味なのです。ところが、人びとの天分や性質は、ひとりひとりがちがいます。生い立ちも、健康も、環境も、職業も、それぞれちがいます。そういうさまざまな条件のちがいがあるために、みんながひとしくもっている仏性はまったく平等であるにもかかわらず、眞理の雨の受けかたにさまざまなちがいが生じてくるのです。

しかし、いくら受けかたがちがっても、それぞれの人が眞理の雨を受けて、天分の性質のまにまに生長し、それぞれの花を咲かせ、それぞれの実を結ぶという点においては、まったく平等なのです。植物は、いったい自分が大きな草なのか、中くらいの草なのか、小

さな草<sup>くさ</sup>なのか、そのようなことはすこしも<sup>し</sup>知りません。知らないままに、とにもかくにも、  
自分<sup>じぶん</sup>のもって<sup>う</sup>生まれた<sup>せいしつ</sup>性質<sup>の</sup>をすくすくと伸ばしていくのです。

人間<sup>にんげん</sup>も、仏<sup>ほとけ</sup>の目<sup>め</sup>から見<sup>み</sup>れば、この草<sup>くさ</sup>や木<sup>き</sup>と似た<sup>に</sup>ようなものです。自分<sup>じぶん</sup>の現在<sup>げんざい</sup>の境<sup>きょう</sup>地<sup>ち</sup>が、  
いったいどの程度<sup>ていど</sup>のものであるか？ この宇宙<sup>うちゅう</sup>のなかにおいて、自分<sup>じぶん</sup>はどれほどの価値<sup>かち</sup>を  
もっているのか？ それを正確<sup>せいかく</sup>に知り<sup>し</sup>うる人<sup>ひと</sup>はありますまい。知り<sup>し</sup>うるのは、ただ<sup>ただ</sup>仏<sup>ほとけ</sup>のみ  
です。仏<sup>ほとけ</sup>は、すべての人<sup>ひと</sup>びとの現在<sup>げんざい</sup>におかれて<sup>きょうがい</sup>いる境<sup>せいしんてき</sup>界<sup>きょう</sup>と、精神<sup>せいしん</sup>的な境<sup>きょう</sup>地<sup>ち</sup>の区別<sup>くべつ</sup>を正<sup>ただ</sup>しく  
見<sup>み</sup>きわめ、しかもすべての人<sup>ひと</sup>びとがその根源<sup>こんげん</sup>においてはまったく平等<sup>びやうどう</sup>な存在<sup>そんざい</sup>であることを、  
ハッキリ知<sup>し</sup>っているのです。

そういう明<sup>あき</sup>らかな智慧<sup>ちえ</sup>にもとづいて、それぞれの人<sup>ひと</sup>にふさわしい教<sup>おし</sup>えを説<sup>と</sup>き、すべての人<sup>ひと</sup>  
を人生<sup>ひとせい</sup>苦<sup>く</sup>から解<sup>げ</sup>脱<sup>だつ</sup>させ、人間<sup>にんげん</sup>としての正<sup>ただ</sup>しい向<sup>こう</sup>上<sup>じょう</sup>の道<sup>みち</sup>をたどらせるのです。ですから、仏<sup>ほとけ</sup>  
の救<sup>すく</sup>いにはいろいろな形<sup>かたち</sup>があるように見<sup>み</sup>えます。けれども、その根本<sup>こんぽん</sup>においては、仏<sup>ほとけ</sup>の教<sup>おし</sup>  
えはただ一つであり、すべての人<sup>ひと</sup>に平等<sup>びやうどう</sup>にふりそそぐものなのです。みなさんの、形<sup>かたち</sup>  
のうえにあらわれた天<sup>てん</sup>分<sup>ぶん</sup>・性<sup>せい</sup>質<sup>しつ</sup>・環<sup>かん</sup>境<sup>きょう</sup>その他の条<sup>た</sup>件<sup>じょう</sup>がちがうからこそ、形<sup>かたち</sup>のうえにあらわ  
れた仏<sup>ほとけ</sup>の教<sup>おし</sup>えも、そして救<sup>すく</sup>いも、ちがうように受<sup>う</sup>けとれるのです。そこが仏<sup>ぶつ</sup>法<sup>ぽう</sup>の至<sup>し</sup>妙<sup>みょう</sup>な  
ところなのです」

### 本<sup>ほん</sup>質<sup>しつ</sup>の平<sup>びやう</sup>等<sup>どう</sup>相<sup>そう</sup>と現<sup>げん</sup>象<sup>しょう</sup>の差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>相<sup>そう</sup>

この譬<sup>たと</sup>えに教<sup>おし</sup>えられた表<sup>ひやう</sup>面<sup>めん</sup>の眼<sup>がん</sup>目<sup>もく</sup>は、仏<sup>ぶつ</sup>法<sup>ぽう</sup>の救<sup>すく</sup>いの、形<sup>かたち</sup>のうえにあらわれた差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>相<sup>そう</sup>と、  
本<sup>ほん</sup>質<sup>しつ</sup>における平<sup>びやう</sup>等<sup>どう</sup>相<sup>そう</sup>であります。しかし、現<sup>げん</sup>代<sup>だい</sup>のわれわれは、この譬<sup>たと</sup>えから人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>の本<sup>ほん</sup>  
質<sup>しつ</sup>における平<sup>びやう</sup>等<sup>どう</sup>相<sup>そう</sup>と、現<sup>げん</sup>象<sup>しょう</sup>のうえの差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>相<sup>そう</sup>と、その双<sup>そう</sup>方<sup>ほう</sup>をよく認<sup>にん</sup>識<sup>しき</sup>するの<sup>ただ</sup>が正<sup>ちえ</sup>しい智<sup>ち</sup>慧<sup>え</sup>で  
あるという教<sup>おし</sup>えをくみとらねばなりません。

本<sup>ほん</sup>質<sup>しつ</sup>における平<sup>びやう</sup>等<sup>どう</sup>相<sup>そう</sup>の認<sup>にん</sup>識<sup>しき</sup>のみに片<sup>かた</sup>寄<sup>よ</sup>れば、世<sup>せ</sup>間<sup>けん</sup>離<sup>り</sup>れのした仙<sup>せん</sup>人<sup>にん</sup>のようになっ  
てしまひ、とて<sup>じつ</sup>も実<sup>じつ</sup>生活<sup>せいかつ</sup>には耐<sup>た</sup>えられなくなります。かといつて、現<sup>げん</sup>象<sup>しょう</sup>にあらわれた差<sup>さ</sup>別<sup>べつ</sup>相<sup>そう</sup>のみにと  
らわれれば、優<sup>ゆう</sup>越<sup>えつ</sup>感<sup>かん</sup>・劣<sup>れつ</sup>等<sup>とう</sup>感<sup>かん</sup>によるわづらい(慢<sup>まん</sup>心<sup>しん</sup>・輕<sup>けい</sup>蔑<sup>べつ</sup>・侮<sup>ぶ</sup>辱<sup>じやく</sup>・嫉<sup>しつ</sup>妬<sup>と</sup>・憎<sup>ぞう</sup>悪<sup>あく</sup>・反<sup>はん</sup>抗<sup>かう</sup>等<sup>とう</sup>々)  
や、貪<sup>とん</sup>欲<sup>よく</sup>による争<sup>あら</sup>いや苦<sup>くる</sup>しみが、かぎりなく起<sup>お</sup>こつてきて、人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>社<sup>しゃ</sup>会<sup>かい</sup>が救<sup>すく</sup>われることはあ  
りません。

人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>は、それぞれすがたはちがつても、その本<sup>ほん</sup>質<sup>しつ</sup>は、そのまま仏<sup>ほとけ</sup>と一<sup>いつ</sup>体<sup>たい</sup>なのだ……とい  
うことをしっかり認<sup>にん</sup>識<sup>しき</sup>してこそ、自分<sup>じぶん</sup>をもほんとうに生<sup>い</sup>かし、他<sup>た</sup>の人<sup>ひと</sup>びとをもほんとうに生<sup>い</sup>  
かす正<sup>ただ</sup>しい生<sup>い</sup>きかたができるわけです。これがこの品<sup>ほん</sup>の現<sup>げん</sup>代<sup>だい</sup>的<sup>てき</sup>な受<sup>う</sup>けとりかたであります。

## 授記品第六

この品には、《信解品第四》の体験発表によって、摩訶迦葉・摩訶目犍連（まかもっけんれん）・須菩提・摩訶迦旃延がほんとうに仏法を信解したことをお認めになったお釈迦さまが、この四人に授記されたことがのべられています。授記というのは、《方便品第二》のところでのべたように、「そなたはかならず仏の悟りを得、仏の境地にたっするであろう」という保証をあたえられることをいいます。

### 授記には条件がつく

しかし、この保証にはいつも条件がついています。それは「これこれの修行をしたのちに……」ということです。いわば、仏の悟りを得る大学への入学許可書のようなものであって、けっして卒業証書ではありません。これからさきの勉強がぜったい必要なのです。《譬諭品》のところで暗示された他力と自力ということが、ここで、またちがった形で示されていることに注目すべきです。

## け じょう ゆ ほん だい しち 化城諭品第七

《警諭品》《信解品》《薬草諭品》では、主として警えによって仏と仏法のすがたと、はたらきが示されましたが、それでもよくわからない人のために、この《化城諭品》から《授学無学人記品第九》までには、主として過去世からの因縁をお説きになるのです。

《化城諭品》には、仏弟子たちの現世における修行をはげまし、未来世における成仏を確信させるために、過去世から仏さまと深い因縁でつながれていることをお説きになるのですが、それはつまり、仏法が永久不変なこと、すべての衆生は仏性をもつものであること、したがって、すべての衆生がいつかは仏の境地にたつることができるものであることを教えられているのです。

### だい とう ち しょう によらい こ じ 大通智勝如来の故事

まず、はるかなおおむかし、われわれの頭では考えられぬほどのおおむかしに、大通智勝如来という仏さまがおられたことから、お話ははじまります。その仏さまがまだ出家されるまえはある国の王子で、すでに十六人のお子さまがいましたが、長子を智積といいました。智積とその弟たちは、自分たちが小さいころ出家された父が、遠い国で長いあいだ修行されたのち仏の悟りをえられたことを聞いて、自分たちも父上のもとで修行しよう決心し、母や叔母などが涙のうちに見送るなかを出家していくのです。そうすると、その祖父すなわち大通智勝仏の父にあたる徳の高い王様も、おおぜいの大臣や人民たちをひきつれて、大通智勝仏のところへまいります。

そして、父の王は「仏さまは、もとはわれわれといっしょに生活された凡夫でしたのに、衆生を救うためにかぎりない年月修行をかさねられ、ここに仏となられました。それを拝しますと、われわれも仏になれる可能性のあることがわかりまして、これほどうれしいことはございません。どうかわれわれのために法をお説きください」とお願いします。つづいて十六人の王子たちも、熱心にお願ひするのです。

すると、大通智勝仏は、そこに集まっていたおおぜいの人たちに、「この十六人の菩薩沙弥たちは、過去世からおおくの仏を供養し、そのもとで修行し、いつも妙法蓮華という教えを衆生に説いて無数の人びとを教化しました。その人びとは、一度だけの人生ではなく、なんど生まれ変わっても自分を教化してくださった菩薩といっしょに生まれ、その教えを聞いて、すっかり信解するようになりまして」と説かれたのです。

### しゃ ば せ かい ほ と け しゃ か む に によらい 娑婆世界の仏 釈迦牟尼如来

以上のようなむかしのお話をなされたお釈迦さまは、あらたまった口調で、「みなさん、

いまだいじなことを話しますから、しっかり聞くのですよ。その十六人の菩薩は、のちに仏となつて、現在でも十方の国土で法を説いておられるのです」とおおせられ、その仏さまの名と、教化を受けもつておられる国土の名をあげられるのですが、その十六番目がお自分すなわち釈迦牟尼仏であり、娑婆国土で悟りをひらき、娑婆国土の教化を受けもつておられるということと、過去世に妙法蓮華の教えによって教化した衆生たちこそ、いまのお弟子たちおよび未来世の信者たち(つまり現在のわれわれ)にほかならないことを、お明かしになります。

そして、つぎのようにお説きになるのです。「みなさん。仏(人間としての仏)は、いつまでもこの世に存在するものではありません。すっかり自分の教えを説いてしまえば、しばらくこの世から離れるものですが、その際に、おおぜいの人たちが仏の教えにたいする信解が固く、人間平等の真理がよくわかり、心がしっかり決定しているようであれば、この妙法蓮華の教えを説いてあげるのです。過去世でもそうしたように、現世でもこうしていま説きつつあるのです」

「世間に、眞の悟りを得る道が二つあるものではありません。ただ一つ妙法蓮華の教えがあるのみです。しかし、如来の方便(指導の実際的手段)は、深く衆生の性質や機根を知り分けて行なわれるのです。まだ五官の欲にとらわれて、みずから苦しみを招いている人もいますので、そういう人たちのために、とりあえず迷いを除いて、心に安心を得るようにみちびいてあげるのです。このことを、譬え話で説明してみましよう」

ここで法華七論の第四である、化城宝処の譬えが説かれます。つぎのような話です。

### 化城宝処の譬え

あるところに、ひじょうに長い、けわしい、困難な道がありました。そこは人里遠く離れており、わるい獣などが出没して、まことに恐ろしい場所です。ところが、このけわしい道を、珍しい宝を求めて旅をつづける、おおぜいの人がありました。一行のなかに、ひとりのリーダーがいて、その人は智慧もすぐれ、ものごとに明るく、この道がどうなっているかを、先の先までよく知っていました。

一行のなかには、足弱な人もあれば、根気のない人もいて、途中ですっかり疲れはててしまい、リーダーにむかって「わたくしたちは、くたびれきってしまった。それに、この道はなんだか恐ろしくて、もうこれ以上いく気にはなれません。先はまだ遠いことですし、いまから引き返したいのです」といいだしました。

このリーダーは、時と場合に応じて適切に人びとをみちびく方法(方便)をよく知っていたので、心のなかで「ああ、かわいそうな人たちだ。どうして、もうひと息の所にある大きな宝をあきらめて、引き返そうとするのだろう。もうすこしのしんぼうなのに

とおもい、方便の力をもって、そのけわしい道の半ばよりちょっとむこうに、ひとつの大きな城を幻としてあらわしたのです。そして、一同にむかって、「みなさん。もう恐れることはありません。また、引き返すこともありませんよ。あの城のなかにはいってゆっくりしなさい。あのなかへはいりさえすれば、すっかり安穩になります」といいました。

みんなは大喜びでそのなかにはいって休息しました。しばらくして、疲れがすっかり癒えたのを見すましたリーダーは、その幻の城を消してしまい、「さあ、ゆきましよう。宝のある場所はもうすぐそこです。いままでここにあった城は、じつはわたしが仮りにつくったものです。ここでひと休みして、心をとりのなおさせるための方便だったのです」

こうして一同をはげまし、さらに宝のある場所へとみちびきつづけたのでした。

### 人生の意義を知れ

この譬えの表面の意味は、まえにあった三車火宅の譬えや長者窮子の譬えとおなじで、仏の教えはただ一仏乗ということと方便もまた眞実という二大原理にほかなりませんが、たんなるくりかえしではなく、またちがったニュアンス(微妙な陰影)があります。どんなニュアンスかといえば、ここには創造あつての生きがいという教えが暗示され、それにむかって再出発しようという激励の気持がこめられているのです。

長いけわしい道というのは、われわれの人生の旅路です。その旅路には、つらいことや苦しいことがつぎつぎに起こります。だれでも、それを克服しようと努力するのですが、なかなかおもうようにゆきません。すると、たいていの人があきらめをもつようになります。

善良な人ならば、「あがいてみてもしようがないから、なんとか苦しみと苦しみのあいだをすり抜けながら、できるだけ楽しく一生を送ろう」などと、消極的な考えかたにおちいるでしょう。すなわち、進歩への努力をあきらめ、安易な生活態度へ逃避してしまうのです。一方、道徳観念のうすい人なら、「どんなことでもして、太く短く一生を送ろう」と考え、悪の世界へ踏みこんでしまうこともありましよう。

その両方とも、人生のほんとうの意義を見失った人たちです。なぜなら、たえず進歩していくのが人間としての自然の道であり、正しい生きかたであるからです。それなのに、人生苦にうち負けて、その自然の道、正しい生きかたを忘れ、途中で立ち止まったり、あとへ引き返そうとするのは、人間としての価値をみずから投げ捨てることになるのです。

### 安らかな人生のために

そこで釈迦さまは、そういう人たちのために、苦しみも悩みもない安らかな人生が送れるのだよ

ちょっと待ちなさい。こうすれば、と、ひとつの境地を教えてくださいました。

それは、「目の前にあらわれているいろいろな現象は仮りのあらわれにすぎないのだから、それにとらわれて心をふりまわされないようにすれば、つねに安らかな心境におられるのだ」という教えです。一口でいえば、現象にふりまわされるなということです。

まことにすばらしい教えで、だれの心にも、「なるほど。そういうものの見かたに徹すれば、これから先は安らかな人生が送れそうだ」という希望が湧いてきます。この譬え話のなかのリーダーが、ゆくてに大きな城をあらわして、「あそこへ行って休みなさい」といったのは、こういう境地であり、こういう意味にほかならないのです。

### 創造と調和の生活

ところが、その心境にたっしてホッとしていると、リーダーはやがてその城を消してしまい、「もうすこし先に、ほんとうの人間らしい生きかたがあるのだよ」と、究極の理想を示しました。人びとは、一時はびっくりしましたが、すぐに気を取りなおして、新しい行進へと出発するのです。

それでは、そのほんとうの人間らしい生きかたとはなんでしょうか。それは創造と調和の生活ということです。

さきに、人びとは、人生苦からのがれるためには現象にふりまわされるなと教えられ、なんとかその境地にたっして心の安らぎを得ました。しかし、その境地も、まだ悟りにたっする途中の段階にすぎません。なぜならば、自分たち仏道修行者だけはさいわい人生苦からのがれることができても、世間のおおぜいの人たちはあいかわず苦しみのなかにいるのです。それを横目に見ながら、自分たちだけが安らかな境地にいるのは、これまた一種の逃避であり、独善的な利己主義です。ですから、まだまだほんとうの悟りとはいえないわけです。みんなといっしょに苦しみながら、みんなといっしょにしあわせになるように努力することこそ、ほんとうの人間らしい生きかたなのです。そこで、いちおうのホッとした気持などはかなぐり捨て、幻の城を出て、新しい苦勞の道へ再出発しなければならぬのです。

しかし、これからの苦勞の道は、まえにたどっていた苦勞の道とおなじ道のように見えても、苦勞の次元がまったくちがうのです。したがって、その価値にも天地ほどのちがいがあるのです。なぜならば、これからの苦勞は、ひとをしあわせにする菩薩の苦勞だからです。

また、苦勞しながらものごとを創造していくことこそ人生の意義であることを悟り、その苦勞を楽しむ境地にまで、心が高まっているからです。

こうして、人生の旅人であるわれわれひとりびとりが、自分の性格に応じ、才能に応じ、職業に応じて、自分をも、他人をも、世の中全体をも、しあわせにするものごとをたえず創造していけば、それらの創造のはたらきは、かならず大きなところで一種の調和を

つくりだすものです。そのような創造と調和の状態こそが、人類究極の理想のすがた  
(この上ない宝もの)なのです。

十二因縁と結願の文

この品には、この化城宝処の譬えのほかに、注目すべき教えがいろいろあります。  
なかでも、ここで十二因縁の教えをふたたびとりあげておられることと、もろもろの  
梵天王の唱えた偈のなかに願わくは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生  
と皆共に仏道を成ぜんという、ほとんどすべての仏教信者がお勤めの結びに唱えるた  
いせつなことばがあることなど、忘れてならないことだとおもいます。

## 五百弟子受記品第八

この品は、富楼那をはじめとするたくさんの高弟たちに、「かならず 仏の境地にたつするであろう」という保証があたえられる章です。

富楼那は、法明如来という名の仏となり、その他の人たちは、すべて普明如来という名の仏となるだろうと保証され、また、余の諸の声聞衆も亦当に復是の如くなるべしとおおせられています。すなわち、仏の教えを聞いて悟りを得ようと一心につとめるものは、いつかはのこらず 仏の悟りを得て普明如来になるのだと授記されたのです。

しかも、摩訶迦葉に 其の此の会に在らざるは 汝当に為に宣説すべし(このことを伝えよ)と命ぜられています。これは、直接にはさきに《方便品》の説法の途中で座を立てていった五千起去の人たちをさしているのだといわれています。つまり、「一度 仏の教えを聞く縁をもったものは、一時は退転することがあるかもしれないが、しかしその縁はかならずあとで芽をふいて、いつかは仏道にたちもどり、 仏の悟りを得るであろう」というわけです。

さらにまた、後世の仏弟子であるわれわれも、法華経の教えを学び、実践していけば、かならず普明如来になれるということになります。

### みんな普明如来に

普とは普くということですから、普明如来とは、世の中をあまねく光明化する如来ということです。この品の説法のなかに 転次して授記せん というおことばがあり、それは、甲が乙へ、乙が丙へとつぎつぎに授記するだろうという意味ですから、仏の教えを学び行ずるわれわれは、いつかはだれかに授記されるわけですし、まただれかに授記する義務をもっているのです。このようにして、しだいしだいに普明如来がふえてくれば、世の中は光明いっぱい、寂光土と化していくわけです。

そういうすばらしい保証がこの品の眼目であると、受けとることができます。いや、そう受けとらなければなりませんまい。

### 衣裏繫珠(えりけいじゆ)の譬え

さて、お釈迦さまから直接に仏となる保証をあたえられた弟子たちは、おどりがあがって喜び、お礼をもうしあげるとともに、橋陳如(きょうじんによ)が一同を代表して、いままでの段階の智慧を得ただけで満足していたまちがいを、つぎのような譬え話によって告白します。

「ある貧乏な人が、親友をたよってやってきました。親友は酒さかなをだして手厚くもて

なしてくれましたので、その人はすっかり酔っぱらい、いつのまにか眠ってしまいました。

ところが、その親友は、急に公用で出かけなければならなくなりました。寝ている友だちを起こすのも気の毒だとおもい、その人のために、はかりしれないほどの値うちのある宝石を着物の裏に縫いつけておいて出かけたのです。

目がさめたその人は、親友が長い出張に出かけたこと知り、しかたなく立ち去りましたが、あいかわらずの貧乏ぐらしで、ついに放浪の生活にはいりました。そして、衣食のためにたいへんな苦勞をし、ほんのすこしでも収入があれば、それで満足するという状態でした。

ずいぶんたってから、その人は、むかしの親友と道でバッタリ出会いました。親友はいもかわらぬそのあわれなすがたを見て、『なんとという愚かなことだ。わたしは君が安楽に暮らせるようにとおもって、着物の裏に高価な宝石を縫いつけておいたのに』といいます。

そして、あっけにとられている友だちの垢じみた衿の裏からその宝石をとりだしてやり、『さあ、これを売って、なんでも必要なものを買いなさい。なに不足ない生活ができるよ』というのでした。

この譬え話をした橋陳如(きょうじんによ)は、「仏さまも、この親友のようなお方でございます。仏さまがまだ菩薩であられたころ、わたくしたちに『だれにも一様に仏性(はかりしれぬ値うちのある宝石)がそなわっているのだから、修行して仏の悟りをひろくように……』と教えてくださったのですが、わたくしたちの心は眠りこけていて、その真意をつかむことができませんでした。そして、ただ煩悩を除くことができただけで、それを悟りだとおもいこんでおりました。しかし、心の底にはほんとうの仏の悟りを求める心が残っていたのでございましょう。なんとなく、もの足りない感じはいたしておりました。いま、世尊は、わたくしどもの目をハッキリ覚まさせてくださいました。いまこそわたくしどもは、菩薩です。これから菩薩としての修行を積み世の人のためにつくしていけば、ついには仏になれるのだということがわかりました。こんなありがたいことはございません」と、心からお礼をもうしあげて、この品は終わりとなります。

人間は自分の本質を知らない

仏性には 仏になりうる可能性 という意味と、 仏 そのもの という意味とがあります。前者は、どのような人であっても努力次第で、いつかは必ず仏となることができるということで、仏性ということを経験という面からとらえた意味です。後者は、すべての人の本質は仏の本質そのものであるということで、仏性ということを経験からとらえた意味です。

われわれは、みんな、こういう意味の仏性をもっているのですが、なかなかそれを自覚

できません。なぜかといえば、「衣食に追われてあくせく働き、欲望を追って右往左往しているこの身、この心が自分なのだ」と、すっかりおもしろいこんでいるからです。この話のなかの貧乏な人が、そういったわれわれ凡夫のすがたなのです。

金持ちの友人すなわち久遠の本仏は、どんな凡夫にも仏性という尊い宝石をちゃんとあたえてくださっているのに、われわれ凡夫は、欲望の満足のみを追い求めていますので、なかなかそれに気がつきません。それゆえ、いっこうに救われず、あくせくと苦の人生を送っているのです。

お釈迦さまの教えではじめてわかる

ところが、この世にあらわれた仏であられるお釈迦さまが、「すべての人間には平等な仏性がある（着物の裏に無価の宝珠をもっている）のだよ」と教えてくださって、はじめてわれわれはそれに気がつきました。それに気がついた瞬間、心がひろびろとなり、明るくなり、自由自在になり、これからさきの人生に大きな自信がついてきたのです。

すでに救われているのだ

つまり、この譬えには、「われわれは、ほんとうはすでに救われているのだ。われわれの本質は、久遠の本仏と一体の、自由自在な仏性なのだ。その事実を知らないために、苦の人生をさまよっているのだ。だから、救われるのは、なにもむずかしいことではない。自分の本質が仏性であること、つまり、はじめから救われているのだということを真に自覚しさえすればそれでいいのだ」という教えがのべられているわけです。

## 授学無学人記品第九

五百人というたくさんのお弟子たちが授記されたのに、十大弟子のなかにはいつている羅睺羅（らごら）（お釈迦さまのひとり子）と阿難（お釈迦さまの従弟）の二人は、「どうしてわれわれには直接授記されないのだろうか」と、寂しい気持ちになっていました。おもいあまって、仏さまにそのことをお願いいたしますと、仏さまはそくぎに授記されました。と同時に、たくさんのお弟子（まだ学ぶことの残っている修行者）・無学（もはや学ぶべきことは学びつくしてしまった修行者）にも授記されました。

この品は、ただそれだけのことが叙述されているにすぎないように見えますが、われわれはこのなかから、二つの教訓をくみとることができるとおもいます。

仏性を自覚しさえすれば仏になれる

第一は、まだ学ぶべきことの残っている、いわば見習いの修行者までも授記されたということです。一見不思議なようですけれども、よく考えれば不思議でもなんでもありません。すべての人間はひとしく仏性をもっているのであり、その仏性を明らかに、そして完全に自覚しさえすれば、仏になれるからです。

身近の人の教化はむずかしい

第二は、十大弟子のなかにはいつている羅睺羅（らごら）や阿難が、なぜほかの人よりずっと遅れて、ようやく見習いの声聞たちといっしょに授記されたのか……ということです。

お釈迦さまのみ心のうちを推察してみますと、羅睺羅（らごら）はお釈迦さまの実子であること、阿難もご自分の従弟であり、二十数年間いつもおそばに仕えていたものであり、両方ともお釈迦さまにとって、いちばん身近な人であることに、かえって修行のためのマイナスの要素がかくれていることを考慮に入れて、それをすべての人にお示しになるために、わざと遅らされたのではないかと考えられます。

阿難の場合は、いつもおそばにいて、食事の世話もする、水浴をなさるときは背中をお流しするといった立場にいますと、仏としてのお釈迦さまの偉さや、その教えの尊さと、ふつうの人間としてのお釈迦さまのお姿とがまじりあって、どうしても、他のお弟子たちのような純粋な帰依ということが困難になるのがふつうです。

羅睺羅（らごら）の場合にしても、おとうさんがどのように尊い人であっても、外部の人が心から尊敬しているのとおなじような気持ちで肉親の父に対することはなかなかできないものですし、また甘え心もまったく起こらないとはいいいきれません。

このことから、逆に考えますと、われわれが身近のもの、すなわち妻とか夫とか、子とか親とかを教化することが、いちばんむずかしいのだということになります。口先だけでみちびこうとしても、とうていできるものではありません。日常生活のじっさいの行ないによって感化するほかはないのです。

その行ないも、りっぱなのはときたまにすぎず、ふだんはわがままな行ないや、みにくい行ないがおおいようでは、感化の実はあがらないのであって、行住座臥にいい手本を見せなければ、家族のものや、おなじ職場の人は、ついてくるものではありません。

阿難・羅睺羅(らごら)は、ほかの大弟子より悟りが遅かったとも伝えられていますが、しかし、五百弟子より遅れていたとはどうしても考えられません。やはりそこには、前述のようなお釈迦さまの深いご配慮があったものと推測せざるをえません。また、そのように受けとるのが、後世の仏弟子としての正しい態度であると信じます。

## 本願

この品では、もう一つ大切なことが教えられています。それは、新発意の菩薩八千人にたいし、釈尊が阿難の授記にことよせて、其の本願是の如しと述べられたことです。

本願というのは、仏・菩薩が過去世において、一切衆生を救おうとして立てられた誓願をいいます。たとえば、釈迦牟尼仏は五百の大願を、阿弥陀仏は四十八願を、薬師仏は、十二願を立てられたといえます。

新発意の菩薩たちは、現世に生まれ変わってからはそれを忘れてしまっていたのですが、過去世においては、一切の人びとを教化し仏道を成就せしめようという願を立てていたのです。そして、いま法華經のお説法を聞くことによって、その本願にたちかえったわけです。ですから、ここでいよいよ成仏の保証を授けられたわけであります。

このことは、われわれにもそのままあてはまります。この本願にたちかえったものこそが真の菩薩であり、法師なのです。

## 法師品第十

法師とは

法師というのは、出家の僧侶だけではありません。ひとのために仏法を説く人はすべて法師です。この品は、そういう法師の心がまえ、とくに末世のわれわれがどんな気持で法を説かねばならないか、また、正しく法を説くものにはどのような功德があるかを示されたもので、われわれの信仰生活に密着した、ひじょうにたいせつな章であります。

まず注目しなければならないのは、お釈迦さまの説法の直接の相手が、この品から一変して、菩薩になるということです。いままでは、声聞・縁覚と菩薩は別物だという抜きがたい考えが人びとの胸に横たわっていたのですが、《授学無学人記品第九》までの説法においてお釈迦さまは、「そういう区別はほんらいないのであって、みんなが菩薩であり、みんなが仏となる道を歩んでいるのだ」とくりかえして力説され、その証拠として、おおくの声聞（縁覚をふくんだ意味の声聞）たちに授記されたのです。

ですから、これからさき仏さまの教えを聞くものは、すべてが菩薩だということになります。つまり、説法を聞いている人間はまえとおなじでも、聞く気持が一変し、したがって人間としての自覚が一変したわけです。それゆえ、すべてが菩薩となり、お釈迦さまの呼びかけも、これまでの「舍利弗よ」・「魔訶迦葉よ」・「もろもろの比丘よ」などから、「薬王菩薩よ」・「文殊菩薩よ」・「もろもろの菩薩よ」などへと変わるわけです。

一念随喜

まずお釈迦さまは、「もしわたしが説く妙法華經の一偈一句でも聞いて、一瞬のあいだでも『ああ、ありがたい』と心からおもうものがあつたら、わたしはその人に成仏の保証を授けましょう。その人は、かならず仏の悟りを得るにちがいないからです」とお説きになります。ふつうの世間においても、偉大なものにたいして素直な感動をおぼえる人こそ大成することは、おおくの実例がそれを示しています。感動や感激がなく、実利一点張りでものごとにたちむかう人は、こぢんまりした成功や、小さく安定した地位を得ることはあっても、いわゆる大物になることはできません。歴史にのこるような仕事をすることはできません。

ましてや信仰生活においてをやです。仏の教えは、偉大なるもののなかでも、もっとも偉大なるものです。その仏の教えを聞いて素直に感動し、素直に信ずるようならば、その人はかならず無限に高められる要因をもつ人です。

願生

なぜならその人は、衆生を哀愍し願って此の間に生まれ ということだからです。つまり、菩薩は仏になることのできる身でありながら、浄土に生まれる果報を捨てて、衆生をあわれむがゆえに、みずから願って此の間（人間）に生まれるというのです。善悪の業によって生まれ変わるのではなく、衆生を救おうという願いと、慈悲心によって生まれ変わってくるのです。

ですから、自分は菩薩としてこの世に生まれて来たのだ という自覚を持ち、菩薩としての行ないをすることはだれにもできます。なぜなら仏・菩薩は、自分の意志のとおり、どんな身にもなり、どんな所にも生ずることができるからです。つまり、どのようにも化身 することができるからです。したがって、この世において、心から法華經の教えを受持し、一身をささげてそれを説きひろめている人は、現実の身は、他と変わらぬ凡夫のように見えても、それは仏・菩薩が、この世界を救うために化身してきているのだ、とおもわなければなりません。そして、そのような人には最大の尊敬をはらわなければならないのです。

さらに、われわれ自身がそれを自覚することも大切です。そのような自覚はけっして増上慢ではなく、聖なる自覚であります。ほんとうにその聖なる自覚をもてば、もうみっともない所行などできなくなります。ひとりでの人のため世のためになる生きかたをせざるを得なくなります。たんに消極的な清浄さだけでなく、心の底からにじみでてくるなものかに動かされて、自然と利他の行ないと法華經の弘通に献身せざるをえなくなるのです。それが、とりもなおさず菩薩の境地であります。

### 随喜を伸ばす供養と修行

このような菩薩としての自覚は、ほんの一念に「ありがたい」という喜びをおぼえた一念随喜 を、一念で終らせることなく持続させていくことによって、より確かなものとなるのです。つまり、その一念を育てて大きくし、心に定着させてこそ、一念随喜 というものはその真価を発揮するのです。

では、一念随喜 を育てるものはなにか.....それは供養と修行です。

供養というのは、仏さまとその教えにたいする感謝のまごころをささげ、礼拝その他の行によってそのまごころをあらわすことです。

### 五種法師

修行とは、どんなことをすればよいのか.....。

第一に、教えを受持していく決意を念々に新たにすること（受持）

第二に、教えをくりかえして学ぶこと（読）

第三に、それを誦んじることができるよう心こころに植うえつけること（誦）

第四に、ひとのために解説かいせつしてあげること（解説）

第五に、その教えおしが世よにひろまるように、あらゆる努力どりよくをすること（書写）

この受持・読・誦・解説・書写を五種法師ごしゆほふし といつて、法華經の教えおしにきえるものがぜい実践じっせんしなければならぬ五つの行ぎやうを示しめされたものです。この五要素ごよそのうち一つでも欠けたら、真しんの法華經行者ほけきやうぎやうじやとはいえないわけです。

### 如来の使い

この五つの行ぎやうのなかで ひとのために説く・教えおしを世よにひろめる という積極的な行動せつきよくてきこうをとくに強調きやうちやうし、それでなければ人間社会にんげんしゃかいは救われぬのだと説かれるのが、法華經の大きな特色おほとくしやくですが、この品ほんにも、我が滅度めつどの後のち、能く竊ひそかに一人の為にんにも法華經の乃至ほけきやう一句を説かん。当まに知るべし、是この人は則すなわち如来にょらいの使つかいなり。如来にょらいの所遣しよけんとして如来にょらいの事じを行ぎやうずるなり。何いかに況いわんや大衆だいじゆの中に於なかて広く人の為おひに説かんをや とおおせられているのです。このおことばが、この品ほんの第一だいいちの要点ようてんであるといつていいでしょう。

### 衣・座・室の三軌

それならば、どんな心こころがまえでその積極的な布教活動せつきよくてきふきやうかつどうをすればよいのか……それをつぎの衣・座・室の三軌えざしつさんき でハッキリ示しめされています。これがこの品ほんの第二だいいちの要点ようてんです。軌きとは軌道きどうの軌きで、正しい道ただみちという意味いみです。

原文げんぶんのままをあげれば、若もし善男子ぜんなんし・善女人ぜんにょにんあって、如来にょらいの滅後めつごに四衆しゆの為ために是この法華經ほけきやうを説かんと欲ほつせば、云何いかにしてか説くべき。是この善男子ぜんなんし・善女人ぜんにょにんは、如来にょらいの室しつに入り、如来にょらいの衣ころもを着き、如来にょらいの座ざに坐ざして、爾しかして乃いまし四衆しゆの為ために広く斯この經きやうを説くべし とあります。

この如来にょらいの室しつに入り・如来にょらいの衣ころもを着き・如来にょらいの座ざに坐ざして という三つは、たんに教えおしとして重大じゆうだいであるばかりでなく、じつにありがたい、尊とうといおことばであることを、しみじみと感じなければなりません。まことに、もったいないおことばです。

その三軌さんきの意味いみは、すぐあとで、如来にょらいの室しつとは一切衆生さいしゆじやうの中なかの大慈悲心だいじひしんこ是れなり。如来にょらいの衣ころもとは柔和忍辱にゅうわんにんくの心こころ是れなり。如来にょらいの座ざとは一切法空さいほうくう是れなり と簡潔かんけつに解説かいせつされています。すなわち、慈悲じひの心こころと 柔和忍辱にゅうわんにんくの態度たいどと 空くうを悟さとった智慧ちえの三本立さんぼんたてで、法ほふを説かねばならぬと教えおしられるのです。

このうち、慈悲じひの心こころと 柔和忍辱にゅうわんにんくの態度たいど については、もはや説明せつめいの要ようもありますまい。

最後の空くうをどう受けとるべきか……ここにくりかえして説明せつめいしておきましょう。

空の受けとりかたには、およそ二とおりあります。まず第一は、諸法は空であると観  
 じることすなわち、すべての現象は空であって、仮りのあらわれにすぎないものであ  
 る、と見ることです。それは、もちろん正しい見かたではありますがけれども、そういう見方  
 だけにとどまっていたのでは、生きた人間の救いにはなりません。

そこで、われわれは、その空をより積極的に考えなければならないのです。すべ  
 てのものが空であるということは、この世に何も存在しない、無であるというこ  
 とではありません。因と縁の和合によってたしかに存在しているのです。ただ永遠不変で固  
 定したものはなにもないということです。ですから、よい現象を望むならば、よい因とな  
 りよい縁となればいいのです。

ところで、《無量義経説法品》に、**应当に一切諸法は自ら本・来・今、性相空寂に  
 して無大・無小・無生・無滅・非住・非動・不进・不退、猶お虚空の如く二法あること  
 なしと観察すべし。而るに諸の衆生、虚妄に是は此是は彼、是は得是は失と横計して、  
 不善の念を起し衆の悪業を造って六趣に輪廻し** とあるように、すべてのものごとは、本  
 来固定した差別のない、平等で大調和しているものなのです。つまり現象に善も悪もな  
 いのです。しかし凡夫にはそうは見えずに、差別でものを見て、不善の心を起こして苦し  
 みを味わうのです。つまり、差別でものを見て、苦しんでいるのは凡夫のまちがいであっ  
 て、本来すべてのものごとすべての存在は、差別もなく、平等で大調和したもので  
 す。別のことばでいえば、すべてのものは、あるべくしてあるのです。われわれ人間も、  
 その例に洩れるものではありません。

われわれは、この世に生きる必要があればこそ、こういう形をとって、生まれ出ている  
 のです。それをおもえば、人間として生きていることの尊さ、生かされていることのあり  
 がたさを、ひしひしと感じざるをえません。と同時に、他の人びとも、この世に生きる必要  
 があればこそ、生まれてきているのです。それをおもえば、他の人の存在の尊厳さをも認め  
 ざるをえません。

空ということをおもえば、生きることの尊さ、ありがたさを、しみ  
 じみと味わうことができます。すべての人びとにたいしても、おなじように生かされてい  
 るきょうだいだという仲間意識が、実感として湧きあがってくるのです。さればこそ、ひ  
 とにたいして法を説くのは、如来の座に坐すすなわち徹底した空の悟りを根底にし  
 なければならないと、教えられているのです。

この三軌をまとめていいますと、ひとに法華経を説くときには、大きな慈悲心に発し、  
 徹底した空の悟りを根底とし、柔和な態度で、しかも世の毀譽褒貶に動かされない心のつ  
 よい心をもって説かねばならない という教えであります。そして、これが《法師品》の  
 核心であるということが出来るのです。

## けん ほう とう ほん だいじゅういち 見宝塔品第十一

まえの《法師品第十》において、お釈迦さまは、末世において法華經の教えを説くものこの心<sup>こころ</sup>がまえと、正しくその教えを説くものが受けるであろう功德をお説きになりました。

### た ほうによらい しょうめい 多宝如来の証明

それを説き終えられたとたんに、目の前の地上から、光明さんぜんたる大塔が瞬時に浮かびいで、天空高くそびえたちました。しかも、その宝塔のなかから大音声<sup>だいおんじやう</sup>がひびきわたり、「すばらしい。まことにすばらしい。釈迦牟尼世尊は、すべての衆生がひとしく仏となることができると見とおす智慧(平等大慧)にもとづき、すべての人に菩薩の道を示す教え(教菩薩法)であり、もろもろの仏が秘要として護って(仏所護念)こられた妙法蓮華の教えを、大衆のためにお説きになりました。そのとおりです。釈迦牟尼世尊がお説きになることは、すべて真実であります」とほめたたえ、その教えの真実を証明されるのでした。

人びとはいいしれぬありがたさに打たれていましたが、そのなかの大樂説菩薩が、「どういふわけで、この宝塔が地から湧きだし、このような大音声が出されたのでしょうか」とおうかがいしますと、お釈迦さまは、此の宝塔の中に如来の全身いますとお答えになりました。

### ほうとう ぶつじやう しやうちやう 宝塔は仏性の象徴

このおことばの意味はじつに重大です。如来とは真如から来た人という意味ですから、如来の全身がこの塔のなかにいらっしゃるといふのは、真如の完全なすがたがここにあるという意味であります。

真如とは、この宇宙のすべてのものごとを存在たらしめている法そのものことで、ほかのことばでいえば根源の法であり、究極の真理です。これを人間にあてはめていけば、そのほんらいのすがたである仏性です。したがって、この宝塔といふのは、仏性の象徴にほかならないのです。

その塔が天から降ってくるのではなく、地から湧きだしたというのが、これまたたいせつなことです。天は人間からはなれた理想の世界をいい、地は人間と密着した現実の世界をいいます。したがって、仏性は他(天)からあたえられるものではなく、現実のわれわれ自身(地)のなかにあるのであるから、われわれはただそれを自覚すればよいのだということが、ここに示されているのです。

妙法蓮華の教えは、この真理にもとづき、万人平等の仏性を自覚し、顕現することに

よって、この世を救おうという、いわゆる菩薩の道の教えであり、諸仏がもっともだいじな教えとして護念されるものであります。それをお釈迦さまがはじめて大衆のためにお説きになったのですから、これはいくら賞賛しても賞賛しきれない聖業であり、人類にとって万世にわたる一大事であったわけです。ですから、仏性の大塔のなかから、このような大音声<sup>だいおんじょう</sup>がひびきわたったのであります。

つぎにお釈迦さまは、「宝塔の主であられるのは、はるかな東方の世界に出られた多宝如来という仏さまで、その仏さまがまだ菩薩の時代に、『自分が仏となったのち、いずれの世界においてでも法華経が説かれるならば、自分はその教えを聞くために、説法会の前に大塔を出現させ、その教えの眞実を証明し、賞賛しよう』という大誓願を立てられ、仏となって世を去られるとき、『わたしの全身を供養しようとおもうならば、ひとつの大塔を建てよ』と遺言なされた」と、おのべになります。

多宝如来とは、「はるかな東方の国の仏さま」というおことばでわかるように、じっさいにこの世に出られた、すがた形のある仏さまではありません。眞如そのもの・眞理の全相(眞理の完全な相)を多宝如来ともうしあげるのです。眞如そのものとが眞理の完全な相などといっても、当時の一般大衆にはのみこめなかったために、如来さまという人間らしい形をつけてお釈迦さまはお説きになったわけです。

いつでも、どこでも変わりのないのが眞如としての究極の眞理です。この宇宙がはじまって以来いつも、そして宇宙のどこにいても、その眞理は変わりなく存在しているのです。その眞理は、いろいろな形をとってあらわれるわけですが、そのおおくのあらわれをひっくりめた統一的なすがたを、多宝如来に象徴してあるのです。ですから、「多くの宝をあつめた如来」と名づけられてあるわけです。

ところで、多宝如来のおことばの大塔を建てよというのは、「すべてのものの仏性を顕現せよ」ということです。それが多宝如来(究極の眞理)にたいする最大の供養であります。なぜならば、眞如としての究極の眞理はそのとおりに顕現されることを欲しているのであって、すべてのもの仏性を顕現することが眞理の全き相を世にあらわすことにほかならないからです。

### 十方分身諸仏の衆集

そこでお釈迦さまは、大衆説菩薩をはじめとする一同の願いによって、十方世界のご自分の分身をお集めになります。すると、娑婆国土ばかりでなく、全宇宙が仏さまの分身で充満してしまうのです。それを見とどけられたお釈迦さまは、スーッと空中におのぼりになって、宝塔のまえにおとどまりになります。

究極の真理を活動させるもの

そして、右手（智慧の象徴）で宝塔の扉をおひらきになりますと、そのなかに、あたかも禅定にはいったかのようにじっと身動きもされずに坐しておられる多宝如来の完全なおすがたが、ありありと拝されるのです。

ところが、多宝如来は、たちまちお口をひらかれて、「すばらしい。まことにすばらしい。よくぞ釈迦牟尼如来は、快くこの法華経をお説きくださいました」とおおせられたのです。

ここにもたいへん重大なことが象徴されています。真理の全相である多宝如来がじっと身動きもされずに坐しておられるというのは、究極の真理は永久不変であるということです。しかし、禅定にはいったかのように動かないものには、われわれの人生を変える力がありません。それを説く人があり、それが人間の心のなかへ動きだしてきたとき、はじめて人間世界の救いとなるのです。だからこそ、究極の真理そのものである多宝如来が、その真理を説いてそれに動きをあたえるはたらきをなされたお釈迦さまを、ほめたたえられるのです。ということはつまり、究極の真理は、それが説かれ、おおくの人に理解され、活用されることを望んでいるのだということ、このように表現されているわけです。

## 二仏同坐

そのとき多宝仏は、獅子座のまんなかにおすわりになっておられたおん身を、半ばおずらしになり、「釈迦牟尼仏、どうぞこの座におつきください」とおおせられ、釈迦牟尼仏はすぐ宝塔のなかにはいられて、多宝仏とならんでおすわりになりました。

この光景にも、ひじょうにたいせつなことが暗示されています。

第一に、おおくの人びとが釈迦牟尼如来を、生き死にする肉体をもたれた仏さまとばかりおもいこんでいる迷いをうち破り、多宝如来とおなじように、生滅しながらも生滅しない仏であることを示されているのです。これは、あとの《如来寿量品第十六》で明らかにされることで、ここではまだ暗示だけにとどまっています。

第二に、法身の仏（多宝仏）と、応身の仏（釈迦牟尼仏）とは同格であることを示されているのです。すなわち、真如そのものと真如を説く人は、おなじように尊い存在であるという教えです。

## 令法久住

多宝・釈迦牟尼の二如来が、空中に浮かんだ宝塔の獅子座におすわりになっているのを拝した大衆は、「仏さまはあのような高く遠いところにいらっしゃる。われわれも、如来

の神力によって、虚空のあそこまで引き上げていただきたいものだ」という思いを起しました。その気持ちを察せられたお釈迦さまは、すぐさま一同を虚空へ引き上げておあげになりました。そして「いまこそ、もろもろの大衆に告げます。わたしが世を去ったのち、しっかりとこの教えを護持し、読誦するのは、だれだれですか。その人は、いまわたしの前で誓いのことばをのべなさい。

そもそも多宝如来は、ひさしく滅度しておられたのに、法華經の説かれるところにはかならず出現してそれを証明しようという誓願によって、こうしておすがたをあらわされ、大音声を発せられました。この多宝如来と、わたしと、わたしの分身の諸仏、この三者のもつ意味をよくよく認識しなければなりません。

もろもろの弟子たちよ。だれがこの教えをよく護ってくれますか。いまこそ大願を起して、この教えを未来永劫にのこしてほしいものです。もしこの法華經の教えをよく護ることのできる人があったならば、それがそのまま、わたしと多宝如来を供養することになるのです」とおおせられたのです。このお釈迦さまの呼びかけを「令法久住」といいます。

## 六難九易

このように衆生に法華經の広宣流布を呼びかけ、励まされると同時に、お釈迦さまの滅後に法華經を説き弘めることが、計り知れないほど困難であるがために、法華經弘通の功德がいかに甚大であるかを説かれました。これを六難九易といえます。六難とは、説經難・書持難・暫読難・説法難・聴受難・奉持難をいいます。

## 二処三会

これまでの説法会は、靈鷲山の山上で行なわれていました。そして、これから《囑累品第二十二》の終わりまでは虚空において行なわれ、それからふたたび山上にもどります。こうして法華經の説法会は、山上と虚空の二か所で、三回にわたって行なわれますので、二処三会といわれています。これにはやはり深い意味があるのです。

山上は現実、虚空は理想です。どのような教えにしても、はじめは現実に即した教えでないと、とっつきにくくもあるし、理解もむずかしいのです。ですから仏さまも、はじめは、どうしたら迷いを去り、人生苦からのがれられるかという、現実的な問題からお説きになったのです。

法華經だけを見ても、最初のほうでは、この世の成り立ちはどうなっているのか、人間とはいったいどんなものであるか、人間と人間との関係はどうあるのが正しいかということを見きわめる智慧をお説きになりました。

そういう智慧が身についてきたら、いよいよ理想の境地を示さなければなりません。すなわち、久遠本仏と一体となる境地であります。これは、凡夫にとって現実の生活ではなかなかつかみにくい境地であります。僧伽の仲間（正しい宗教団体）に入り、さまざまな信仰上の修行なしではなかなか悟ることができません。つまり、虚空にのぼってこそ到達しうる境地です。

その悟りにたっしたら、こんどはまた現実にたちもどって、その悟りをこの世で実践にうつし、またおおくの人びとにおよぼしていかなければ、人類全体の救いは実現せず、したがって自分個人の救いも完成されません。そこで、説法会もふたたび現実にもどるわけです。

《法華經》は、このような、じつに合理的な構成になっているのであります。

## 提婆達多品第十二

まえの《見宝塔品第十一》において、人間の**本質は仏性**であるという**大事実**が明らかにされました。とすれば、**当然「自分の本質は仏性である」と悟る**のが、ほんとうの人間として**完成する第一の道**であり、**最高の道**であることとなります。まったくそのとおりであって、その悟りを**完全に成就**した人が、すなわち**仏**にほかならないのです。

したがって、どんな人間でも、たとえ世間でつまはじきにされる**悪人**であろうと、十分な**教育**も受けていない**幼子**であろうと、自分の**仏性**を完全に**自覚**し、**確信**することができさえすれば、たしかに**仏**になりうるのです。

**仏性自覚**の教えをそこまで**発展**させたのが、この《提婆達多品》であります。この品は、大きく分けて**二つの部分**から**成り立**っています。第一の部分がいわば**悪人成仏**、第二の部分がいわば**女人成仏**を説かれたものです。

### 悪人成仏

まず**お釈迦さま**は、ご自分の**前世の物語**をなさいます。前世における**お釈迦さま**は、ながいあいだ**国王の地位**にあられましたが、その**安楽**なくらしに**満足**せず、**真実の教え**（妙法）を求めつづけておられました。そして、その**教え**を得るためには、**自己の生活**のすべてを**犠牲**にしてもかまわないと**お考え**になっていました。そして、ついに「**世のすべての人を救う**教えを説いてくれる人があれば、わたしは**一生**涯その人につかえて、**身のまわりの世話を**するであろう」という**おふれ**を**全国**にだされたのです。

ところが、ひとりの**仙人**がやってきて、「**わたくしは**、**世のすべての人を救う**妙法蓮華という**教え**を知っています。もし**王さま**がおふれのとおりのことをなさいますなら、**かならず**説いてさしあげましょう」ともうしました。

**王**は、そくざにその**仙人**につかえました。木の**実**を集めてきたり、水の**汲**んだり、**生活**万端の**世話を**したばかりか、**地べた**にうつぶせになって**師の仙人の腰**かけになるということまでしたのです。そういう**努力**をしながら、その**最高無上の教え**を聞くことができたのです。**お釈迦さま**はこの**話**をなさって、「**わたしが** **仏**の悟りを得たのは、**前世**のそうした**修行**が**大きな遠因**となっているのですが、**じつ**はその**仙人**というのは、あの**提婆達多**の**前世**の**身**にほかならないのです。つまりわたしは、**提婆達多**という**善知識**（**善い友人**）をもちえたおかげで、**こう**した**仏**となり、**ひろく衆生**を救うことができるのです」とおおせられました。しかも「**提婆達多**は、**これから**の**ちながいあいだ** **修行**することによって、**かならず** **仏**となるであります」と、**成仏**の**保証**まであたえられたのです。

**提婆達多**というのは、**お釈迦さま**とは**従兄弟**どうしの**あいだ**がらで、**お弟子**のなかに**加わ**

っていたのですが、頭<sup>あたま</sup>はよかったのに心<sup>こころ</sup>がひねくれていたために、ことごとく反抗<sup>はんこう</sup>するようになり、教団<sup>きょうだん</sup>の和合<sup>わごう</sup>を破<sup>やぶ</sup>り、ついにはお釈迦<sup>しやか</sup>さまのお命<sup>いのち</sup>まで奪<sup>うば</sup>おうとした悪人<sup>あくにん</sup>でした。そういう大逆罪<sup>だいぎやくざい</sup>をおかしたものを、ご自分の善い友人<sup>じぶん よゆうじん</sup>であるとか、そのおかげで仏<sup>ほとけ</sup>の悟<sup>さと</sup>りを得たとか、かならず仏<sup>ほとけ</sup>の悟<sup>さと</sup>りを得るであろうとかおおせられますので、一同<sup>いちどう</sup>は大きな驚き<sup>おどろ</sup>と、不思議<sup>ふしぎ</sup>な感銘<sup>かんめい</sup>を受けたのであります。

### てっぺい かんしゃ せいしん 徹底した感謝の精神

お釈迦<sup>しやか</sup>さまは、なぜ前世<sup>ぜんせい</sup>の物語<sup>ものがたり</sup>にことよせて、提婆達多<sup>だいばだつた</sup>が善知識<sup>ぜんちしき</sup>に因<sup>よ</sup>るとおおせられたのでしょうか。それは、お釈迦<sup>しやか</sup>さまのような澄みきった心<sup>こころ</sup>の持主<sup>もちぬし</sup>ともなれば、よいこともわるいことも、すべてが悟<sup>さと</sup>りの因<sup>いん</sup>となるからです。それゆえ、天地<sup>てんち</sup>の万物<sup>ばんぶつ</sup>にたいし、身のまわりに起こるすべてのことがらにたいし、ご自分の悟<sup>さと</sup>りを助<sup>たす</sup>けてくれるものとして、自然<sup>しぜん</sup>と感謝<sup>かんしゃ</sup>のお気持ち<sup>きもち</sup>をもたれるのです。

このよいできごと、わるいできごと、すべて悟<sup>さと</sup>りを深<sup>ふか</sup>める因<sup>いん</sup>として受けとり、それに感謝<sup>かんしゃ</sup>する という徹底<sup>てっぺい</sup>したご精神<sup>せいしん</sup>は、われわれが深く学<sup>まな</sup>ばなければならないところであります。そして、これがこの品の前半<sup>ほんぜんはん</sup>の要点<sup>ようてん</sup>の第一<sup>だいいち</sup>であります。

また、なぜ提婆達多<sup>だいばだつた</sup>のような悪人<sup>あくにん</sup>にも成仏<sup>じょうぶつ</sup>の保証<sup>ほしょう</sup>をあたえられたのでしょうか。たとえ今世<sup>こんぜ</sup>における提婆達多<sup>だいばだつた</sup>の悪事<sup>あくじ</sup>が、お釈迦<sup>しやか</sup>さまのお悟<sup>さと</sup>りを深<sup>ふか</sup>める因<sup>いん</sup>となったからとて、本質<sup>ほんしつ</sup>的にはなにも提婆達多<sup>だいばだつた</sup>の功績<sup>こうせき</sup>ではありません。提婆達多<sup>だいばだつた</sup>の悪<sup>あく</sup>が、それによって帳消<sup>ちやうけ</sup>しにされるものでもありません。ですから、提婆達多<sup>だいばだつた</sup>にたいする感謝<sup>かんしゃ</sup>と授記<sup>じゆき</sup>のあいだには、なんらの関連<sup>かんれん</sup>はないのです。

お釈迦<sup>しやか</sup>さまは、まえからくりかえしてお説<sup>と</sup>きになってこられたすべての人間<sup>にんげん</sup>は平等<sup>びやうどう</sup>に仏性<sup>ぶつじやう</sup>をもっている という真実<sup>しんじつ</sup>を、人びとがアツとおどろくような劇<sup>げき</sup>的な形<sup>かたち</sup>をとって、人びとの胸<sup>むね</sup>につよく印象<sup>いんしょう</sup>づけるために、とつぜん提婆達多<sup>だいばだつた</sup>の例<sup>れい</sup>をもちだされたのです。

まさしく、万人<sup>ばんにん</sup>を仏性<sup>ぶつじやう</sup>の自覚<sup>じかく</sup>へみちびくための、お釈迦<sup>しやか</sup>さまのあざやかな方便<sup>ほうべん</sup>だったのです。

### ほんのう どうご あく ぜん わ 煩惱をどう動かすかで悪と善が分かれる

煩惱<sup>ほんのう</sup>はすべての人間<sup>にんげん</sup>がもっています。出家<sup>しゆっけ</sup>の修行者<sup>しゆぎやうしや</sup>はその煩惱<sup>ほんのう</sup>から完全<sup>かんぜん</sup>に離<sup>はな</sup>れてしまうよう努力<sup>どりよく</sup>しなければならぬのですが、ふつうの生活<sup>せいかつ</sup>をしている在家<sup>ざいけ</sup>のものにとっては、とうてい不可能<sup>ふ かのう</sup>なことです。できないことをやろうとするのは、自然<sup>しぜん</sup>の道<sup>みち</sup>に反<sup>はん</sup>します。そこで、一般大衆<sup>いっぱんたいしゆう</sup>には、煩惱<sup>ほんのう</sup>に善い方向<sup>ほうこう</sup>をあたえることを教えられたのです。それが大乘<sup>だいじゆう</sup>の道<sup>みち</sup>です。たとえば、「金<sup>かね</sup>もうけをしたい」という煩惱<sup>ほんのう</sup>に、「世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>のためにはたらく」というよい方向<sup>ほうこう</sup>をあたえれば、おなじようにはたらく、おなじように金<sup>かね</sup>をもうけても、それが善<sup>ぜん</sup>

のエネルギーになるわけです。

提婆達多は、煩惱をそのまま行動にうつしました。それが悪 というものです。ところが、大乘の教えによって煩惱を善い方向へ向ければ、たちまち善をなすことができます。悪人と善人とのちがいは、ただそれだけなのです。ですから、提婆達多も修行して、その大煩惱を善の方向へ向けかえれば、煩惱が煩惱でなくなってしまって、ついには仏になれるわけです。このことが、この品の前半から学ぶべき第二の要点です。

つぎに、後半にうつります。

海底の竜宮での布教からもどった文殊菩薩に、智積菩薩がその業績を賛歎し、「海中においてどのような教えを説かれましたか」と聞きますと、「ただ妙法蓮華経のみです」という答えが返ってきました。さらに「一般大衆のなかで、この教えによって、すみやかに仏の悟りを得そうな人がありますか」とたずねます。文殊菩薩が「あります。八歳になる竜王の娘がそれです」と答えます。すると、たちまちその竜王の娘があらわれて、お釈迦さまをうやうやしく礼拝するのです。

それを見ていた舍利弗が、おもわず口をだして、その娘にむかい「仏の悟りというもの、はかりしれないほどの年月、努力して修行を積み、六波羅蜜を完全に実践したのち、ようやく到達できるものだ。障りがおおい女人が、とうていたっしうるものではない」といいました。

娘はそれに答えず、手にもったひとつの宝珠を仏さまにささげました。それは、三千大千世界にも値するほどの尊い珠でした。仏さまは、こころよくそれをお受けとりになりました。竜女は智積菩薩と舍利弗尊者のほうに向きなおり、「仏さまは、わたくしのささげた宝珠をすぐお受けとりくださいましたが、わたくしの成仏はそれよりも早いのですよ」といったかとおもうと、たちまち男子の姿に変わり、はるか南方の無垢世界という所で、仏となって法華経の教えを説いているありさまを現じてみせました。

その光景をうち仰いでいた智積菩薩も、舍利弗も、その他のおおくの人びとも、ひじょうに大きな感動をおぼえ、その尊い事例を真実として心に深く受けとめたのでありました。

### 女人成仏

どこの国でもだいたいおなじでしたが、むかしのインドでは、女性は男性よりはるかに劣り、まるで罪のかたまりのようなものとされ、とうてい救いがたい存在であるという牢固たる思想がありました。

そのような女性でも、人間として最高至上の状態である仏になれるというのですから、《提婆達多品》のこのくだりは、これまたじつに画期的な大宣言だったのです。世

界の歴史のうえで、男女平等が明らかに唱えられたのは、これが最初だったといわれています。

現象としてあらわれている男女には、そのすがた形・子孫をふやすための役目・性質の特徴・はたらきのうえの得意不得意など、いろいろ先天的なちがひがあります。形のうえではそのようにちがひのある男女が、それぞれ先天的な特質を生かしあいながら、なかよく家庭をつくり、社会を運営していくところに、ほんとうの男女平等があることを忘れてはなりません。これが、倫理的な、また社会的な、男女平等の道理です。

ところが、そういう道理は頭でわかって、当時の人びとの心の奥にあった女性蔑視の意識は、なかなかぬぐいきれなかったのです。そこでお釈迦さまは、その道理からもう一歩奥へは行って、人間としての本質の平等を、仏になれるというこの上ない保証によってズバリと明らかにされたのです。いいかえれば、「男女にかかわらず、すべての人間は、ほんらい平等な仏性をもっているのだ」という思想を、ここで徹底せしめられたわけです。

ひとつ気になるのは、竜女が女性としてのすがたで成仏せず、男性のすがたに変じて仏となったということでしょうが、これは当時のインドの人たちの心理を考えてみれば、すぐわかることです。女が男に変じて仏となるという劇的な表現をすれば、女性蔑視の思想にこりかたまっていた当時の大衆には、たいへん印象的であり、その意味もよくわかるからです。なにも深刻に考えることはないのです。

### 信の力の偉大さ

ところで、竜宮からきた八歳の娘がたちまち仏となる……というのは、舍利弗さえ信じられないことだったのですが、このことには、つぎのような教えがこめられているのです。

八歳の娘というのは、幼子のような素直な心を象徴したものであり、竜宮界というのは、中央の文明からはるかに離れたところを象徴しているのです。また、三千大千世界にも値する宝珠というのは、信ということにほかなりません。

幼子のような素直な心で、仏さまの教えを信ずれば、その瞬間からわれわれは仏さまと溶けあい、一体になることができます。宇宙がわがものとなってしまふのです。ですから、信はたしかに三千大千世界に匹敵する値うちがあるのです。

その宝珠を仏さまがすぐお受けとりになったというのは、信があれば仏さまのみ心と瞬時に直通することができるということです。そこに生まれる感応が、成仏の最短通路だということです。

文明がすすむと、人びとは、ともすれば、りくつだけで宗教の教えをひねくりまわし

たがります。理解<sup>りかい</sup>ということはもちろんたいせつなことです、りくつに終始<sup>しゅうし</sup>していたのでは、心の奥<sup>こころおく</sup>からパッと悟<sup>さと</sup>るといすばらしい回心<sup>えしん</sup>には、なかなか到達<sup>とうたつ</sup>しえません。ところが、竜宮界<sup>りゅうぐうかい</sup>の八歳<sup>さい</sup>の娘<sup>むすめ</sup>というような、幼<sup>おきな</sup>く充分<sup>じゅうぶん</sup>な教育<sup>きょういく</sup>も受<sup>う</sup>けていないものでも、無<sup>む</sup>我が心<sup>こころ</sup>で仏<sup>ほとけ</sup>さまの教<sup>おし</sup>えをぜったいに信<sup>しん</sup>ずれば、そのままほんとうの悟<sup>さと</sup>りの境<sup>きょうち</sup>地<sup>ち</sup>にはいれるわけです。

われわれも、仏<sup>ほとけ</sup>さまの教<sup>おし</sup>えを学<sup>まな</sup>ぶにあたっては、いろいろな既成<sup>きせい</sup>の知<sup>ち</sup>識<sup>しき</sup>や、固<sup>こ</sup>定<sup>てい</sup>した観<sup>かん</sup>念<sup>ねん</sup>や、身<sup>み</sup>にこびりついた感<sup>かん</sup>情<sup>じょう</sup>をなげうって、白紙<sup>はくし</sup>になっ受<sup>う</sup>け入<sup>い</sup>れることがたいせつです。このことを、この《提婆達多品<sup>だいばだつたほん</sup>》からつぎの《勸持品第十三<sup>かんじほんだいじゅうさん</sup>》にかけての一連<sup>いちれん</sup>の女<sup>にょ</sup>人<sup>にん</sup>成<sup>じょう</sup>仏<sup>ぶつ</sup>物語<sup>ものがたり</sup>から、しっか<sup>う</sup>り受<sup>う</sup>けとめなければならぬのです。

## 勸持品第十三

この品のはじめのほうは、お釈迦さまの養母であった摩訶波闍波提比丘尼と、妻であった耶輸陀羅比丘尼が授記されるくだりです。ここで、さきの竜女の物語を受けて、女人成仏のしめくりがつくわけですが、このふたりの比丘尼のように、教養も高く、徳も積み、しかもお釈迦さまから直接教えを受けた婦人が、なぜ最後まで授記されず、文殊師利から教えを受けた、いわば孫弟子であり、しかも異国の娘である竜女のほうに授記されたのか……これにはつぎの二つの教えがこめられていると受けとるべきです。

白紙の心で法を素直に受けとる

第一は、まえの阿難・羅睺羅(らごら)の場合とおなじケースです。お釈迦さまを赤ちゃんのときから手塩にかけて育てたとか、かつて夫人として子までもうけた仲であるとか、そういうあまりにも身近な人の教化のむずかしさを、ここで教えられているのです。

竜女と文殊菩薩のように、たんなる師弟のあいだがらであれば、むしろすらすらと法を受け入れることができるのにたいして、指導者とごく身近なあいだがらにある母や妻は、肉親としての感情がわざわざいして、かえって法の受け入れがスムーズにいかないことが、一般的にはおおいにありうるのです。

そのようなことを教えるために、わざと授記を遅らされたものと解することができます。したがって、なにもこのふたりの比丘が竜女に劣っていたのではけっしてないわけです。

第二に、「教えを正しく伝えるかぎりは、だれが伝えようと問題ではない。また、それを素直に受けとるかぎり、教育や教養のあるなしは問題ではない。みんな仏の悟りを得られるのだ」ということが、教えられているのです。お釈迦さまの直接のお弟子ではなくても、何千年も後世の人間であっても、またどんな国、どんな民族に属する人であっても、そんなことは一切問題ではなく、白紙の心で法を素直に受けとれば、それで救われるのだということです。現代のわれわれにとって、ひじょうにありがたい教えだとおもいます。

菩薩の弘教の誓い

さて、《勸持品》の中心となるのは、このあとのほうで、法華經のこれまでの説法に深く感動し、とくに《提婆達多品》においてすべての人間は平等に仏性をもっているという真実を現実に即して教えられた菩薩たちが、このすばらしい教えをいのちをかけて守護し、実践し、説きひろめることを、力づくよく誓う段であります。

勸持というのは、受持を勧めるという意味ですが、この品では、ひとに勧めることばはほとんどのべられていず、みずからの決意を誓うことばに終始しています。ひとに

勧めるには、まず自分自身に固い決意ができていなければならず、また自分自身が実践してみせなければ、ほんとうにひとをみちびくことはできないわけですから、この《勸持品》という題名もなかなか意味が深いといわなければなりません。

### 勸持品二十行の偈

この品でとくにだいじなところは、最後にある、いわゆる勸持品二十行の偈（むかしの漢字だけの経文には、四句を一行にして二十行に書かれていたため、こう呼ばれた）です。日蓮聖人が、この偈にのべられていることが、ひとつのこらざるご自分の身にあらわれてきたことによって、「われこそ末法の世に法華経を説きひろめる使命をもって生まれたものだ」という自覚を得られたというのは、有名な話です。その二十行の偈の大意は、およそつぎのとおりです。

「わたくしどもは、仏さまを心から敬っておりますから、仏さまが最高の教えであるとお説きになるこのお経を、仏さまとおなじように敬います。それゆえに、この法華経を守り、説きひろめるためには、外部から加えられるもろもろの迫害や困難をじっと忍びます。わたくしどもは、命など惜しいとはおもいません（我身命を愛せず）。ただ、この無上の教えに触れない人がひとりでもいることが、なによりも惜しいのでございます（但無上道を惜む）。

世間の一般大衆の無理解からくる軽蔑も、他の宗派の専門家たちの敵意からくる迫害も、高い地位をかさに着てこの教えを意識的に無視したりおしつぶそうとしたりする人の力をも、すべておそれはばかることなく、どんなところへでも行ってこの法を説きましよう。

わたくしどもは、まさしく世尊の使いでございます（我は是れ世尊の使なり）。誓って全力をつくし、正しく法を説きひろめます。仏さま、どうぞ心安らかにおぼしめしてくださいませ」

### 三類の強敵

ここに、法華経にたいする三種の大敵があげられています。現代は信教の自由の世の中ですから、二千年前のインドにおいて法華経を信ずるグループが受けたような、あるいは七百年前に日蓮聖人が体験されたような迫害はありませんが、現代的な形において、やはり似たようなものが存在します。

第一を俗衆増上慢といって、《法華経》を読んだこともなく、内容もほとんど知らないくせに、それを独善的な教えだと非難したり、その信者を軽蔑したりする一般大衆です。これは、過去における法華経信者にも一半の罪があるわけですから、われわれは、そ

れを反省し、法華經のみを独善的にふりかざしたり、政治的に利用したり、あまりにも現世利益的に説くことをつつしみ、あくまでもその本義にのっとり、おだやかさのなかに心のつよさのこもった、信仰者らしい態度でそれを説かねばならないのであります。

第二を道門増上慢 といひ、他宗教・他宗派の人たちが、あたまから敵意をもって、法華經の真意を理解しようとしなない態度です。宗教とくに仏教のだいじな精神のひとつに、寛容ということがあります。過ちをおかしたものをゆるし、すべての人をいさぐとるのが宗教です。

それなのに、教義の表面における相違や、信仰上の所作のちがいによって、感情的に他宗教・他宗派を敵視するのは宗教者とはいえないのです。

そういう人たちにたいして、もしわれわれ法華經行者がめくじらをたてて抗争するならば、われわれ自身が寛容の精神をふみにじることになります。どこまでも忍辱の態度をもって、そのような人たちが宗教の本義にめざめるように、粘りづよい努力をつづけねばならないのです。

第三は、僭聖増上慢 といひ、宗教界・学界において高い地位にあり、世の尊敬を受けている人が、その状態に陶醉し、あるいはその地位を守ろうとして、正しい教をないがしろにすることです。ほんとうにえらい人だったら、「これこそ真実の教えだ」と知ったなら、敢然としてそれを支持するはずですが、心の狭い人は、えてして新しくうちだされた教えにそっぽを向いたり、よりすぐれた教えをけむたがったりするものです。そういう場合、「あの人はえらい人（聖）だ」という世間の信用や尊敬を意識的に利用がちで、その影響力はたいへん大きなものがありますから、この僭聖増上慢は三つの増上慢のうちでもっとも悪質なものとしてされています。

われわれは、なにもまっこうからそういう増上慢に対抗する必要はなく、自分の信ずる真実の教えを、あくまでも正道を踏んで広宣流布していけばいいのです。真実の教えは不滅だからです。一方、もしわれわれがそのような地位になったとしたら、けっしてそのような増上慢におちいることなく、つねにみずみずしい頭脳と、柔軟な心をもって、若い勢力を受け入れ、消化するように心がけねばならないとおもいます。

### 不惜身命

この偈のなかにある我身命を愛せず 但無上道を惜む というすばらしい対句から、法華經行者の合言葉である 不惜身命 が生まれました。

もちろん現代人の 不惜身命 は、生命そのものを惜しまないというのではなく、自分の個人的な利益を意に介しないということになりましょう。すなわち「時間や、労力などはすこしも惜しくない。また、世間の人たちがどんな目で見ようと、どんなことをいおう

と、すこしも<sup>おそ</sup>恐れはばかることはない」……ということです。

なぜそういう<sup>きもち</sup>気持になるのかといいますと、<sup>しんり みょうほう</sup>真理(妙法)を<sup>お</sup>惜しむからです。この<sup>むじょう</sup>無上の<sup>おし</sup>教えに<sup>ふ</sup>触れない<sup>ひと</sup>人がひとりでものこっていることが、<sup>お</sup>惜しまれてならないからです。それぐらいの<sup>じゆんすい きもち</sup>純粹な<sup>ほ けきょう ぎょうじゃ</sup>気持になってこそ、ほんとうの<sup>ほ けきょう ぎょうじゃ</sup>法華經の<sup>お</sup>行者ということが可能です。

## 安楽行品第十四

まえの《勸持品第十三》において、菩薩たちが、今後のさまざまな迫害を予想し、それにたいする覚悟をのべたのにたいして、お釈迦さまが、「いつも安らかな心で、みずからすすんで法を説け」とお教えになり、そのための具体的な心がまえをこまごまとお説きになり、結論として、法華經の教えを心から信じ、身に行なえば、いかなる困難をも超越した安らかな心境にたつことができ、色心不二の法則によって、その安らかさは身体の上にも、生活の上にもあらわれてくる ということを保証されるのが、この品です。

### 四安楽行

文殊菩薩が、「険悪なこの世において、どうすればよくこの法華經を説くことができるのでございましょうか」と釈尊に質問しました。その質問に釈尊がお答えになったのが、菩薩にとっての四つの基本的な心得（四安楽行）というわけです。

その第一は身安楽行 といい、自分自身の身のふるまいについての基本的な心得（行処）と、世間の人びととの交際において必要な基本的な心得（親近処）とからなります。

第二は口安楽行 といい、ことば遣いや、言ってはならないことなどが戒められます。

第三は意安楽行 といい、嫉妬や、へつらい、他者への悪意をなくし、常に安らかな意で法を説きなさいと戒められます。

第四は誓願安楽行 といい、すべての人を仏の道へと導こうという誓願をおこし、その誓願に向かってまっしぐらに行きなさいと、おさとしくくださるのです。

### 髻中明珠の譬え

この品のお説法のなかに、法華七論の第六である髻中明珠の譬え があります。その大意は、

「ひじょうにつよいある国の王が、命令に従わぬ国々をつぎつぎに討伐しました。それらの戦いにてがらをたてた将士には、領地や、田畑や、王が手足につけている装飾品など、いろいろな宝ものをほうびとしてあたえましたが、王の髪のみげのなかに結びこめてある宝玉だけは、だれにもあたえませんでした。それがあまりにも尊いものであるために、もしそれをあたえたならば、もらった人も、ほかの家来たちも、ただびっくりし、当惑するにきまっているからです。

わたしが、法華經をなかなか説けなかったのは、ちょうどこのような理由によるもので

す。これまでさまざまな教えをみなさんに説いてきました。それによって、心が安定して動揺しない境地や、人生苦から超越した境地や、すべての煩惱を除きつくした境地など、いろいろ貴重なものをほうびにあたえました。しかし、法華經の教えだけはなかなか説きませんでした。説いてみても、みなさんが当惑するばかりだったからです。

ところが、この王は、最終的にすばらしい大功をたてたものがあると、まげのなかに結いこめたその宝玉を惜しげもなくあたえるのですが、わたしもその王のとおりであって、すでにみなさんの境地がひじょうに高まってきましたので、最後のほうびとして、いまこそ最高の教えである法華經を説いてあげるのです」

精神はとらえにくいが最も大切

この譬えの表面だけを読みますと、「法華經は最高至上の教えである」という賛歎と、「だから、めったなことでは説かなかったのだ」という理由づけのことばとしか受けとれませんが、やはりこのなかには人生にたいする教訓がいろいろとふくまれているのです。

第一に、ほかの宝ものは、王の手足につけたものや、たんなる所有物にすぎませんでした。その宝玉（明珠）だけは、王の頭にあるものでした。頭とは精神の宿るところであり、からだ全体を支配するところです。手足などはふつうの人でも自由に使いこなせますが、精神というものは、いちばん貴重なものでありながら、つかまえどころがないだけに、なかなかの難物です。

しかし、この精神というものをしっかりとらえ、調御し、高めていかないかぎり、りっぱな人間とはいえないのです。人生の至高の目的は、頭にあるものすなわち精神をよりよくしていき、ついには人格を完成すること（仏になること）にあるのだということを、この譬えからくみとらねばなりません。

最高の奥義は最後に

第二に、法華經は、人間でいえばちょうど精神にあたるようなもので、最高の奥義であるために、それを理解できるほどに境地がすすんでいない人にあたえようとすれば、かえって混乱や疑惑を生ずる……ということが、この譬えにのべられています。これは世俗のいろいろな学問や技術の勉強についても、おなじことがいえるのです。

初歩の人に、はじめから最高の奥義を教えようとすれば、聞いた人はなんのことやらわからず、とうていついていけないので、途中からやめてしまう人が続出するでしょう。ですから、教える側にしてみれば、ごくごく初歩のやさしいことからはいって、だんだんに修練を積ませたのち、いちばん最後の段階で、ギリギリ最高の奥義を教えなければなりません。そのことが、この譬えのなかに暗示されているのです。

## 基礎的な修行の重要さ

これをひっくりかえして、修行する側の心得として見れば、基礎的な修行こそ、最高の奥義にたつするために必要欠くべからざるものであるということになります。現代の人間、とくに高等教育を受けた若い人たちは、とかくこうした基礎的な修行をいやがり、いきなり高いところへゆきたがります。そのため、人間としても、職業人としても、中途半端な存在となってしまうのです。基礎的な修行こそ、大成のための絶対必要な条件であることを、この譬えのなかから学びとらなければならぬとおもいます。

## 従地涌出品第十五

この品から、いよいよ仏というものが明らかにされる本門には入ります。この品の前半が本門の序文(序章)で、その後半から、つぎの《如来寿量品第十六》の全部、そのつぎの《分別功德品第十七》の前半までのいわゆる一品二半が、正宗分(本論)となるわけです。

### 他方の菩薩の誓願

さて、世尊が《安楽行品第十四》の説法を終えられますと、他の方々の国土からきていた無数の菩薩たちが立ちあがり、「もしおゆるしくくださいますならば、わたくしどももこの娑婆世界にとどまり、世尊のご入滅後もこの教えを護持し、説きひろめたいとぞんじますが、いかがでしょうか」ともうしあげます。

世尊は、「お志はありがたいが、その必要はありません。この娑婆世界には、ずっとむかしから無数の菩薩たちがおり、法華經を説きひろめる役目はその人たちがやってくれるからです」とお答えになりました。

### 地涌の菩薩の出現

その瞬間、大地に無数の割れ目ができ、そこから、ほとんど仏に近いような貴相をそなえた菩薩たちが、かぞえきれないほど湧きだしてきたのです。そのなかの指導者格である上行・無辺行・浄行・安立行という四大菩薩は、お釈迦さまのまえにすすみ出て、ご挨拶をもうしあげますと、お釈迦さまは、たいへん親しげにそれにお答えになります。

### 弥勒菩薩の疑問

そのありさまを拝していた、弥勒菩薩をはじめとする娑婆世界の菩薩たちは「このようなりっぱな菩薩がたは、いったいどこからこられたのか、どういう因縁の人たちなのか」という疑問を起こしました。そして、弥勒菩薩がそのことを釈迦さまにおたずねいたしますと、「大地から湧きだしたこれらの菩薩たちは、わたしが娑婆世界において悟りをひらいてから教化したもので、いままで娑婆世界の下の虚空に住していたのです。そして、この菩薩たちは、はるかなむかしからわたしが教化してきたのです」とお答えになります。

さあ、いよいよわからなくなりました。釈迦さまが悟りをおひらきになってから、まだ四十余年しかたっていないのに、ほとんど無数ともいふべきこの人たちを、しかも仏さまに近いほどのりっぱな菩薩に育てあげられたということは、どうしても腑に落ちません。それに、ながいあいだ仏さまのおそばにつかえていたのに、この人たちをいっぺんも見た

ことがないのです。

かとおもうと、こんどは「じつは、はるかなむかしから教化してきたものである」とおっしゃるのですから、まったく頭がこんがらかってしまいそうです。たまりかねた弥勒菩薩が率直にそのことをもうしあげて、教えを請うところで、この品は終わっています。

### 本化の菩薩と迹化の菩薩

ここで、本化の菩薩と迹化の菩薩について、のべておきたいと思います。

迹化の菩薩とは、迹仏に教化された菩薩たちのことをいいます。迹仏とは、インドにお生まれになり、菩提樹下で悟りをひらかれた釈迦さまのことです。ですから、迹化の菩薩とは、この世に生をうけた人間である菩薩なのです。

本化の菩薩とは、本仏に教化された菩薩たちのことをいいます。本仏とは、いうまでもなく、この後の《如来寿量品》において開顕される久遠本仏のことです。その本仏に教化されたのが、本化の菩薩である地涌の菩薩であったのです。ですからまだ、無量の寿命をもつ久遠本仏のことを知らない弥勒菩薩たちは、釈迦さまのいわれたことが何がなんだかわからなかったのです。

このように本化の菩薩と迹化の菩薩には、はっきりとしたちがいがあり、本化の菩薩である上行等の四菩薩をはじめとする地涌の菩薩が、いかにすばらしい菩薩であるかが、ここで口をきわめて誉めたたえられております。

なぜここで、本化の菩薩のりっぱさが強調されているのかといえますと、本化の菩薩たる自覚をもつものが、いかに尊くすばらしい存在であるかを、強く印象づけるように表現したかったからです。そして、すべての人に地涌の菩薩のような、すばらしい存在になりたいというあこがれと、願いをもってほしかったからに他なりません。ですから、ここでひとつの伏線として、このような表現がなされたのです。

つまり、このあとの《如来寿量品》で明らかにされることですが、この世に生をうけたお釈迦さまご自身が、久遠本仏そのものであるわけです。ですから、お釈迦さまがまさしく久遠本仏であることを知り、自分がその本仏の実子であることをしんそこから確信し、本仏として説かれたこの法華経を實踐するならば、すでにその人は生身の人間でありながら、本化の菩薩なのであります。

それゆえ、迹化の菩薩と本化の菩薩は本来はひとつであり、けっして別のものではないのです。

したがって、現代のわれわれも、お釈迦さまの教えを学び、実践し、その人の能力の範囲だけで世の人を救うはたらきをするだけならば、迹化の菩薩であり、もし「自分は久遠の本仏に教化された地涌の菩薩であり、本来本仏と一体の身である」ということをし

んそこから自覚し、本仏の本願を自分の本願として、法華經の精神をもって菩薩行を行なえば、行なう所作はおなじでも、りっぱな本化の菩薩であります。迹化の菩薩と本化の菩薩は、外から見ればおなじような信仰形態をとっているように見えますけれども、その信仰内容にたちいってみると格段のひらきがあり、それが教化・救済のはたらきにあらわれてくるわけです。

### 地涌の菩薩の価値

この品にとつぜんあらわれてきた地涌の菩薩については、いろいろな見かた考えかたがありますが、とくにつぎの三つのことがたいせつだとおもいます。

第一に、お釈迦さまが、他の世界からきている菩薩のもうし出をことわられて、地涌の菩薩にこの娑婆世界の教化を任せられたということ。

それはつまり、どの世界でも、そこに住んでいる人びと自身の努力によってその世界を平和にし、自身の手で幸福な生活を築きあげていかなばならないという教えです。

第二に、娑婆世界の下の虚空に住して、悟りの境地を楽しんでいた菩薩たちが、お釈迦さまのお声に応じて、大地をくぐりぬけて出現したということ。

娑婆世界の下の虚空に住している菩薩というのは、たしかにこの世の人でありながら、空の悟りに安住し、その悟りを人間世界救済のために発動せずにいる人です。空の悟りとは、人間に即していえば、人間の本質は平等な仏性であるということですから、たしかにこの真理は悟っているけれども、内にその悟りを楽しんでいるだけで、外へむかってはたらきかけようとしない人です。それでは、その人自身は汚れのないりっぱな人ですけれども、衆生救済の役には立たないのです。

どうしても、一度大地をくぐりぬける必要があります。すなわち、現実社会の生活を体験し、汚れと濁りのなかであえいでいる大衆のなかに飛びこみ、その苦しみ悩みにじかに触れる必要があるのです。そうしてこそ、ほんとうに人間を指導し、救済することができるわけです。つまり、観念論だけではだめで、現実に即さなければ生きた人間は救えないということなのです。

第三に、それらの地涌の菩薩たちの指導者格である四大菩薩に、上行・無辺行・淨行・安立行と、すべて行という名がつけられているということ。

《法華經》の前半は、主として理の教えであり、智慧の教えでしたが、その前半の説法が終わったとたんに、これらの行の菩薩が無数に出現したというのは、いうまでもなく、教えは実践しなければなんにもならぬということにほかなりません。前半の迹門の説法で説かれた諸法実相の智慧を現実生活にあらわし、慈悲の行ないとして実践する行動者こそ、真の菩薩であり、ほんとうに仏の教えをこの世に生かす人なのです。このことは、

げんぜ  
現世のわれわれにもそっくりそのままあてはまることですから、よくよく<sup>こころ</sup>心しなければなら  
ないことだとおもいます。

によらいじゅうりょうほんだいじゅうろく  
如来寿量品第十六

迹門の柱である《方便品第二》においては、諸法実相 ということ説かれました。その結論は本末究竟等 すなわち 目に見える現象は、一定の法則によってさまざまな変化を見せるけれども、はじめ(本)からおわり(末)まですべて等しいのである ということでした。これはあくまでも哲学的な真理であり、きわめて冷厳なものです。それだけに、たんにその真理を悟っただけでは、すぐさまそれが人間の救われや生きがいには結びつかないのです。

それゆえ、お釈迦さまは、その真理を人間に即して 人間の本質は仏性である という方向へ、しだいしだいに説きすすめられました。はじめから明らかにそれをお説きになっても、一般の人びとにはすぐのみこめるはずがないので、譬え話をなさったり、過去世の物語にことよせたりしながら、暗示的にだんだんと人びとの心をその方向へ引き寄せてこられたのです。

くおんじつじょう せんげん  
久遠実成の宣言

そして、ついにこの《如来寿量品第十六》の説法で、その真実をハッキリとうち明けられるのです。すなわち、仏の寿命は不生不滅であり、その仏を久遠実成の本仏といひ、釈尊こそその久遠実成の本仏であるとお説きになりました。そして、人間は(人間以外の万物も)その久遠本仏に生かされている 仏の実子であることを明らかにされるのです。そこで、冷厳で哲学的な諸法実相の悟りに、人間的な温かい血が通いはじめ、人びとは「自分 は久遠の本仏の慈悲にいだかれているのだ、生かされているのだ」という、しみじみとしたありがたい思いにつつまれるようになるのです。そうやってこそ、ほんとうの幸せが生まれ、ほんとうの生きがいを感じられてくるわけです。

いうならば、迹門は哲学的な悟りの教えであり、本門はそれに精神鼓舞のエネルギーをあたえた、宗教的な教えの極致なのであります。それゆえ、この品こそは《法華經》のみならず、一切經の魂魄であるといわれているわけであります。

この品には、そういう真実が理論的にも説かれていますが、なんととっても、すべての人にわかりやすいようにというお心づかいから説かれた 良医治子の譬え が、この品の中心心であるといつていいとおもいますから、その譬え話にもとづいて、この品の教えの要点を 考えていくことにしましょう。

ろういじし たと  
良医治子の譬え

ある所にひとりの医師がいました。すぐれた智慧をもち、薬の処方にも熟練していて、

どんな病気ででも治す名医でした。

その人にたくさんの子どもがいましたが、父の医師が所用で他国へ出かけたらずに、あやまって毒になる薬を飲んでしまいました。父が家におればそんなことは起こらないのですが、るすのあいだはしたいほうだいの生活をしているので、ついそんなことになったのです。

だんだん毒がまわってくると、子どもたちは地べたをころげまわって苦しみました。そこへ、さいわい父が帰ってきました。子どもたちは、あるものはあまり毒がまわっていず、あるものは毒のために本心を失っているものもありましたが、それでも遠くのほうに父の姿をみつけると、一様にたいへん喜びました。

みんな父の前にひざまずいて、「おとうさん、よく帰って下さいました。わたくしどもはばかなことをしてしまったのです。まちがって、毒になる薬を飲んでしまいました。どうか治療して下さい。命を助けて下さい」と頼みました。

父は子どもたちが苦しんでいるのを見て、よく効く薬草の、しかも色・味・香りのいいものを選んで、飲みやすく調合して、子どもたちにあたえました。「これはすばらしくよくきく薬だ。さあ、すぐお飲み。いまの苦しみが治るばかりか、これから先も病気ひとつしなくなるよ」

子どもたちのなかで本心を失っていないものは、すぐそれを飲みましたので、毒による病はすっかり治ってしまいましたが、毒が深くまわっている子どもたちは、さきほどは「病気を治して下さい」と頼んでおきながら、せっかくの薬を飲もうともしないのです。なぜかといえば、毒のために本心を失っているのです。その薬が色もわるく、へんな臭いがするように感じられて、飲む気になれなかったのです。

それを見て、父の医師は考えました。「ああ、かわいそうに、毒のために心がすっかり顛倒（てんどう）しているのだ。しかたがない。こうなったからには非常手段をとって、この子たちがかならず薬を飲むようにしむけよう」

そこで、父は「みんなよく聞きなさい。わたしはもう年をとって、死期が近づいている。それなのに、また用があって他国へ出かせなければならぬのだ。それで、この良薬をここにおいておくから、かならず飲むのだよ」といいのこし、旅に出てゆきました。そして、旅先から使いを出して、「お父上はおなくなりになりました」と上げさせました。

それを聞いた子どもたちは、たいへんおどろき、悲しみました。「ああ、おとうさんがおられたらなあ……」という心細さが、痛切に感じられてきました。すると、そのショックで、ハッと本心にたちかえることができました。

そこではじめて、父ののこしていった薬が色も香りもいいのに気がつき、さっそくそれを飲みますと、たちまち毒による病はすっかり治ってしまいました。

ところがどうでしょう。子どもたちが治なおってしまうと、死しんだとばかりおもっていた父ちちが他国たこくから帰かえってきて、みんなの前まえに元げん気きな姿すがたをあらわしたのであります。

すべての煩悩ぼんのうの根本こんぼんは

父ちちの名医めいいいは仏ほとけさまであり、子どもたちはわれわれ凡夫ぼんぶです。毒どくになる薬くすりというのは五欲ごよくの煩悩ぼんのうであり、良薬りょうやくというのは仏ほとけさまの教えであります。

凡夫ぼんぶはさまざまな煩悩ぼんのうをもっていますが、煩悩ぼんのうの起おこるいちばんの根本原因こんぼんげんいんをさぐってみますと、目めに見えるもののみを実在じつざいとおもい、それにとらわれ、むさぼりの心こころを起おこすところにあるのです。自分のからだをはじめとして、目の前まへにあるさまざまな物質ぶつじつや、金銭きんせんや、まわりに起おこるものごとを、確固かつことして実在じつざいするものと見るために、それにとらわれ、心こころをふりまわされて苦しむのです。

縁起観えんぎかん

そこでお釈迦しゃかさまは、「この世よのすべての現象げんしょうは、因いんと縁えんによって生しょうじた仮かりのあらわれにすぎない。その因いんと縁えんがなくなれば現象げんしょうもなくなり、ちがった因いんと縁えんとが和合わごうすれば、かならずそれにふさわしい現象げんしょうがあらわれるのだ」という真理しんり（縁起観えんぎかん）を教えられました。その真理しんりにもとづいて十二因縁じゅうにんねん・四諦したい・八正道はっしょうどう・六波羅蜜ろくはらみつなど、いろいろな教えを説とかれました。そして、それらの教えによって、おおくの人ひとびとが迷まよいをのぞき、安やすらかな心境しんきょうにたつすることができました。

仏ほとけさまは不生不滅ふしょうふめつ

しかし、お釈迦しゃかさまのようなりっぱな指導者しどうしゃがいつも身近みぢかにおられて、たえずそのような教えによって人ひとびとを導みちびいてくださるうちは無事むじですが、そのような指導者しどうしゃがいなくなると、だんだんと元の木阿弥もとのもくあみにもどっていくのが、凡夫ぼんぶの悲かなしさです。目めに見えるものしか信じられない凡夫ぼんぶは、久遠実成くおんじつじょうの本仏ほんぶつである仏ほとけさまはつねにそばにおられるのに、目めに見える仏ほとけさま（お釈迦しゃかさま）が入滅にゅうめつされてしまうと、ついでをふみはずすようになるおそれがあります。

お釈迦しゃかさまはそれを心配しんぱいされ、そのために、不生不滅ふしょうふめつであるということをしつかり教えこんでおこうとして、この譬たとえをお説ときになったのです。たとえ指導者しどうしゃがいなくても、真実しんじつの教えさえのこっておれば、それで救すくわれるからです。

子どもたち（衆生しゆじょう）が、父ちち（仏ほとけさま）のるすに、あやまって毒どくになる薬くすりを飲のんで七転しちてん八倒はっとうしたのは、りっぱな指導者しどうしゃがいなくなったために、したい放題ほうだいの生活せいかつをしはじめ、それで苦くるしみを招まねいたというわけです。

そこへ、父上ちちうえが旅行りょこうから帰かえってこられました。毒どく（五欲ごよくにふりまわされる生活せいかつ）のため

に本心<sup>ほんしん</sup>を失<sup>うしな</sup>っていた子どもたちも、それを見<sup>み</sup>てたいへん喜<sup>よろこ</sup>びました。なぜかといえば、どんなに道<sup>みち</sup>をふみはずしていても、人間<sup>にんげん</sup>には、仏性<sup>ぶつしょう</sup>というものがちゃんとあるからです。

宗<sup>しゅうきょう</sup>教<sup>きょう</sup>を窮<sup>きゅうくつ</sup>屈<sup>くつ</sup>におもう心理<sup>しんり</sup>  
 名医<sup>めいい</sup>の父<sup>ちち</sup>すなわち仏<sup>ほとけ</sup>さまは、迷<sup>まよ</sup>いをのぞく薬<sup>くすり</sup>とか、ほんとうの智慧<sup>ちえ</sup>を得<sup>え</sup>させる薬<sup>くすり</sup>  
 とか、ひとのためにつくす心<sup>こころ</sup>を起<sup>お</sup>こさせる薬<sup>くすり</sup>など、いろいろ貴重<sup>きちょう</sup>な薬<sup>くすり</sup>を調<sup>ちようごう</sup>合<sup>ごう</sup>し、  
 それを凡<sup>ぼん</sup>夫<sup>ぶ</sup>にものみやすいようにしてあたえられました。これが方便<sup>ほうべん</sup>の教<sup>おし</sup>えです。

それを飲<sup>の</sup>んだ衆<sup>しゅじょう</sup>生<sup>じょう</sup>はすぐ救<sup>すく</sup>われたのですが、せっかくの良<sup>りょうやく</sup>薬<sup>やく</sup>を飲<sup>の</sup>もうともしない衆<sup>しゅじょう</sup>生<sup>じょう</sup>もたくさんいるのです。なぜかといえば、ほんとうは香<sup>かお</sup>りも味<sup>あじ</sup>もよいその薬<sup>くすり</sup>が、本心<sup>ほんしん</sup>を失<sup>うしな</sup>っている衆<sup>しゅじょう</sup>生<sup>じょう</sup>にとっては、へんな臭<sup>にお</sup>いのする、いやな色<sup>いろ</sup>の薬<sup>くすり</sup>に見えるので、手<sup>て</sup>を出<sup>だ</sup>した  
 がないのです。ということはつまり、五<sup>ご</sup>欲<sup>よく</sup>の楽<sup>たの</sup>しみにおぼれきっている衆<sup>しゅじょう</sup>生<sup>じょう</sup>は、仏<sup>ほとけ</sup>さまの教<sup>おし</sup>えがなんとなく窮<sup>きゅうくつ</sup>屈<sup>くつ</sup>なように感<sup>かん</sup>じられて、その教<sup>おし</sup>えのなかにはいろうとしない……  
 というわけです。

### 恋慕<sup>おも</sup>渴<sup>かつ</sup>仰<sup>ごう</sup>（れんぼかつごう）の思<sup>おも</sup>い

これは、まったくあさはかな人間<sup>にんげん</sup>のわがままなのです。そこで、仏<sup>ほとけ</sup>さまは衆<sup>しゅじょう</sup>生<sup>じょう</sup>の目<sup>め</sup>を覚<sup>さ</sup>まさせるために非<sup>ひ</sup>常<sup>じょう</sup>手<sup>しゅだん</sup>段<sup>だん</sup>をおとりになります。すなわち、見<sup>み</sup>えないところへ、一<sup>いち</sup>時<sup>じ</sup>身<sup>み</sup>をおか<sup>か</sup>くしになるのです。

歴<sup>れき</sup>史<sup>し</sup>的<sup>てき</sup>にいえば、お釈<sup>しゃく</sup>迦<sup>か</sup>さまが入<sup>にゅうめつ</sup>滅<sup>めつ</sup>されることです。そうすると、人<sup>ひと</sup>びとは、にわか  
 心<sup>こころ</sup>細<sup>ほそ</sup>くなり、失<sup>うしな</sup>った大<sup>だい</sup>指<sup>し</sup>導<sup>どう</sup>者<sup>しゃ</sup>を恋<sup>こ</sup>い慕<sup>した</sup>う感<sup>かん</sup>情<sup>じょう</sup>が猛<sup>もう</sup>烈<sup>れつ</sup>に起<sup>お</sup>こってきます。のどの渴<sup>かわ</sup>いた人<sup>ひと</sup>  
 が水<sup>みず</sup>を求<sup>もと</sup>めるような切<sup>せつ</sup>実<sup>じつ</sup>さで、仏<sup>ほとけ</sup>を求<sup>もと</sup>める心<sup>こころ</sup>が湧<sup>わ</sup>いてくるのです。この思<sup>おも</sup>いを、経<sup>きょう</sup>典<sup>てん</sup>の  
 偈<sup>げ</sup>のなかでは恋<sup>れん</sup>慕<sup>ぼ</sup>・渴<sup>かつ</sup>仰<sup>ごう</sup>（かつごう）といっています。

そういう痛<sup>つう</sup>切<sup>せつ</sup>な思<sup>おも</sup>いが生<sup>しょう</sup>ずれば、人間<sup>にんげん</sup>はかならず本<sup>ほん</sup>心<sup>しん</sup>にた<sup>た</sup>ちかえります。目<sup>め</sup>が覚<sup>さ</sup>めるの  
 です。これはなんとかしなければならぬとおもって、のこされた教<sup>おし</sup>え（良<sup>りょうやく</sup>薬<sup>やく</sup>）にと  
 びついていくのです。

この恋<sup>れん</sup>慕<sup>ぼ</sup>渴<sup>かつ</sup>仰<sup>ごう</sup>（れんぼかつごう）の相<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>は、かならずしも現<sup>げん</sup>実<sup>じつ</sup>の仏<sup>ほとけ</sup>さまにはかぎり  
 ません。これを抽<sup>ちゅう</sup>象<sup>しょう</sup>的<sup>てき</sup>に考<sup>かんが</sup>えれば、つぎのようになります。いままでは神<sup>かみ</sup>とか仏<sup>ほとけ</sup>とか  
 にまったく無<sup>む</sup>関<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>で、ただ日<sup>ひ</sup>々<sup>び</sup>の生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>に夢<sup>む</sup>中<sup>ちゅう</sup>になっ  
 ていた人が、ある危<sup>き</sup>機<sup>き</sup>に直<sup>ちよく</sup>面<sup>めん</sup>して、  
 なにかにすがりつきたい気<sup>き</sup>持<sup>もち</sup>になったとき、もしくは物<sup>ぶつ</sup>質<sup>しつ</sup>生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>に満<sup>まん</sup>足<sup>ぞく</sup>しきってしかもなん  
 となく空<sup>むな</sup>しいものをおぼえ、なにか心<sup>こころ</sup>の満<sup>まん</sup>足<sup>ぞく</sup>をあ<sup>あ</sup>たえてくれるものはないかとおもうとき、  
 そのすがりつきたい心<sup>こころ</sup>の満<sup>まん</sup>足<sup>ぞく</sup>をあ<sup>あ</sup>たえて欲<sup>ほ</sup>しいとおもう相<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>が、たとえ自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>では意<sup>い</sup>  
 識<sup>し</sup>しなくても、じつは神<sup>かみ</sup>・仏<sup>ほとけ</sup>なのです。

このように、歴<sup>れき</sup>史<sup>し</sup>的<sup>てき</sup>な存<sup>そんざい</sup>在<sup>ざい</sup>であつた仏<sup>ほとけ</sup>さまでもよし、抽<sup>ちゅう</sup>象<sup>しょう</sup>的<sup>てき</sup>な存<sup>そんざい</sup>在<sup>ざい</sup>である仏<sup>ほとけ</sup>さまで

もよし、とにかくほんとうに自分を救ってくれるものを、のどが渴いた人が水を求めるように求め、恋いあこがれる思いがあってこそ、その人の心は清められ、救われるのです。宗教が、哲学や道徳の教えとちがうところは、その一点にあるのです。りっぱな哲学や道徳の教えは、頭(表面の心)で「なるほどそうか」と理解するものです。すべての人が、それを理解し、そのとおりに実践できれば、問題はありません。ところが、じっさいはなかなかそうはゆきません。表面の心ではわかっている、人間にはかくれた心という始末のわるいものがある、それがしらすしらすのうちに人間を迷わせ、よくない行動をさせるのです。ですから、このかくれた心までも清めなければ、人間は救われないのですが、それをしてくれるのが宗教であり、信仰なのであります。

このことが、この品の要点のひとつであります。

### めざめれば仏さまが見える

この子どもたちも、父にたいする恋慕渴仰(れんぼかつごう)の念を起こしたからこそ、目がさめたのです。ところが、目をさまして本心にたちかえると、たちまち父は帰ってきました。ということはつまり、衆生がハッと気がつけば、いつでも仏さまはそこにいらっしゃるのだ……という意味です。

仏さまは不生不滅であり、一瞬たりともわれわれのそばから離れられることはないのです。いや、そばということばもほんとうは正確ではなくて、仏さまはつねにわれわれの内にも外にも満ち満ちておられるのです。われわれは仏さまと一体なのです。

ですから、そういう意味の仏さまが姿を消されるというのは、われわれがそれを忘れ、見失ってしまうことにすぎないのです。人間は、五官でもって実際に感じられないものについて、いつもはあまり関心がありません。また、五官で感じられるものですら、たとえば、空気でも、太陽でも、水でも、ふだんはほとんどその存在を忘れてしまいます。しかし、なにかことがあれば、とくにそれが欠乏してくると、そのありがたさをおもいだします。

仏さまにたいしても、われわれはおなじような誤りをおかしているのです。仏さまの本体は、この世のありとあらゆるものを生かしておられる久遠実成の本仏です。ですから、その本仏のみ心のとおり生きておれば、心は自由自在であり、いつもしあわせにしておられるのに、ついそれを忘れてしまうために、わがままな行ないをして、そのためにみずから苦しみを招いているわけです。

### 生かされている自覚

もしわれわれが、いつも「自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ」という自覚を深くもち、「久遠実成の本仏に生かされているかぎり、そのみ心のとおり生きること

が正しい生きかただ」という明快な眞実を悟り、本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きてゆきさえすれば、つねに大自信をもった生活ができ、人生苦などはあってもなきにひとしくなってしまうのです。

それが、ほんとうの人間らしい生きかたであり、この品は、最大の要点としてこのことを教えられているのです。

## 分別功德品第十七

この品は、まえの《如来寿量品第十六》で説かれた 仏の本体は、宇宙の万物を生かしている久遠実成の本仏であり、つねにわれわれと共にいて下さる不生不滅の存在である ということをしっかり悟ったものが当然得られる功德を、十二の項目に分け(分別し)て説き、かつ正しい信仰生活のありかたについてくわしく教えられたものです。

### 生きがいを知る大功德

その十二の項目については一々ここに説明しませんが、要するに、われわれは無始無終・不生不滅の久遠実成の本仏に生かされているのだという、信仰の根本さえつかむことができれば、その信仰をますます深めていく力も、それを他へおしひろめていく力も、ともに無限に湧いてくることを教えられているのです。そして、その信仰に徹していけば、いつかはかならず 仏さまとおなじような究極のめざめの世界にたっせられるのだという、最大最高の功德も約束されています。

もちろん、仏の境地にたつするのは、なみたいていの修行ではできません。この品に説いてありますように、八度生まれかわるあいだ修行して、ようやくたつしうる菩薩もあるのです。しかし、正しい信仰をもち、そして努力さえすれば、いつかは釈迦さまとおなじようになれるのだという真実は、われわれ人間にとって、なんとという大きな光明でしょう。この光明があるかぎり、すべての人の人生はじつに生きがいのある、楽しいものになるのです。

ただお金をもうけたり、損したり、恋愛をしたり、失恋したり、ながいあいだかかって高い地位を得たかとおもうと、ちょっとした失敗でそれを失ったり.....こうして空しい喜びや悲しみをくりかえしながら一生を過ごす.....その瞬間瞬間はなんとなく充実しているように感じて、死ぬ間際に一生をふりかえてみると、それらがみんな我執に踊らされ、影を追ってあくせくしたにすぎないことがわかり、いいしれぬ空虚感をおぼえるにちがいありません。

ところが、形のうえではそれと似たような苦しみや悲しみや喜びのくりかえしの一生でも、その人生をつらぬく信仰 という一本のつよい背骨があったならば、そして、形のうえでは浮きつ沈みつしながらもつねに仏の境地へ一歩一歩上ってゆきつつあるのだという確信があったならば、どんな苦しい生涯でも、楽しく生きていくことができ、楽しく死んでいくことができます。

われわれの生命は、この世かぎりですら終わりになるものではありません。ですから、つぎの世も、またそのつぎの世も、ただもう日常生活に起こるさまざまな事件に喜びと悲し

みをくりかえし、それが永久につづいていたり、さらには人間としての生どころか、地獄界や畜生界などの悪趣をも輪廻していくのだということがわかったら、考えただけでうんざりしてしまうでしょう。

それと反対に、眞の信仰をもちえたものは、つねに一歩ずつでも仏の境地へ近づいていくという自覚がありますから、どんな長い旅路でも、けっして飽きることがないのです。いつも希望に満ち、充実した生きかたができるわけです。これこそ、眞の信仰者のみが得られる大功德というべきでありましょう。

しかも、眞の信仰者の努力というものは、ただ自分だけが仏の境地にたつすることを目的とするものではなく、できるだけおおくの人を道連れにしてあげたいという努力をともなっているのですから、眞の信仰者がふえればふえるほど、人類全体が向上してゆき、この世界が理想の寂光土に近づいていくのです。

經典のこのところで分別して説かれたさまざまな功德は、ひっくるめていけば以上のようなことに要約されるのです。

### 流通分を学ぶ心がけ

この品の後半から《普賢菩薩勸発品第二十八》までを流通分といて、「正しい信仰をもてばどのような結果があらわれるか」ということと、「正しい信仰をもつにはどのような心がけが必要か」ということが主として説かれています。そして「その正しい信仰をのちの世まで説きひろめよ」と、お釈迦さまが、われわれをもふくむ全仏弟子に委嘱なさっておられるのです。

### 流通分の功德

この《分別功德品第十七》に説かれた功德は、信仰上の功德です。心に得られる功德です。つぎの《隨喜功德品第十八》の前半も、おなじ功德が説かれています。ところが、その後半以降には、われわれの身の上や日常生活にあらわれる功德も説かれています。人によっては「そういう功德について聞く必要はない。《法華經》の中心である一品二半を徹底的に学び、その教えをしんそこから理解し、仏の無量寿と、われわれも本来、本仏と一体なのだということを心から信ずれば、それでいいのだ」と考えることもありましょう。それが完全にできれば、りっぱです。完全な信仰です。しかし、そんな人は一人に一人いるか十万人に一人いるか……現実の問題としてはなかなかむずかしいことです。

おたがい凡夫の悲しさで、理想の境地が説かれただけでは、なんだか自分からかけはなれた遠い世界のようにおもわれるのです。やはり、身近の問題として、日常生活に即して

と説かれたとき、教えがいきいきと感<sup>かん</sup>じられます。ここに 流通分<sup>る とうぶん</sup> の第一のたいせつさがあるのです。

また凡夫<sup>ぼん ぶ</sup>の心<sup>こころ</sup>はともすればゆるみがちになります。教えのありがたいことはよくわかっていても、ただ頭<sup>あたま</sup>のうで「ありがたい教えだ」という理解<sup>り かい</sup>をもつだけでは、いつしか懈怠<sup>けい たい</sup>におちいることも起<sup>お</sup>こりえます。ところが、「正しい信仰<sup>しん こう</sup>をもち、身<sup>み</sup>に行<sup>おこ</sup>なえば、現実<sup>げん じつ</sup>にこういうふうに向<sup>こう じょう</sup>上<sup>と</sup>していくのだ」と説かれてある経典<sup>きょう てん</sup>を、つねに読誦<sup>どく じゆ</sup>すれば、ゆるもうとする信仰心<sup>しん こう 心</sup>が、そのたびにひきしまってくるのです。これが 流通分<sup>る とうぶん</sup> のたいせつさの第二<sup>だい 二</sup>です。

また、仏<sup>ほとけ</sup>さまは、われわれのような凡夫<sup>ぼん ぶ</sup>にたいしてさえ、「この教えを説<sup>おし</sup>きひろめてくれよ」と依頼<sup>いらい</sup>してくださっています。ありがたいことです。そのおことばを拝<sup>はい</sup>し、そのみ心<sup>こころ</sup>を察<sup>さつ</sup>するごとに、いいしれぬ励<sup>はげ</sup>みをおぼえるのです。大勇猛心<sup>だい いうもう じん 心</sup>をふるい起<sup>お</sup>こすのです。これが 流通分<sup>る とうぶん</sup> のたいせつさの第三<sup>だい 三</sup>です。

とにかく、十万人<sup>じゅう ばん 人</sup>中の九万九千九百九十九人<sup>にん</sup>を占<sup>し</sup>める凡夫<sup>ぼん ぶ</sup>にとっては、流通分<sup>る とうぶん</sup> はなくてはならぬものでありますから、謙虚<sup>けん しょ</sup>な気持<sup>き ち</sup>で、本論<sup>ほん ろん</sup>である 正宗分<sup>しょう じゅう ぶん</sup> とおなじように熱心<sup>ねつ じん</sup>に学<sup>まな</sup>んでいかなければなりません。

#### 四信五品<sup>し しん ご ほん</sup>

さて、この品<sup>ほん</sup>に説かれてある信仰者<sup>しん こう しゃ</sup>の心<sup>こころ</sup>がけについては、天台大師<sup>てん だいいだい し</sup>によって、わかりやすく記憶<sup>き おく</sup>しやすいように 四信五品<sup>し しん ご ほん</sup> というふう<sup>せい り</sup>に整理<sup>せい り</sup>されています。

四信<sup>し しん</sup> というのは 在世<sup>ざい せい</sup>の四信<sup>し しん</sup> ともいい、お釈迦<sup>しゃ か</sup>さまご在世<sup>ざい せい</sup>中<sup>ちゅう</sup>における信仰<sup>しん こう</sup>のありかたを四つ<sup>だん かい</sup>の段階<sup>わ</sup>に分<sup>わ</sup>けたものですが、もちろん末世<sup>まつ せ</sup>のわれわれにも、そのまま通用<sup>つう よう</sup>することです。

一、一念<sup>いち ねん</sup>信解<sup>しん げ</sup>…… 仏<sup>ほとけ</sup>さまの生命<sup>いの ち</sup>の無量<sup>む りょう</sup>であることを、一念<sup>いち ねん</sup>にでも信解<sup>しん げ</sup>することのたいせつさです。それが 諸法<sup>しよ ぼう</sup>実相<sup>じつ じょう</sup>へのめざめ<sup>そう</sup>であり、一大<sup>いち だい</sup>飛躍<sup>ひ やく</sup>であるからです。

二、略解<sup>りやく げ</sup>言趣<sup>ごん じゆ</sup>……一より一歩<sup>いっ ぽ</sup>進<sup>すす</sup>んだ段階<sup>だん かい</sup>で、一念<sup>いち ねん</sup>に仏<sup>ほとけ</sup>の無量<sup>む りょう</sup>寿<sup>じゆ</sup>を信解<sup>しん げ</sup>するばかりでなく、その教え<sup>おし</sup>にふくまれる大きな意味<sup>い み</sup>を、あらまし理解<sup>り かい</sup>することです。おおづかみにいえば、仏<sup>ほとけ</sup>さまの寿命<sup>じゆ めい</sup>が不生<sup>ふ しょう</sup>不滅<sup>ふ めつ</sup>であれば、それと一体<sup>いっ たい</sup>であるわれわれの仏性<sup>ぶつ じょう</sup>も不生<sup>ふ しょう</sup>不滅<sup>ふ めつ</sup>である。ただ、われわれの仏性<sup>ぶつ じょう</sup>はいろいろと迷<sup>まよ</sup>いの雲<sup>くも</sup>にとざされているために、仏<sup>ほとけ</sup>さまとはちがった存在<sup>そん ざい</sup>と考<sup>かん</sup>えられるだけのことである。だから、その迷<sup>まよ</sup>いの雲<sup>くも</sup>をひとつひとつとりはらっていけば、かならず仏<sup>ほとけ</sup>さまと完全<sup>かん ぜん</sup>に一体<sup>いっ たい</sup>になることができるのだ<sup>のだ</sup> という理解<sup>り かい</sup>にたつすることです。

三、広<sup>こう</sup>為<sup>い</sup>他説<sup>た せつ</sup>……二よりさらに一段<sup>いち だん</sup>上<sup>あ</sup>がった、信仰者<sup>しん こう しゃ</sup>のありかたです。すなわち、その教え<sup>おし</sup>に説<sup>と</sup>かれた真実<sup>しん じつ</sup>をほぼ理解<sup>り かい</sup>するだけでなく、いよいよすすんで、ひろく法華<sup>ほ け</sup>経<sup>きょう</sup>の教え<sup>おし</sup>

を学び、それを心に植えて忘れて、その教えに帰依と感謝のまごころをささげ、しかも世のおおくの人びとにもすすめて教えを聞かせ、仏道に引き入れてあげることです。

四、深信観成……いよいよ仏の無量寿にたいする信解が深まって、いつも仏さまが自分と一しょにおられるのだということを如実に感じるようになった境地をいいます。こうなれば、仏さまの教えのとりの世界観・人生観を完成し、つねに法悦の世界に住むことができるのです。

五品というのは、滅後の五品ともいい、世尊ご入滅後における信仰者のありかたと、その功德を次の五つに分けて説かれているものです。

一、初随喜……仏の無量寿を聞いて、頭のうでで理解するだけでなく、「ああ、ありがたい」という歡喜の念を起こすことです。これが信仰というものです。このことについては、あらためてつぎの《随喜功德品第十八》においてくわしくお説きになります。

二、読誦……初随喜を起こしただけでも、すでに眞實の信仰を得たといえるのですから、ましてや、その教えを一心に学び、誦んじ、しっかり心にたもつものは、さらに一歩すすんだ段階にはいったわけです。

三、説法……読誦によって、仏さまの教えのありがたさがしみじみわかってきますと、それをひとにも説いてあげずにはおられなくなります。そうすることによって、自分もますます向上し、ひとをも教化できるのですから、その功德はさらに大きなものになるわけです。

四、兼行六度……六度というのは六波羅蜜のことで、この教えを受持し、読誦し、説法するという行に兼ねて、六波羅蜜をも行ずるという意味です。そうすることによって、いよいよ菩薩としての境地が高くなっていくわけです。

五、正行六度……完全に六波羅蜜を行ずるようになった段階で、こうなれば、いよいよ仏の悟りにも近づいたことになるのです。

すい き く どく ほん だいじゅう はち  
**随喜功德品第十八**

こじゅうてんでん  
**五十展転**

この品には、初随喜の功德をさらに強調し、くわしく説いてあります。なぜこのようにくりかえして説いてあるかといいますと、教えに随喜する、すなわち心から「ありがたい」とおもうその感激と歡喜こそが、信仰にとって欠くことのできない、大きな根本要素であるからです。

お釈迦さまはここで、「もしある人が法会のなかで、この教えを聞いて、『ありがたい』という喜びを感じ、ほかのだれかに、自分の力でできる程度でいいから、いま聞いたばかりの話をしてあげたとしましょう。それを聞いた人もまた、おなじような随喜の心を起こし、おなじようにほかの人に伝えたとしましょう。こうして五十回も転々と伝えられたとして、その五十回目この教えを聞いた人が、『ありがたい』という感激をおぼえたとしたら、その功德は、ある大金持ちが一生のあいだありとあらゆる布施を行なったその功德の、何億倍もの価値があるのです。いわんや、最初に法会でこの教えを聞いた人の受ける功德となると、まことに無量無辺であります」とお説きになっておられます。

最初の方は、信仰的な雰囲気をもつ法会のなかで、よく法に通じ、説得力もある指導者の話を聞いたのですから、おおいに感激し、大きな功德を受けるのはもったもですが、それがつぎからつぎへと転々と伝えられた五十人目ともなれば、話術もなにも抜きにした、信仰的な雰囲気もない、骨ばかりの話になりましょう。ところが法華経は、その骨(内容)がかぎりなく偉大ですから、五十人目にいたっても、感銘をおぼえざるをえないのです。

それならば、その感銘による功德が、なぜ一生のあいだ布施をしつづけた大金持ちの受ける功德よりも大であるかといえ、第一に、正法を聞いておぼえる真の喜びは、なにもものにも比べることのできない尊いものであるからであり、第二に、その喜びはこれからさき人から人へと展開していく無限のエネルギーをもっているからです。

ほうえん あ とうと とうと  
**法縁に会う尊さ・それを与える尊さ**

つぎに、随喜までにはいたらなくても、説法の座でほんのちょっとのあいだこの法華経の教えを聞いただけでも、その功德はたいへん大きく、ましてや、その説法会であとからきた人に「さあ、ここにすわってお聞きなさい」と座席をゆずってあげるような行ないをした人の功德は、さらに大きいものであることが説かれています。

これは、つまり法縁のたいせつさをいってあるのです。われわれはすべて仏性をもっていることにまちがいはないのですが、縁あってその仏性が目を覚まさないければ、救いにたつすることはできません。ですから、なによりもまず教えに触れることが先決条件であり、

したがって、<sup>おし</sup>教えに<sup>ふ</sup>触れる<sup>えん</sup>縁というものはじつに<sup>とうと</sup>尊い、たいせつなものであります。いわんや、<sup>たにん</sup>他人にその<sup>えん</sup>縁をあたえらるとなると、さらに<sup>とうと</sup>尊い<sup>こうい</sup>行為といわなければなりません。

<sup>よう</sup>要するに、この<sup>ほん</sup>品は、<sup>おし</sup>教えを<sup>き</sup>聞いて<sup>こころ</sup>心から<sup>かんげき</sup>感激をおぼえる<sup>すなお</sup>素直な<sup>こころ</sup>心、また<sup>かんげき</sup>感激をおぼえたらそれをひとに<sup>わ</sup>分けあたえずにはおられなくなる<sup>じゆんしん</sup>純真な<sup>きもち</sup>気持……これが<sup>しんこうしゃ</sup>信仰者にとってもっともたいせつであることが<sup>おし</sup>教えられているわけです。

## 法師功德品第十九

### 六根清淨の功德

まえの《隨喜功德品第十八》の最後のほうにもすこしありましたが、この品には、五種法師（受持・読・誦・解説・書写の五つの行）を積極的に行なう人が、目や耳や鼻や舌や身や意（六根）に受ける功德について、くわしく説かれています。ひじょうに象徴的な表現がしてありますので、現代の人にとってはたいへん不思議なような感じを受けるでしょうが、われわれは、その奥にある真実を、よくつかみとらなければならないとおもいます。

### 菩薩の四無畏

お釈迦さまは六根清淨の功德の最初に、眼の功德について説かれますが、その偈のなかに無所畏の心を以て是の法華經を説かんという一節があります。

これはむかしから菩薩の四無畏として尊ばれてきたものです。つまり、「なにものをも恐れず、はばかりことなく、信ずるところを説く、どうどうたる心境や態度」のことです。これは、仏さまの無所畏の心（仏の四無畏）に対応するものですが、末世にこの法華經を説きひろめようとする菩薩にとって、もっとも大切な心得であるといえましょう。

まず第一は総持不忘といい、自分が聞いたすべての教えをしっかりと記憶して忘れることがなければ、だれにたいして法を説いても、畏れはばかりとこころがないということです。

第二は尽知法薬といい、衆生のひとりひとりの機根と、心のもちかたのちがいによって、それぞれに適心した法の薬を処方できれば、なんの心配もなく法を説くことができるということです。

第三は善能問答といい、どんな質問や反駁にたいしても、真理に従って、はっきり筋道を立て、だれにも納得できるように答えてあげられれば、何の恐れもなく法を説くことができるということです。

第四は能断物疑といい、一切衆生をことごとく救おうという仏さまの大慈悲に通ずるような境地に立って、微妙な疑問にたいしても「仏さまのご真意はこうなのだ」といってあげられれば、どんな人にたいしても、畏れはばかりとこころがなく法を説けるというのです。

こう見てきますと、人に法を説くということは、まことに容易ならぬことであると、おじげついてしまう人があるかもしれません。しかし、おじけてしまっただけではいけません。ここにのべたのは、あくまでも説法者の理想像であって、ここまでたっしたら、もはや大菩薩

です。その大菩薩にしても、はじめから大菩薩だったわけではありません。長い年月、不断の努力をつづけ、たくさんの試行錯誤を経てこの境地にたっしたのです。

ですから、われわれ菩薩行を修しているものは、この四つの理想像をいつも胸におき、この四箇条を心のいましめとして、法を説けばいいのです。もし、むずかしい問題につきあたったり、もてあますような質問を受けた場合は、率直に「これはわたしの力に余る問題ですから、よく調べ、またはしかるべき人に教えを受けて、後日それをお取り次ぎしましょう」と答えるべきであって、その場をいいかげんにごまかすようなことをしてはなりません。

そして、そういう答えかたは、けっして説法者のねうちを低くするものではなく、かえって聞く人の信頼性を高める結果となるものです。

### 世法も仏法に一致

この品のなかに、見のがしてはならぬことばがあります。それは 若し俗間の経書・治世の語言・資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん という一句です。現代語に訳せば、「もしその人が、日常生活についての教えや、世を治めるための言論や、産業についての指導を行なっても、それはおのずから正法に合致するものでありましょう」ということです。

正法というものは、けっしてたんに精神的な、個人的なものではなく、かならず社会へのひろがりをもつものです。そして世法を正しく生かすものです。そうでなければ、究極において人類全体を救うことはできないのです。このことは、よくよく胸に刻んでおきたいものであります。

## 常不輕菩薩品第二十

仏性を拝むという一つの行だけで

人間の不幸のおおもとは、「肉体だけが自分である」とおもいこんでいることです。この肉体へのとらわれがあるかぎり、なによりも自分の肉体を維持し、満足させることを第一に考え、ほかの人のことなど二の次になりますから、つい奪いあいや足のひっぱりあいの争いが起こり、したがって不安・悩み・苦しみなどの絶えることがないのです。

ですから、人間を根底から救い、人類社会をほんとうに平和にするには、どうしてもこの根本のとらわれをうち破り、「人間の本质は仏性である」という真実にめざめさせなければならないのです。日常の心のもちかたや行ないについて、悪いことをやめ善いことをするように一々こまかく指導するのも、人間をよくするだいじな方法ではありませんけれども、ただそれだけではなかなか効果があがりません。ところが、人間の本质が仏性であるという真実にめざめれば、ひとりで悪いことなどできなくなります。みっともなく、恥ずかしくて、できはしないのです。

また、ほかのおおくの人びとについても、みんなが本仏に生かされ、仏性をもつ存在であるという根本道理にめざめるならば、おたがいがきょうだいであるという実感が湧きますから、ほんとうに仲よくすることができるわけです。

そこで、この品において、おおむかしに常不輕菩薩という人がいて、ひとの仏性を拝むというただ一つの行をつづけることによって、自分も仏の悟りを得、おおくの人をもその悟りへみちびいた話が説かれるわけです。

その常不輕菩薩は、人さえ見れば、「わたしはあなたを軽んじません。あなたはかならず仏になれる人だからです」といって拝みました。仏になれるというのは、つまり仏性があるということにほかならないのですが、一般の人びとはその意味がわかりませんので、「ばかにしている」と怒って、石を投げたり、棒をふりあげたりするのです。そうされると、常不輕菩薩は走って逃げはするのですが、遠くのほうから、あいかわらずその人たちを拝んで、「あなたがたは仏になれる人たちです」と呼びかけるのでした。

そういうただ一つのことを根気よく行なったおかげで、常不輕菩薩は、寿命が尽きてまさに死のうとするとき、法華經の教えをしっかりと悟ることができ、そのために不生不滅の仏性を自覚することができました。そして、なんどもこの世に生まれ変わりながら、その真実の教えを説きつづけ、ついに仏の境地にたちいたったのです。

このお話をなさったのち、じつはその常不輕菩薩というのはお釈迦さまの前世の身だったことをお明かしになります。つまりお釈迦さまも、人間すべてがもっている仏性をお悟りになり、その顕現に努力をつみかさねられたからこそ、仏の境地にたっせられたの

だ……というわけです。

### おし 教えを説くこともたいせつ

その常不輕菩薩の行というのは、はじめはたんに人びとの仏性を拝むという行だけでしたが、人びとがようやく自分の仏性に気づくようになったら、こんどはそのことを教えとして説かれました。そのことを、われわれも見習わなければなりません。まずすべての人の仏性を認め、それを拝むことから出発し、それから真実の教えである法華経を説いて、大衆の仏性を顕現することへとすすまなければならないのです。そういう積極的な努力をしてこそ、自分も悟りを深めることができますし、世の中もほんとうによくなるのです。

### ねば 粘りづよい努力

その努力も、常不輕菩薩のように、いつも変わらぬ信念をもって、気長に、粘りづよく行なわなければなりません。すこしやってみて、おもわしい結果があらわれないからといって、すぐあきらめてしまったり、現実の世界のあまりのひどさに失望してさじを投げてしまったりしたのでは、自分も、世の中も、ついに救われることはないでしょう。

人間の仏性は不生不滅なのですから、「なんども生き変わり死に変わりしながら、あくまでもこの偉大な仕事をしつづけるのだ」という、不動の決意をもたなければならないのです。その点においても、常不輕菩薩は尊い手本であるといわなければなりません。

によらいじんりきほんだいにじゅういち  
如来神力品第二十一

この品は釈迦牟尼仏をはじめとする諸仏が不思議な神力をあらわされて、「これまでの説法でいろいろの説きかたをしてきたが、真理はつねに一つである」ということ、つまり一仏乗ということ、聴聞の大衆につよく印象づけられる章です。

じゅうだいじんりき  
十大神力

この神力は、全部で十種類あります。その第一は、出広長舌です。仏さまのお説きくださることはすべて真実であり、その目的は一つであることを象徴したものです。これは、迹仏も本仏もつまるころは一つであり、われわれが信仰する対象はただ一つであるということの意味（二門信一）します。

第二は、毛孔放光です。仏さまのお説きくださる教えは、この世のあらゆる生あるものにとって光明であり、迷いの闇をうち破るものであることを象徴しており、迹門の教えも、本門の教えも、その理は一つであるということの意味（二門理一）します。

第三は、一時警欬（いちじきょうがい）です。すべての仏さまの教えは、一つに帰するということの象徴で、三乗即一仏乗を意味（二門教一）します。

第四は、俱共弾指です。「みなと一緒にこの教えを説き広めよう」という仏さまの約束をあらわしたもので、自他一体ということの意味（二門人一）します。

第五は、六種地動です。天地が感動して、うち震えたということです。これは、菩薩行の実践ということの意味（二門行一）します。

第六は、普見大会です。あらゆる衆生が、すべての仏・菩薩を見奉ることができたということです。これは、現在はさまざまな機根（教えを悟る能力）の人びとであつても、未来においては、すべての人が完全に、仏の悟りを得られる機根になるということの意味（未来機一）します。

第七は、空中唱声です。法華經の教えこそすべてを救い、生かすものであることを象徴しています。そして、未来において、世界中のすべての宗教が、一つの目的に向って大同団結することを意味（未来教一）します。これこそ、宗教協力の究極の理想の姿といえましょう。

第八は、咸皆歸命です。すべての生きとし生けるものが「南無釈迦牟尼仏」と唱えたということです。これは、未来においてはすべての人が、法華經の教えを信じ、りっぱな人格をそなえるということの意味（未来人一）します。

第九は、遙散諸物です。仏さまに、帰依と感謝のまごころをささげることを象徴ですが、未来においては、すべての衆生が、仏さまのみ心になつた行ないをするという

ことを意味（未来行一）します。

第十は、通一仏土です。すべての世界が、ひと続きの仏国土となるということです。これは、世界中が一つの真理に従って、大調和した世界になることを意味（未来理一）します。

これらは、法華經の特徴をあらゆる角度から表現したもので、この世のありかたの究極の理想を示したのもでもあります。

#### 四句要法

十大神力を現わされたお釈迦さまは、さらに、次のようにお説きくださいます。

「法華經の功德の要点をまとめていうならば、如来の悟った一切の法（如来の一切の所有の法）と、如来のもつ自由自在の一切のはたらき（如来の一切の自在の神力）と、如来の胸に満ち満ちている一切の重要な教え（如来の一切の秘要の蔵）と、如来の一身が経てきた一切の内的・外的な深い経験のすべて（如来の一切の甚深の事）を、みなこの教えのなか

にのべし、説き明かしてあるのです」  
これを四句要法といい、法華經全体の功德の総まとめであるといえるものです。つまり、法華經のもつ無限の価値、教えとしての完全無欠さが、ここであらためてお釈迦さまご自身のおことばとして、証明されているわけです。

#### 結要付属と即是道場

さて、ここでしっかりと心に刻みこんでおかねばならない、たいせつなことがあります。それは釈尊が、以上の十大神力を説き示されたり、四句要法として法華經の功德を総まとめてくださったのは、上行・無辺行・浄行・安立行の四大菩薩を筆頭とする地涌の菩薩たちに、この法華經を弘めるお役を託されるためであったということです。このことを古来、結要付属といい、次の《囑累品第二十二》の総付属に対して別付属ともいい、非常に重要なところとされており、

そして、その菩薩の行として、再三五種法師の修行を説かれ、釈尊の付属にこたえて、菩薩行が実践されているところこそが、道場である（即是道場）といっておられます。

つまり、尊いのは法華經の教えそのものであり、教えの実践なのです。これらのことは、地涌の菩薩であるわれわれの信仰生活の基本となるたいせつなことから、いやが上にもつよく、心に刻みこんでおきたいものです。

ぞく りい ほん だい に じゅう に  
嘱累品第二十二

ちくごう かんげき なんじ よろこ  
値遇への感激と難事にいどむ喜び

ぞく りい ほん だい に じゅう いち  
嘱累というのは 面倒を頼む、委嘱する ということです。前の《如来神力品第二十一》  
さいご せつめい ふぞく おな  
の最後に説明した付属ということと同じです。この品は、お釈迦さまが、すべての菩薩の頭  
を おなでになって、「この 尊い悟りを後世に伝えるという一大事を、みんなに託したいの  
です。どうか、一心にこの法を説きひろめて、ひろくあらゆる衆生の利益を増進させてく  
ださい」とお頼みになる章です。ですから、このことを古来 総付属 とよんでいます。

もちろん、菩薩たちはこのおことばをうけたまわって、この上ない感激をおぼえ、この難  
じ よろこ かん かつい ひょうめい  
事にたちむかうことに喜びを感じ、固い決意を表明します。この 値遇にたいする感激  
と なんじ よろこ げんだい ぼさつ こころ  
と 難事にたちむかう喜び を、われわれ現代の菩薩もじっくりと心にかみしめなけれ  
ばなりません。それがこの品の最大の要点です。

ふたたび りょうじゆせん  
再び霊鷲山へ

ほん ほ けきょう せっぽう おお いちだんらく  
この品で、法華経の説法に大きな一段落がついたのです。どういう一段落かといいます  
と、仏さまの寿命が無量であることと、そのことを確信することの功德を説くいちばん  
じゅうよう ぶぶん かんけつ ほ けきょう りそつ こくう ば まく と ぶたい  
重要な部分がここで完結し、法華経のドラマの《理想(虚空)の場》が幕を閉じ、舞台は  
ふたたび りょうじゆせん お げんじつ りょうじゆせん ば  
ふたたび霊鷲山に降りて、《現実(霊鷲山)の場》となるわけです。

やく おう ぼ さつ ほん じ ほん だい に じゅう さん  
**薬王菩薩本事品第二十三**

ぼ さつ しゅ じょう て ほん  
 菩薩は衆生の手本

これまでの説法で、真理はよくわかりました。いよいよこれから、その実践にうつらなければなりません。ところが、高遠な真理を日常の行為のうえにどう生かせばいいのか、凡夫にとってはなかなか見当が付きません。その問題を解決するには、完全円満な仏の境地の一步手前であって、ある一つの美しい徳、ある一つの尊い行為を代表する菩薩を見習うのが、まずもって順当な道だといわなければならないのです。

それで、この品以降の説法には、主としてそれがのべられているのです。衆生に、より身近な手本を示すことによって、発奮をうながされるわけです。

けん しん て き じっ せん さい だい く じょう  
 献身的な実践が最大の供養

さて、この品に登場する薬王菩薩は、人間の病気を治すことを誓願した菩薩ですが、ここではその前世の身の物語（本事）により、献身（自己犠牲）的な行為によって仏および仏法を供養するという徳の典型としてあげられているのです。

薬王菩薩の前世の身は一切衆生意見菩薩という菩薩で、日月浄明德如来という仏さまにつかえて法華経の教えを聞き、ひじょうに長い年月のあいだ修行した結果高い境地にたつすることができました。そこで、日月浄明德如来と法華経の教えを供養（帰依と感謝のまごころをあらわす行為）したいとおもい、神力をもって天から花や香を降らせて供養したのですが、しかし、そういうことよりも、身をもってする供養がよりたいせつだと考え、さまざまな香油を飲み、身に塗ったうえで、自分のからだに火をつけて燃やしました。その火は千二百歳のあいだ燃えつづけ、その光は世界じゅうを照らしました。

一切衆生意見菩薩はこの供養をなしおわって、寿命がつかたのですが、その後また日月浄明德如来の国土に、国王の子として生まれ変わりました。そして、生まれるとすぐ如来を礼拝しにまいりました。すると、如来は、「わたしは今夜半に入滅しますが、これからさき仏法を世にひろめていくことを、そなたに頼みます」とおおせられ、そのとおりに入滅してしまわれました。

一切衆生意見菩薩は、泣く泣く仏身を火葬にし、その仏舍利を八万四千の瓶におさめてくに国じゅうにまつり、それぞれりっぱな塔を建てて供養しました。それでも供養が足りないとおもった菩薩は、偉大な福德に輝く自分の両腕に火をつけて燃やしました。その光明に照らされて、おおくの人々が尊い発心をしたのですが、七万二千歳たってそれが燃えつき、菩薩の両腕がなくなったのを見て、人びとは自分たちのだいじな導師の姿を歎き悲しみました。

それを見た菩薩は、「わたしは両の腕は捨てたけれども、そのかわりに永遠不滅の身を得ることができたと信じています」といいました。その瞬間に、たちまち両の腕はもとどおりになってしまいました。

この物語で教えられている要旨は、

- 一、人間にとって自己犠牲ほど高貴な精神はない。
- 二、実践こそが教えにたいする最高の供養である。

という二点に要約することができます。

### 十論称歎と広宣流布

この一切衆生意見菩薩の物語の後、法華經のすばらしさを十の譬えで説かれる、いわゆる十論称歎がはじまります。それに続いてお釈迦さまは、法華經の教えを実践するものの功德をさまざまに説いて下さいます。

このようにお釈迦さまは、まずわれわれの心を法華經に開いて下さり、そして、いよいよ我が滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶して悪魔・魔民・諸天・龍・夜叉・鳩槃荼等に其の便を得せしむることなかれと、末法の世こそ、法華經の教えを説き弘める時であることを、力づくよく宣せられるわけであります。

末法、それはまさしく現代であります。この末法に生きるわれわれにこそ、最勝の教えである法華經を広宣流布する重大な使命があるのです。つまりここで、お釈迦さまから直接われわれに、その使命が与えられたというわけです。

## 妙音菩薩品第二十四

《薬王菩薩本事品第二十三》の説法を終えられたお釈迦さまは、頭の頂上と眉間の白毫相から大光明（智慧の光）をお放ちになりました。

### 妙音菩薩の娑婆世界来訪

すると、はるか東方の浄光荘嚴という国に浄華宿王智如来という仏さまがおられ、そのお弟子に妙音というすばらしい大菩薩がおられるのが見えてきました。その菩薩はその仏さまに、「娑婆世界へ行って釈迦牟尼仏を礼拝し、大菩薩たちとも語りあってみたいとぞんじます」ともうしあげます。

すると、その仏さまは「よろしい。いってきなさい。しかし、娑婆世界はこの国にくらべてたいへん汚く、仏さまのおからだも小さいために、あの国の仏・菩薩や国土を軽んずる気持が起こりやすいのですが、それはたいへんなまちがいだから、気をつけなさい」とおさとしになります。浄華宿王智如来のせいの高さは六百八十万由旬もあり、妙音菩薩すら四万二千由旬もあり、身は金色に輝いているのですから、娑婆の仏・菩薩とはくらべものにならないわけです。

ところが、その美しくも偉大なすがたの妙音菩薩が霊鷲山に到着するや、お釈迦さまのみ前にひれ伏して礼拝し、ていねいに挨拶もうしあげたのです。そして、「多宝如来をも拝したいのですが、世尊のお力でお目にかからせていただけませんか」とお願いいたします。釈迦さまがそのことを多宝如来に伝えられますと、たちまち「よくぞ釈迦牟尼仏を供養にきました」という多宝如来のおほめのことばがひびいてきました。

このありさまに不思議の感をおぼえた華徳菩薩が、お釈迦さまにわけをおたずねしますと、お釈迦さまは、妙音菩薩が過去世において雲雷音王仏という仏さまに、一万二千歳のあいだ音楽を奏し、八万四千の七宝の器をささげて供養もうしあげた功德によってこのような神力を得たのだとお話しになります。しかも、妙音菩薩はいまここにおられるおひとりだけでなく、いろいろな身となって所々方々にあらわれ、衆生のために教えを説かれるのだとおおせられました。

一同がそのお話をうかがって、ひじょうに深い感銘を受けますと、妙音菩薩も娑婆にきた目的を果たしましたので、浄光荘嚴国へ飛び帰られたのでした。

以上がこの品のあらましですが、浄光荘嚴国というのは、理想の世界です。理想というものは心のなかに創りあげたすがたですから、その国土はあまねく光り輝き、そのお仏・菩薩はひじょうに巨大な、しかもこの世では見られぬような美しい身をもっておられるのです。現実の世界（娑婆）というものは、理想の世界にくらべると、国土はたいへん汚

く、その**仏・菩薩**もひじょうに小さく見えます。

### 理想を現実化する努力こそ

ところが、**浄華宿王智如来**のおさとしのとおり、**妙音菩薩**は**娑婆世界**のお**釈迦**さまを心から崇め、拝みました。ということはつまり、理想世界を現実にこの**娑婆**に建設しようと努力なさるお**釈迦**さまは、理想そのものより尊いお方であるということにほかなりません。理想は、たんに心のなかにえがくだけでは、まだ一種の夢にすぎません。それを現実化してこそ、あるいは現実化の努力をしてこそ、その価値は生きてくるのです。これが、この品の第一の要点です。

### 妙法を大衆に伝える

つぎに、**過去世**の**妙音菩薩**がながいあいだ**音楽**を奏し、**八万四千**の**七宝**の器をささげて、**仏**さまを**供養**したということですが、**音楽**を奏したというのは、**妙法**を**人**びとの胸にひびかせたということの象徴です。**八万四千**の**七宝**の器をささげたというのは、**仏**さまの**無数**の**教え**を世の**大衆**に伝えたということです。**仏**さまの**説**かれた**妙法**をひろく世の**大衆**に伝えることこそ、**仏**さまにたいする**最大**の**供養**であることを、お**釈迦**さまはここに示されているのです。これが、この品の第二の要点です。

### われらも妙音菩薩

それがわかれば、**妙音菩薩**がいろいろな身となり、**所々**方々にあらわれて**法**を説かれるということの意味も、おのずから明らかになってくるでしょう。われわれの**周囲**にも、**無数**の**妙音菩薩**がおられるのです。いや、われわれ自身も、**法華經**の**教え**にもとづいてひとのために**法**を説けば、まちがいなく**妙音菩薩**の**化身**だということができるのです。こういう**自覚**をもつかぎり、どうしても**正法流布**のために**勇猛精進**せざるをえなくなるはず  
です。これが、この品の第三の要点です。

## 観世音菩薩普門品第二十五

この品は、無尽意菩薩がお釈迦釈迦さまに、「観世音菩薩はなぜ観世音という名をもたれるのですか」とおたずねしたのにたいして、そのわけをくわしくお説きになる章です。

妙法に救われ慈悲で救う

この品でたいせつなことは、ともすれば観世音菩薩は他力の救いを頼む対象のように考えられてきましたが、そうではなく、じつは真実の智慧の象徴であるということです。真実の智慧といっても厳密にいえばすべての現象を、空にもとらわれず、仮にもとらわれず、双方の融合相即したのものとしてとらえる智慧すなわち中諦の真智です。これを人間に即していえば、人間の平等相をも生かし、差別相をも生かし、どんな人の、どんな場合にもピタリとあてはまる、自由自在の智慧です。諸法実相を説く法華経(妙法)そのものです。

観世音菩薩は、そのような真実の智慧の持ち主であるとともに、大悲代受苦(おおくのひとに代わってその苦しみを受けてあげようという大慈悲心)の持ち主でもあるのです。

われわれがほんとうに救われるには、妙法を知り、妙法をおもい、妙法にしたがって行動するよりほかはありません。また、われわれがほんとうに他を救うには、慈悲心にもとづく自己犠牲的な行動によって、その人を妙法の道へみちびくよりほかに方法はないのです。この品に、観世音菩薩を念ずることによって七難からのがれることがくわしく説かれています、それらはすべて、このことを教えられているのです。

そうはいっても、むかしの人はそんな抽象的なことをピタッと確実につかまえることができませんでしたので、観世音菩薩というすぐれた洞察力(世間の音を観る=世のすべての動きを知り、すべての人の欲するところを見とおす)をもち、三十三身というさまざまな姿となっていたるところにあらわれ、大慈悲心をもってあらゆる苦しみを救ってくださる、美しいやさしいお方を設定して、そのお方に心をかよわせれば、心が妙法に感応して救われる……と説かれたわけです。

観世音菩薩になりたい

ですから、現代のわれわれは、観世音菩薩というすばらしい大人格を心におもい浮かべ、「あのようにになりたい」というあこがれと願いをもたねばならないのです。そのあこがれが強烈であれば、どんな苦しみがやってもかならずそれを乗り越えることができます。またそういう願いをもっておれば、ひとの苦しみをみれば、救いの手をさしのべずにはいられなくなります。

## 普門示現

この観世音菩薩になりたいという願いこそが、普門示現ということの神髄に他なりません。

普門示現の普とは、ひろくあまねく、どこにもかしこにも、という意味です。門というのはもちろん出入口のことですが、それから転じて家という意味にもちいられます。また、部門などというように、ものごとを分類するときのひとつの区分けにもちいられます。ですから、普門というのは、あまねくすべての家にという意味もあるし、また人生問題のあらゆる部門にという意味もあるわけです。ひっくり返せば、この世のいたるところに、ありとあらゆる問題と、あらゆる場面に、自由自在にということになります。

つまり普門示現とは、観世音菩薩がこの世のいたるところに、あらゆる問題と、あらゆる場面にそれぞれふさわしい姿をとって自在に現われ、人びとを救い導いてくださるということの意味しているわけです。

このような観世音菩薩になりたいと願うことは、家庭において、社会において、国家において、さらに広くは世界においてそれぞれ置かれた立場にふさわしく、人びとの苦しみ・悩みに応じた具体的な救いの手をさしのべていこうと願うことです。そういう行動こそが、観世音菩薩の大悲代受苦の大慈悲心そのものであるからです。

こうした代受苦の行動を、どのような立場においてでも、どのようなささいなことでもいから、一人でも多くのひとが実践にうつしたならば、家庭・社会はもちろんのこと、世界の平和も決して夢ではなくなるのです。そういうことですから、この普門示現ということがこの品の最大の要点になるわけでありませう。

## 徳も力も妙法とその実践から生ずる

さてこの品でもうひとつ見のがしてならないことは、観世音菩薩の広大な徳と力に感激した無尽意菩薩が、自分の首飾りをささげたところ、観世音菩薩は、すぐさま半分を釈迦牟尼世尊に、半分を多宝仏塔にささげたということです。それは、観世音菩薩の偉大な徳と力も、つまりは理としての妙法(多宝仏塔)と、それを説き実践されたお釈迦さまのおかげであるということです。これを見ても、ただ「観世音菩薩を拝めば救われる」などと考えるのが大きなまちがいであることは、明白なのであります。

## 陀羅尼品第二十六

この品は、法華經のこれまでの説法に感激した人びとが、「かならずこの教えを守護いたします」と、つよいことばで誓言し、その守護のための神呪を説いた章で、全章が梵語そのままの陀羅尼(総持真言 = あらゆる悪をとどめ、あらゆる善をすすめる力をもつ秘密のことば)に満ちています。

その陀羅尼は、ほとんど神々の名(もしくはその異称)の列挙であり、その神々への呼びかけであるといえますから、つまりは神々への感応を求めるということになりましょう。

### 五種不翻

この品には、梵語そのままのことばがいくつもでてきます。なぜ中国語に翻訳しなかったかということ、鳩摩羅什をはじめ、仏教経典を中国語に翻訳した人たちは、どうしても翻訳しないほうがよいと判断したものは、原語の音に似た漢字をあててすませ、わざと原語のまま残しておいたのです。それを五種不翻といえます。

- 一、インドの固有の動植物や、伝説上のものの名。
  - 二、一つの語におおくのことがふくまれているので、一語に翻訳すると原意が十分に尽くされないもの。
  - 三、神秘的なこと。いわゆる秘密の語でこれを翻訳すれば、その奥深い神秘的な意味が滅殺されてしまうもの。
  - 四、むかしからの習慣にしたがって、原語のままにしておいたもの。
  - 五、翻訳すれば、真の意味を失ってしまうもの。
- 以上の五種類の場合があります。

みょうしやう ごん のうほん じほん だい に じゅうしち  
妙莊嚴王本事品第二十七

この品は、遠いむかしにおられた妙莊嚴王という国王と、その妃の淨徳夫人と、淨蔵・淨眼というふたりの王子の物語です。

みょうしやうごんのう こじ  
妙莊嚴王の故事

妃とふたりの王子は仏法に帰依していましたが、王はほかの教えに心酔していましたので、なんとかして仏法のありがたさを知らせてあげたいとおもっていました。たまたま雲雷音宿王華智仏という仏さまが、法華經という至高の教えをお説きになることを聞き、王子たちはぜひ父の王をもさそって聴聞にゆきたいと念願し、母の妃に相談しました。すると妃は、「父上の心を動かすには、おまえたちが奇跡をあらわしてみせるほかはありません」と示唆しました。

そこで、王子たちは父王の前にゆき、空中に飛びあがって、空の上を歩いたり、頭や足の先から水や火をふきだしたり、地のなかに自由自在にもぐったり、さまざまな不思議を見せました。父王はびっくりして、「いったいだれにそんな神通力を習ったのか」と聞きますと、「法華經という教えをお説きになる雲雷音宿王華智仏がわたくしどもの師です」と答えます。王は、「その仏さまにわたしもお目にかかってみよう」といいだしました。もちろん、王子たちは大喜びしましたが、この機会をのがさず、出家してずっと仏さまのみもとで仏道を学びたいと、母の妃にお願いし、それをゆるされます。

こうして、王子たちの感化によって、王も、妃も、群臣や女官たちも、またおおくの国民も、仏さまのみもとへ法を聞きにまいりました。仏さまは、ただちに妙莊嚴王に「かならず仏の悟りを得るであろう」という保証をあたえられました。そこで王は、国を弟にゆずり、妃およびおおくの家来たちと共に出家したのです。

いんねん  
因縁あればこそ

ながいながい修行ののち、ひじょうに高い境地にたった王は、仏さまにむかって、「わたくしがこうになりましたのも、ふたりの子どものおかげでございます」ともうしあげると、仏さまも「そのとおりです。善い友・善い指導者に会うことは、まことに尊い因縁です。その教化と指導があればこそ、仏を見ることもできれば、仏の智慧を得たいという発心もするのです」とおおせになりました。

ほんとうに因縁というものはたいせつに考えなければなりません。われわれも前世で妙法を實踐し、その徳を因として、今世でよい縁（善知識）に会えたからこそ、今日こうして法華經を学べるのです。

ですから、今世に一人でも多くの人に妙法をお伝えしていくことが、来世でまた、この妙法に会うことができることの最大の保証となるわけです。このことを妙莊嚴王の本事（因縁）から知るといことが、この品の第一の要点であります。

身近なひとをみちびくには

二王子が演じた奇跡というのは、仏法を学び、信ずることによって、人格が一変し、したがって日常の行ないがすっかり変わったことを意味しているのです。そして、そういう行ないを父に見せたというのは、実際の行為によって仏法の真価を証明し、父の発心を誘いだしたということにほかなりません。

ひとを仏法にみちびくには、それを説いてあげるのもむろんたいせつなことです。身をもってする実証が第一の決め手となります。とくに、家族や職場の人をみちびくには、これを欠いてはならないのです。どんなに法を説いても、本人の行ないが感心したものでなければ、だれもなっとくしないばかりか、かえって仏法を軽蔑したり、疑ったりすることになりかねません。この説話には、そのような意味がこめられているわけです。

実証をすすめた母の妃も賢明でしたが、既成観念を白紙にもどして、真理（妙法）に耳を傾けようとした父の王もえらい人でした。このような柔軟な心の持ち主こそ、妙法をつかむことができる人です。

指導的立場の人の信仰

もうひとつ重大な問題が、この品には教えられています。それは、王の信仰が、群臣・眷属および国民までも感化したということです。こういう指導的立場にある人が正しい信仰にはいった場合、その影響がどれほど大きなものであるか、それは現実の問題としてよく考えなければなりません。

信仰はもともと個人の自由で、政治とか権勢とかが介入すると、不純なものになります。しかし、衆に尊敬されている指導者が正法の信仰にはいったために、おおくの人たちが自然とそれに感化されていくということは、けっして不純なことではなく、きわめて正しい影響といわなければなりません。ですから、おおくの人の上に立つ人は、どうか正しい信仰を身につけてほしいものです。もちろん、それを部下におしつける必要はありません。正法にもとづくその人の気品ある人徳は、かならずおおくの部下たちを感化せずにはおかないでしょう。このことも、この品の大きな要点であります。

# 普賢菩薩勸発品第二十八

東方の宝威徳上王仏の国から法華經を聞きにやってきた普賢菩薩が、その概要を聞いただけで感激し、「のちの世においてこの教えを受持するものをかならず守護いたしましょう」ともうしあげますと、お釈迦さまがそれをおほめになって、「普賢菩薩とおなじような行をなすものを、わたしも守護しましょう」とおおせになりました。つまりこの品は、末世の法華經行者を元気づけ励まされる章であります。

## 妙法も実践してこそ

なぜこの最後の章になって普賢菩薩が登場するかといいますと、それには深い意味があるのです。普賢菩薩は、理・定・行をつかさどる菩薩とされていますが、白象王に乗って出現すること(象は川を渡るときも足が水底につく)が象徴しているように、ほかの二徳よりも、徹底した行の典型であると見るべきなのです。

法華經のはじめのほうでは、菩薩の主役は智の文殊菩薩でした。なかほど(とくに《如来寿量品》)においては慈の弥勒菩薩でした。そして、最後の結びにおいて行の普賢菩薩が登場するのは、いうまでもなく、法華經の教えを聞いて諸法実相の智慧を知り(迹門)久遠本仏の大慈悲に生かされている眞実(本門)にめざめたものも、その教えを実践しなければ意味をなさないからです。このことさえわかれば、もうこの品の要旨はつかみえたものといつていいでしょう。

## 四法成就

しかし、この品に、ひじょうにだいじなお釈迦さまのおことばがあります。それは、普賢菩薩の質問にたいして、つぎのようにお答えになっていることです。

「もし信仰深い男女が、つぎの四つのことがらを成就すれば、如来の滅後においても、この法華經の教えをつかんだことになり、法華經の眞の功德を得ることができましょう。

それは、

第一に、自分は諸仏に護念されているのだという絶対の信念をもつこと。

第二に、日常生活に善行を積んで、徳を育てるように努力すること。

第三に、正しい教えを奉ずる人びとの仲間にはいること。

第四に、世の人みんなといっしょに救われるのが眞の救いであることを知り、みずからおおくの人びとを救う心をもつこと」

これは、いままでにくわしく説いてこられた教えを、一般の人も理解し、実践できるよう簡潔にまとめられたものであって、法華經の教えのあまりの深遠さにすこしたじろぎ気

味<sup>み</sup>だった人<sup>ひと</sup>びとも、これによってきっと「自分<sup>じぶん</sup>にもできるのだ」という<sup>ゆうき</sup>勇<sup>えん</sup>氣を得ることで  
しょう。まことに《妙<sup>みょう</sup>法<sup>ほう</sup>蓮<sup>れん</sup>華<sup>げ</sup>經<sup>きょう</sup>》の結<sup>むす</sup>びにふさわしい教<sup>おし</sup>えであります。

# ぶっせつかん ふげんぼ さつぎょうぼうきょう 仏説観普賢菩薩行法經

このお経は、《妙法蓮華經》の最後の《普賢菩薩勸発品第二十八》のあとを受けて、さらに普賢菩薩を主役として説かれたもので、徹底した懺悔の法をお説きになっているために、一名《懺悔經》と呼ばれています。

## ふげんぼさつかん 普賢菩薩を觀ずる

題名の普賢菩薩を觀ずる行法というのは、普賢菩薩の徳をしっかりとみつめることによって、その精神に自分の心が一致するようになり、心が仏道に定まり、ついに普賢菩薩とおなじような行ができるようになる、そのような修行の方法……という意味です。

この品には普賢菩薩の身を見るということがくりかえしくりかえし説かれています。それはつまり、自分の心が普賢菩薩の精神にピタリと一致することにほかなりません。まだそのような境地にたっていないならば、修行のいたらなさを反省・懺悔する必要があるということです。

また、普賢菩薩の身を見ることができても、それで満足せず、こんどは仏身を見るように努力しなければならぬことが説かれています。仏さまのみ心と一致することができてこそ、修行の完成があるからです。

## さんげ きよくち じっそう 懺悔の極致は実相をおもうこと

それゆえに、懺悔の極致は諸法実相を思うことであると説かれています。諸法実相というのは第一義空ということです。六情根を懺悔したうえで、このことを一心に思惟し、徹底することができれば、すなわち仏さまのみ心と一致することができたわけで、もろもろの罪はあたかも霜露のごとく、その大智慧の光によって消滅すると説かれているのです。

## ざいけしんじゃさんげじっせん 在家信者の懺悔の実践

最後に仏さまは在家のもの、特に心ある人びとに、現実的な懺悔の実践を教えてくださいました。

一、三宝を敬い、出家僧などの信仰修行の邪魔をせず、六念の法(仏・法・僧・戒・施・天)を修し、大乘の教えを保つひとをたいせつにし、いつも第一義空(諸法実相)ということに、心をとどめていなさい。

- 二、父母に孝養をつくし、先生や、目上のひとを尊敬しなさい。
- 三、正法にもとづいて国を治め、まちがった考えによって、人民を邪道へ曲らせないよ  
うにしなさい(政治家として調和のとれた正しい政治を行なうこと。あるいは、組織  
などのリーダーとして正しく人びとを導くこと)。
- 四、月の六度の精進日には、自分の治めている土地(影響力の及ぶ処)に布告をだし、  
支配力(影響力)の及ぶかぎりの処で、あらゆるものの生命を尊重するように呼  
びかけなさい。
- 五、因果の道理を深く信じ、仏に至る菩薩道を信じ、久遠本仏はつねに自分とともにいて  
くださり、決して滅しられることのないことを知りなさい。

### 仏教の総まとめ

以上の五つの懺悔の実践は、民主主義の現代においては、われわれ一人ひとりが実践す  
るべき大切な項目であります。特に五つ目の、但當に深く因果を信じ、一実の道を信じ、  
仏は滅したまわずと知るべし とのおことば、これこそ、仏教全体を総まとめした、じ  
つに尊いご指導といわなければなりません。

因果とは原因・結果の法則であり、因縁の法門とも縁起の法ともいい、仏教  
の骨格をなす教えです。

一実の道とは、ただひとつの真実の道、仏になる道、菩薩道のことです。したがっ  
て仏の教えにはさまざまなちがいがあっても、すべてが、あらゆる衆生を仏の境  
地にみちびく というただ一つの真実につらぬかれているということです。これが一実の  
道です。

仏は滅したまわずと知る とは、いうまでもなく、久遠実成の本仏は不生不滅であ  
り、われわれはその久遠本仏に生かされているのだという真実を知ることです。

この三つの信が心のなかに確立すれば、いかなる人もほんとうに自由自在の心境にた  
つすることができます。それこそが、ほんとうの救いなのであります。まことにこれは、法  
華三部經の掉尾を飾るにふさわしい大金言なのであります。